剣侠受難「下」（国枝史郎）

小梅の寮

小梅の里も奥まったほとり、一つの寮が立っていた。金目垣にささやかな門、庭木が小暗くしげっている。南向きの六畳の部屋、経机を前にしとねにより、書見している一人の武士、ほかならぬ袴広太郎。顔色蒼く頬もこけ、全身羸瘦しているのは、杉窪の里で受けた傷が、いまだにたたっているからであろう。しかし眼の色がカラリと明るく、結んだ唇に穏やかさのあるのは、心にゆとりがあるからだろう。

間のふすまがサラリと開き、しとやかにはいって来たのはイスラエルのお町、手に茶道具をさげている。だまって坐るとだまって茶をつぎ、だまって進めたものである。と広太郎だまって取りあげ、ゆるやかに喫したものである。で二人眼を見合わせた。と、微笑がほころびた。意味深長な微笑ではなく、非常に率直な微笑なのである。

「妾は愛しておりますのよ」「ええ、そうして私も」こういう意味の微笑なのである。

「渡り鳥が来たようでございますね。満天星の葉を散らしています。おや、椋鳥でございます」こういったのはイスラエルのお町。

「よい季節になりましたな。ははあなるほど、椋鳥が」

不意にあたりが暗くなった。とバラバラと音がした。時雨が降って来たのである。だが見る間にあがってしまった。そうしてすぐに陽がさして来た。どこからか謡曲の声がした。と、かおってくる木犀の香！　パチッパチッと囲碁の音！隣りで烏鷺を戦わせるらしい。

ちょっとの間沈黙する。とまたお町話しかけた。

「落ちあゆの季節になりました」

「ああいかにもな、落ちあゆの季節」

「カマスやヒシコや小がれいや、かじきまぐろの盛りだそうで」

「さようさよう、そんなようで」

「からいも、八頭、蓮根、ごぼう、市場へ出たそうでございます」

「秋はよろしゅうございますなあ」

「初雁、虫の音、花壇の手入れ、歌をよむ方やお百姓などは、さぞ忙しいでございましょう」

「さぞ忙しいでございましょう」

「牡丹や、芍薬や、幽蘭の、根分けをしなければならないそうで」

「そんなあんばいでございますな」

「妾、ゆうべきぬたの音を、耳にしたようでございます」

「あっ、私も聞きました」広太郎はなんでも同意する。

「木犀に萩にすすきに葛、いろいろの花が咲き出しました」

「いろいろの花が咲き出しました」

「霧にとんぼに稲刈りに、面白い時令となりました」

「面白い時令となりました」

「二百十日に二百二十日、白露に彼岸の秋分に、不動様のお

開帳も近づきました」
「みんなみんな結構で」
「ホ、ホ、ホ、ホ、おかしなお方！」
「アッハッハッハッ、愉快でござる」
　大変のどかな会話である。
「あなた、ご気分もお身体もよろしいようでございますのね」
「よろしゅうございます、おかげさまで」
「お肥えにならなければいけません」
「沢山たべて肥えましょう」
「少しはお散歩なさりませ」
「ボツボツ散歩しましょうかな」
「あなた」と少しく語気を強め、お町、広太郎へいったものである。

あなたまかせ

「あなた」と語気は強めたが、思い返したというように、お町は元のやさしさに返った。広太郎の心にさわるまい、こう思ったがためらしい。
「以前は陰気でございましたのに、この頃は陽気におなりなさいました。何があなたをおかえしたのでしょう？」
「さあ」といったが広太郎、むしろ水のように淡々と、「いろいろの事情があるようです」
「おあきらめなすったのではございますまいか？」
　お町追っかけてきいたものである。
「それもあるようでございますね」ひとの噂でもするようである。
「ほんとにそれに致しましても、どうして目つからないのでございましょう」お町の方が熱心である。
「この世にいないのかもしれません」やはり広太郎水のようだ。
「忠三さんをはじめとし、沢山の人を手分けして、杉窪からかけて江戸一帯、近郷近在までさがしたのに、どうしてもお行方が知れないとは」
「この世にいないからでございましょう」
「お気の毒な娘さんでございます」
　君尾の噂をしているのであった。
「あのそれからお京様の方も、お行方が知れないそうでございますね」探るようにお町がきく。
「そんな評判でございます」広太郎少しも動じない。
「ほんとに不思議でございますわね」むしろ自分へいったのである。
「若い娘ごが二人まで、行方不明になるなんて」
　広太郎なんとも返辞をしない。依然水のようにすんでいる。
　柱につるされた籠の中で、鸚鵡が煎餅を食べている。その籠の下に眠っているのは、スペイン猫のネロである。
　コツコツコツ、コツコツコツ、鸚鵡が煎餅をつつく音！
ふと広太郎がつぶやいた。
「生死の境いを経てくると、人間というものは変りますなあ」
　お町が聞きのがす筈がない。「袴様、どういう意味で？」
　だが広太郎答えない。庭の木立を眺めている。とまたつぶやいたものである。

「本来私はあの時に、殺されている身分でございますよ」
「ほんとにあぶのうございました」
「それを今日生きております」
「ご運がよかったからでございます」
「いやあなたに助けられたからです」
「妾（わたし）、よいことをいたしました」
「私の身体はあの時以来、私のものではない筈です。あなたのものでございますよ。……それはそれとして人間というもの、ああいう境地を経て来ると、覚悟が出来るものですね。流れるままに流れよう。こだわらずに生きて行こう。過去は一切消えたのだ。現在ばかりに生きて行こう。そうしてそれもあなた任せ！　こういう覚悟でございますよ」
　一種の悟りの結果でもあろう。広太郎の言葉には含蓄があった。
「だがこれまでになりますには、相当煩悶（はんもん）も致しました。陰気になったのはそのためです。しかしこのごろになって、心が明るくなりました。どうしようとも思わない。どうなろうと勝手である。あなた任せ、あなた任せ！　で自然心がすみ、気持ちも陽気になりました。しかし」
　というと広太郎、微妙な微笑を頬に浮かべた。

恩から恋へ

「しかし」と広太郎はいいつづけた。「正直に申しておきましょう。お京様は初恋人、忘れることはできません。いまだに心に焼きついております。が、しかし残念なことには、すでに許婚（いいなずけ）がございます。くだらない人間ではございますが、くだらないだけに可哀そうでもあり、横取りする気にもなれません。自然あきらめねばなりますまい。行方不明になりましたが、別に心配はないそうで、目つける必要はありますまい。一方君尾様になりますと、これも恋人ではありますが、いささか、趣きを異にしております。初恋人のお京様、この人のおもかげを伝えている、そういう点がこの私を、引きつけたことになりますので。これをいいかえると君尾様を通して、お京様に恋を捧げている、こういうことになりますなあ。甚だ厄介ではございますが、いかにせん真相でございますよ。ところで行方が知れません。しかるに私はたのまれております。『君尾をたのみます、広太郎殿。文三からお取り返しくださりませ』さよう、末期の銅兵衛殿からな。……で、今日までさがしましたが、ご承知のとおり行方が知れない。おそらくこの世にはおりますまい。幸い生きているにしても、二度と逢うことの出来ないような、遠くの土地にでもおりましょう。やはりあきらめなければなりますまい。だが……」というと自嘲的になった。「だがいったいなんのために、事新しくこんなことを、いい出したかといいますと、一切合財（いっさいがっさい）今日においては、もうもうそういう過去のことは、私の心から稀薄になった。少なくも稀薄になろうとしている。――ということを申しあげたいからで。しかしこんなことをいい出して、それがいったいなんになるのだ？　とこう反問されますと、ちょっと困るように見えますが、その実一向こまりませんので。というのは順序として、あなたと私との共住みのことに、話が移るからでございますよ」

「一緒にこそ住んではおりますものの、夫婦ならぬ夫婦ではございませんか」お町の声はさびしそうである。
　それには広太郎は答えなかった。
「私にとりましては生命(いのち)の恩人、決しておろそかには存じません」
「ただそれだけでございましょうか」お町不足そうにせまって行く。
「私を愛してくださいました。私を看病してくださいました。私を放そうとなさいませんでした。そこで実家がありながら、私はそこへ帰ろうともせず、あなたと一緒に住んでおります」
「たいへんお気の毒でございますこと」
「最初私には疑問でした。いったいどういう女だろうと？」
「妾、毒婦でございますの」
「はい、さようで。この私にも、ある時はそんなように見えました」
「こわい女でございますのよ」
「私が命を助けられたばかりか、お京様を天草の屋敷から、無事にお取り返しくださいましたのも、やはりあなたでございました」
「あなたのおたのみでございましたから。……」
「二重三重の恩人です」
「いやな言葉でございますこと。……」お町不足らしくいうのであった。「恩人！　恩人！　どこまでいっても恩人！」
　すると広太郎暗示的にいった。「男女の恋というようなものは、いろいろの関係からなり立ちますなあ」
　お町じっと聞き澄ました。そのあとの言葉を待ちもうけた。

美しい夢を

　淡々と広太郎はいい続けた。
「一目ぼれというのもございます。一番純な恋ではありますが、同時に一番あぶなっかしいようで。……しげしげ逢っているうちに、ほれてしまうのもございますな。女に物でもみつがれると、ついほだされて恋してしまいます。これが一番不純のようで、その実一番理詰めでございます。ご恩になったからご恩を返す！　なんと合理的ではございませんか。ましてや女が二つとない、命をみついでくれたとなると……」
　お町、ヒョイと手を出した。と、広太郎も手を出した。十本の指がしっかりと、からみ合って握られた。
「袴様！」と熱病のような声！　「いつぞやあなたに申しました！　はい、南蛮屋の南蛮部屋で、あなたとお目にかかった時！　『お金もいらず物もいらず、何もいただこうとは思いませぬが、そのうちあるいはあなた様の、一番一番大切なものを、いただきにあがるかもしれません』と。……今日こそわたくし催促(ねだ)ります！」
「よろしゅうございます。お待ちなされ」
「では夫婦(めおと)ならぬ夫婦生活も……」
「今夜あたりで幕をおろしましょう」
「ああ、夢のようでございます」
「夢はこれから見るのです」
「……夢を！　今夜から！　美しい夢を……でも」と不安に耐えないように、「そういっているうち、今日が日にも、お京

様か君尾様のいどころが……」
「知れてみなければわかりません。……お京様や君尾様が現われて、あなた以上に私の心を、もし狩り立ててくれましたら、そっちへ移るでございましょう。……今は今を楽しみましょう。流れるままに、引かれるままに。……」
肩と肩とが寄り合った。首と首とがめぐらされた。きっと唇が合うのだろう。
庭木のこずえから夕日が消え、宵やみが襲って来ようとしている。
権十の姿が現われた。
「イスラエルのあねご、おいでかね。親方の使いで参りやした。一体全体何がなんでえ！　こうどなれと申しました。寮住まいはようげしょうが、南蛮屋だってようげしょう！　袴様はようげしょうが、忠三だってようげしょう！　是非南蛮屋へ来てくだせえ！　うしゃアがれ！　まだいたのか！　ひっちかられてしまいやした。至急南蛮屋へおいでくだせえ！」
庭先に立っていったものである。

さてこの頃南蛮部屋では、忠三、寝椅子にころがりながら、こんなことを考えていた。
「あねごが来るのだ、あねごがよ！　イスラエルのあねごがおいでになるのだ！　そこでおいらは立ちあがり、あねごへ寝椅子を奉る。と、あねごがやんわりと、そこへお腰をかけられる。忠さんその後はご無事かえ？　などとおっしゃるに相違ない。そこでおいらは『へい』といって、ひとつはにかんでみせるかな。うんにゃウンと威張ってやる！　そうしてノッケから巻くし立ててやる。あねごいけねえ目っかっちゃった！　へいさようで、君尾様がね！　で、あねごはお払い箱、袴様からヒマが出る。いらはいいらはい南蛮屋へ！　するとあねご来るかしら？」
「忠さん」とその時声がした。はいって来たのはお町であった。

夢が消えた

「来たア！」
とわめくと早引の忠三、もろに寝椅子から飛びおりた。「さあおかけ！」と塵（ちり）を払う。
それからニヤニヤ笑ったが、予定の行動というやつだ。ノッケからいい出したのである。
「あねご、とうとう目つかりやした！」
「何が？」とお町眼をまるくする。
「お聞きなせえ、まずこうだ。芝へ行ったと思しめせ。へいさようで、昨晩ね。帰って来た所が上野山下、そこで逢ったのでございますよ。へい二人の野郎にね。一人はお京様をなくしたし、一人は君尾様をなくしたし、月がまるくてションボリだ。猿のなき声キーキーキー、もっともこいつはこわ色で。そこであっしが追っかけて行き、キューッとしぼったは中条流、ピョイと飛び越すと朱舜水様葵のご紋もおいでなさる。内丹説に胆をつぶし、飛び返ってみるとまたキーキー、今度は本当の猿がいて、『ノロマのノロマの三吉や』とうとう目つけたというもので……だがね、あねご。これだけじゃア、

とてもわかりっこありますめえね。……いったい何だ、このざまは！」
　自分で自分を毒づいたが、
「枝葉を刈り込んで幹ばかり、こいつでお話し致しましょう。あねご、鷲いちゃアいけません。探しあぐんだ君尾という娘、ところもあろうに根岸住居、あねごの父上紀州様、そのお方の弟（おとうと）ご様、副将軍のお家柄、水戸中納言様の下屋敷……だろうとあっしは思うのですがね。そこにいなさるじゃございませんか！」
　昨夜の話をしたものである。
「さてそれからもう一つだ、困ったことが出来ました。もっともこいつは一言もなく、あっしの責任ではございますがね。たった今し方島原城之介、あねごを探しに来たってもので。ついうかうかと舌が廻り、その、あねごの隠れ家を、もちろんはっきりとではありませんが、しゃべってしまったというもので。しかし間抜けの城之介、目つけ出す気づかいもありますまいが、あっしとしては気がかりだ。そこでちょっくらお呼びして、お話したというもので。そそっかしいは昔からだ。こいつはご勘弁を願うとして、とにもかくにもご用心、お願い致しとう存じます。……これでやっとセイセイした。すまじきものは駄弁でげす！　今後は注意致しやしょう」
　いくらか不安だというように、忠三お町を見たものである。
「おやおやおや、どうしたんだ！」
　忠三思わず飛びあがった。お町の様子が変ったからである。
　まず顔色があおざめた。それからひとみが一点を見詰めた。唇がブルブルふるえてきた。そうして拳（こぶし）が握られた。と、寝椅子から立ちあがった。
「夢が消えた！　美しい夢が！」笛のようなかん声（ごえ）でまずいった。「夫婦ならぬ夫婦ぐらし！　あッあッあッ、それさえ駄目だ！」ジリジリと前へ進み出た。「忠三！」とギリギリと歯ぎしりをした。「お礼をいいます！　よく目つけてくれた！　こんな場合に！　ち、畜生！」
「あねご！」と叫ぶと早引の忠三、ジリジリと後へ退いた。
「ど、どうしたんで？　どうしたんで！」
「お礼をいうよ！」とまた進んだ。「よく目つけたねえ、君尾様を！　時もあろうに、こんな時に！　明日ならよかった！　明日ならよかった！　忠三」と眼から涙を流した。「食い殺してもあき足りないヨーッ」
「ワーッ、いけねえ！」と早引の忠三、壁へピッタリとくッついてしまった。
「オイ！」とお町、なお進む。

縄張り図面

「オイ！」といいながらイスラエルのお町、ジリジリと忠三へせまったがにわかに両手で眼をおさえると、グタグタと椅子へくず折れた。と、嗚咽（おえつ）の声が漏れる。切れ切れに声が聞こえてくる。
「君尾様の居場所、君尾様の居場所……知れたからには袴様へ！　……それと知ったら袴様、どんなお心になられるだろう？　……なんといってもあの人の恋人……探しあぐんだ娘さん……ガラリお心が一変し……傾きかけたお心が……向こ

うへ移ってしまうヨーッ……移ったが最後容易には……取り返せない……取り返せない！　忠三！」とヌッと顔を上げた。
「あねご！」と忠三ふるえ上がってしまった。
「怨むよ！」とお町、フラフラと立った。
「済まねえ！」とギックリ腰を曲げる。
「ああ妾は眼が廻る！」
「水だ！」と忠三、飛び出そうとした。
「殺しておくれ！　さあ妾を！」
「堪忍！」とガタガタふるえ出した。
「よくもよくも目付けたねえ！　なぜだい！　なぜだい！　なぜだい！　なぜだい！」
「無理だ！　あねご！　滅茶苦茶だ！　め、目付けろといった筈だ！」
「ねえ」とお町、ぼんやりとした。
「いったわねえ、目付けろって！　で、お前は目付けたんだねえ。ああそうとも、よく目付けたねえ……今夜が過ぎればよかったんだ。……妾の人になったんだから。……早かったわねえ、一日だけ！　忠三さん！」というと凝視した。「縄をお貸しよ、お前の縄を！」
「どうなさいます？　ねえあねご？」
「あのねえ」ジイッと天井を見た。「掛けておくれよ、あそこの梁へ！」
「ううむ」とうなったものである。「首を……あねご？　い、いけねえ！」
「貸してくれないの。え、忠さん！　そう、それなら借りません。……舌をかんだって死ねるねえ」
寝椅子の上へつっ伏した。背筋からかけて肩口まで、ウネウネ波のようにうねるのは、泣きじゃくっている証拠である。
眼を垂れ床を見詰めたが、忠三心でつぶやいた。「こんなにもほれていたのかなあ」
月が窓からさして来た。店から客の声がした。酔客のうたう声である。
〽逢おうとしても逢われない。
フラフラとお町立ち上がった。
「妾は行きます。さようならよ」
「あねご、送りましょう。へいそこまで」
「妾は行きます。さようならよ」
戸口の所で振り返った。
「お前たっしゃでいるがいいよ」
部屋の外へ消えてしまった。
酔客の歌が聞こえて来た。
「起こりそうだなあ、恐ろしいことが」
忠三胸へ腕組みをしたが、はたして恐ろしい出来事が、その夜のうちに起こったのである。
ちょうどこの頃小梅の寮では、一人広太郎が灯火の下に、例の巻軸を押しひろげ、その表に見入っていた。広大な城郭の縄張り絵図が、半分だけかかれてあるのであった。
「いったいどこの城だろう？　随分大きな城郭だが。もう一本の巻軸を継ぐと、完全な図面になるものと見える。だがいったいこんな図面が、どうしてあんなにも大切なんだろう？　はてな？」とつぶやくと眼を上げた。金目垣の向こうに何

者か、いるような気勢がしたからである。

変な符号

何か白いものが浮かんでいる。「おや！」と一層のぞき込んだ時、フワリと横へそれてしまった。「おかしいなあ、何だろう？」心にかかったが立ちもあがらず、再び絵画面に見入ったが、これが悪運の基であった。

「いやそれにしてもお町という女、いかにも変った性質ではある。杉窪の里の裏山で、ゆくりなく拾ったこの巻軸、多くの人の争うところを見れば、大切なものと思われる。しかし拙者には不用の品、差し上げましょうといったところ、以前はほしゅうございましたが、今はほしいとは思いません。妾のほしいのはそれでなく、袴様あなたでございます。こういって取ろうとしなかったが、サッパリとして面白い気象だ。……巻軸二本手に入れると、どんな功徳がありますかな？ おれがこう聞くとあのお町、袴様あなたのお家などには、あり過ぎるほど沢山にある、そういう物をさらに一層、手に入れることができますので。こういって冷淡に笑ったが、いったいなんのことだろう？ おれの家にある物といえば、先祖代々貯め込んだ、黴の生えた大小の小判だが、そんな物では面白くないなア。……だがそれにしてもこの図面、どこの城郭の縄張りなんだろう？ ……北の丸、西の丸、西丸下、本丸があって二の丸がある。濠が三重に取り巻いている。……二の丸と三の丸との境い目で、惜しいことにブッツリ切れてしまっている。ははあなるほどこの後ろへ、もう一つの巻軸をくっつけると、完全な絵図面となるのだな。……おや、変てこな符号があるぞ」

二の丸と三の丸の境い目の、濠の一所にポッツリと、半分にち切れた井桁のようなものが「キ」こんな塩梅に描かれてあった。

「妙なものだなあ、何だろう？ どうやら意味があるらしい。そうだ、もう一本の巻軸を、ここへ継ぐとわかるのだろう。……だがそれにしてもこの城郭、恐ろしいほどに宏大だが、こんな宏大な城郭が、いったいどこにあるのだろう？」しばらく考えたが見当がつかない。「目ぼしい大藩の大名といえば、加賀に島津に細川に、尾張に紀伊に仙台の伊達。しかしそれとて城郭は、こうも大きくない筈だ。……といって外国のかまえではない。日本古来の様式だ」そこでまたじっと考え込んだ。しかしどうしても見当がつかない。「わからないのが本当だろう。秘密を保つのが築城の極意、図面を一見しただけで、わかるようでは名城とはいえない。……だがこの構えから推量すれば、慶長前期の風がある。ひどく古風の城でもない。まてよ」というと、眼を宙に茫然と見上げたものである。と、ブルッと身ぶるいをした。「わかった！」とあたかもうめくように、「わかったわかった！ ううむ、わかった！ あんまり見慣れていたために、かえって今までわからなかったのだ。がしかし！」とまた茫然。「こうまで詳しい縄張りを、誰がどうして描いたんだろう？ ……これさえあれば徳川家を……島原一揆？ なるほどなあ」じっと腕を組んだものである。「謀反の輩でなかったら、こんな恐ろしい絵図面を、手に入れようなどとはしないだろう」

物にでも襲われたというように、フラフラ立ったがまた坐った。手を伸ばすと巻軸を、グルグル巻き納めたものである。

と、その時籠の鸚鵡、にわかにコーッと鳴き出した。と、飛びあがったスペイン猫、背を持ち上げると爪を磨き、威嚇するようにうなり出した。「これは！」と驚いて広太郎、月影暗い庭を見た。

「袴氏！」としわがれた声！　金目(かなめ)(もち)の垣をおどり越え、真っ白いものが飛んで来た。

地獄を見せよう

「袴氏！」と声を掛け、飛び込んで来たのはほかでもない、修験者姿の島原城之介。ツカツカ進むと縁側の手前、庭先へジャラーンと鉄杖を突き、および腰をしてのぞき込んだ。

「袴氏、しばらくでござった。隅田以来随分の因縁、今日はお礼に参ってござる。わけてもよくぞ拙者を捕え、正雪一味へ渡されたな！　次にはよくぞイスラエルのお町を、拙者から横取りなされたな」まず城之介いったものである。それから四辺(あたり)を見廻したが、「萩の柴折戸(しおりど)、金目垣、木立が茂って、奥が見えぬ、大変ひそやかな寮住居(ずまい)、なるほどなあ、目つからないはずだ。が、とうとう今日は目つけた。目つけたからにはこっちのもの、これ！」というと、つと進んだ。

「お町を出せ！」

グイとかい込んだ鉄杖を、右八双に構えたのは、機を見て振り込もうためであろう。

「ははあ鸚鵡も籠にいるな。スペイン猫もご健在。ひどく拙者が嫌いとみえ、ガーガーミンミン鳴きおるわい！」ドンと片足を縁へかけた。「お町を出せ！　お町を出せ！　とはいうもののそのお町、今いねえのは百も承知だ！　金目の垣のうしろに立ち、そうさなア、一刻余りも、内の様子を見ていたっけ。手を取り合って口づけし、今夜出来合おうのご相談！

みんな聞いたみんな見た！　ムカツク胸をさすりながら、辛棒(しんぼう)したのはつらかったよ！　……南蛮屋から迎えが来て、出て行ったのでサアしめた、はいって来たというものさ。駄目だ駄目だ、人をつけ、今夜締め合われてたまるものか！　お町を締めるのはうぬじゃアねえ。城之介様だア、このおれだ！　さて！」というと毒々しく、しかも皮肉に笑ったものである。「さて手前(てめえ)をどうしようかなア、ちゃあアんとおれには目算(もくろみ)がある。しょびいて行くのさ、おれの巣へよ！　そこでゆっくりと責折檻(せめせっかん)、好男子をだいなしにしてやるのさ！　そうさ手をかえ品をかえ、地獄の光景を見せてやるのさ。が、心配はご無用だ。殺しはしねえ。それだけは安心！　殺すとお町に怨まれる。怨まれた日にゃアこっちが損、損のことならやらないがいい。おれの考えはほかにある。手前を玉に引き上げて、あのお町めをアブアブさせ、もがき廻るところへつけ入って、のっぴきならず落とすのさ。……手前の焦がれる広太郎、かえしてやるからいうことを聞け、どうだどうだとやらかすのさ。みっしり利こうぜこの目算！　さてお町さえ手に入れたら、手前なんかには用はねえ。うしゃアがれと突っ放す！　ということになるんだなあ。……まずこのくらいでいいだろう。そろそろ料理に取りかかろう。おれは案外正直者さ、先に計画をぶちまけて、それから手段にかかるん

だからなあ。それ！」
　というと鉄杖を、グイとばかりに突き出した。と、経机が飛んできた。袴広太郎投げたのである。
「おっとあぶねえ」とたたき落とした。「これこれなんだ、とんでもねえ奴だ！　机には罪はない筈だ。これまで二人で寄っかかり、厄介をかけた机じゃアねえか。いかに不用になったとはいえ、そう没義道に扱わねえがいい。ソレ！」と鉄杖をまた出した。
　とたんに飛び上がった広太郎、そばの刀へ手をかけると、スルリと引き抜いたものである。
「えッヘッヘッ、抜きましたね。ソレ！」
　というと島原城之介、グルリ鉄杖を右手廻し、環頭をもってすくい上げた。

小太刀と鉄杖

　怪修験者島原城之介。現われた時から広太郎、「残念、駄目だ！」と考えた。隅田の堤で逢って以来、敵の力量は知れている。無双の手利き、恐ろしい奴だ。が、あの時はまだよかった。というのは広太郎たっしゃだったからだ。今はいけない病後である。体も心も弱っている。太刀打ちは愚かこれまでは、戸外の散歩さえしたことがない。節々はゆるみ肉はだれ、気息をととのえるさえ覚束ない。太刀を構えて立ったものの、足もとさえも定まらない。睨んだ眼先がチラチラする。
「これはやられる！　これはやられる！」
　さりとて逃げることも出来なかった。いついたままでピタリと青眼、差し付けられた鉄杖を、睨みつけているばかりである。「おれは屋内、きゃつは戸外、きゃつの獲物は長目の鉄杖、おれの得物は幸い小太刀、うまく屋内へ誘い入れたら、万に一つ勝とうもしれぬ。そうだそうだおびきよせてやれ！」
　その時城之介鉄杖を廻し、広太郎の足を払って来た。「うむ」というと背後へ飛んだ。そこへつけ込みスルスルスル、城之介屋内へはいってきた。「しめた！」と叫んだ広太郎、片膝敷くと掬い斬り、敵の高股へ斬りつけた。「どっこい！」と喚いた城之介、もろに飛び返ると鉄杖の先、伸ばして広太郎の胸を突いた。危うく渡して立ちなおる。と、ツツ――と鉄杖が、手もとへ引かれたものである。なんの不思議ぞ！　引く手に連れ、鉄杖の先に磁気あって、吸いつけられる鉄片さながら、今度は袴広太郎、スルスルスルと前へ出た。うしろさがりに城之介、座敷を抜けて縁へ出た。と、縁から飛びおりる。「おっ」と気がついた広太郎、縁でガッシリ踏みこたえた。そこを狙って城之介、鉄杖の中軸双手握り、逆にひねるとグルリと返し、環頭をもってしたたかに、広太郎の肩へ打ちおろした。
　こいつを受けたら刀が折れる、身をかわすと辛く遁がれ、広太郎屋内へ退いた。「チェッ」という舌打ちの音、縁へ飛びあがった城之介、またもや鉄杖を突き出したが、小さく刻む鶺鴒の尾、上下へヒョイヒョイと動かした。と、リズミカルの環の音！　カラカラカラ、カラカラカラ！　一種微妙な音楽である。袴広太郎、次第次第に、心が恍惚となってきた。スーと鉄杖が伸び、それが手もとへ引かれた時、不可抗力だ、

スルスルスル、広太郎前へ出たものである。
縁まで下がってきた城之介、ヒョイと飛ぶと庭へ下り、引きそばめると鉄杖の先、片手に握ると六尺の長さ、胸の長さを加えると、八尺となって余りがある、ゆるやかに斜めに振り上げたが、妖精じみた窪んだ眼で、狙いをつけたは広太郎の右肩、
「もういけめえ！　贄にしてくりょう！」
例の嗄れ声！　響かせると同時に、鉄杖あやまたず肩へ落ちた。
癒着していない傷があった。そいつがわれてしたたる血！
「むっ！」というと袴広太郎、縁にへたばったがそれも一瞬、血溜りの中へ横倒し、悶絶をして動かなくなった。
「ほほう」というと城之介、例によってジャランと鉄杖を立て、それへ寄っかかって見おろしたが、「片がついたというものさ。死にゃアしまいね、え、まさか？」片手を出すとグイと伸ばし、広太郎の鼻息を窺った。「大丈夫だア」と眼を上げた。と、眼についたは巻軸である。「思わぬ獲物！　すなわち二兎さ」グイと懐中へねじ込んだ時、小門にあたって女の足音。

スペイン猫

小門にあたって女の足音！
「や、帰って来たお町めが！　が、今逢っては面白くない。玉をさらってひとまずのがれ、さてそいつをおとりにして、口説きおとすが上分別さ、第一おいらが広太郎を、血だるまにしたと知ったら、お町めあべこべに憎むだろう。憎まれた日には追っつかない。退散退散」と城之介、腕を伸ばすと大力無双、広太郎を小脇にかい込んだ。鉄杖を突くと片足をはね、一本歯の足駄高々と、ヒラリと飛んだは金目垣、さながら一匹の巨大な蛾だ。白々と姿を消してしまった。
またも鳴き立つ籠の鸚鵡、バタバタバタと羽ばたきをする。と四散する翼の白粉、ボッと四辺がけむるほどだ。負けずにうなるスペイン猫、背を持ち上げてグルグルグル、血だまりの周囲をまわり出した。
足音の主はお町であった。
「君尾という娘、目つかったからには、どうでも袴様へ知らせなければならない。ああ捨てられたら死ぬまでだよ！　……どうしたんだろう？　やかましいねえ」
庭づたいにやってきた。見ればタップリ縁の上、血がたまって赤黒い。
ギョッとしたお町、「袴様！」
呼びかけたが返辞がない。駈け上がると探し出した。
「袴様！　袴様！　袴様！」
返辞のあろう筈がない。飛び返ってきたイスラエルのお町、ベタベタと縁へすわってしまった。思い出したは忠三の言葉！
「城之介めだ！　城之介めだ！」ヨロヨロと立ったがまたべッタリ。
「畜生！　畜生！　畜生！　畜生！　城之介めが袴様を殺したヨーッ」
血だまりを睨んだものである。
「あッ、妾目が廻る！　あッ、妾死んでしまいそうだ！　あ

ッ、だんだん気が遠くなる！」
キューッとこめかみを押さえつけた。
気だって遠くなるだろう。眼だってグラグラするだろう。恋が叶ってサア今夜！　楽しい夢を見る事が出来る。こう思ったおりもおり、君尾の居場所が発見され、一つの邪魔がはいったのでさえ、随分お町には苦痛だったのに、帰って来て見れば恋人がいない。残されているのは血だまりだ。殺されて死骸を捨てられたか、負傷してどこかへさらわれたか、どっちみち、恐ろしい運命が、恋人を見舞ったに相違ない。間を置いて来たならともかくも、一度に襲ってきたのである。もしもお町が気弱だったら、気絶ぐらいはしただろう。
お町はいつまでも動かない。ぼんやりと血だまりを見詰めている。さりとて考えているのではない。放心、放心、放心しているのだ。と、ポッと眼の前へ、一つの生首（なまくび）が浮かんできた。袴広太郎の首級（くび）である。と、ポッと消えてしまった。急に古沼が見えて来た。一つの死骸が浮かんでいる。袴広太郎の死骸である。だが、そいつも消えてしまった。
頭の芯がジーンと痛む。身体の骨が抜けてしまいそうだ。胸ばっかりがむやみとおどる。だが、ちっとも涙が出ない。
と、この時どうしたものか、血だまりを廻っていたスペイン猫、ネロがお町へ飛びかかって来た。すなわちお町の袖をくわえ、グーッと前へ引っ張ったのである。お町は無心に払いのけた。飛び退いたネロ、縁を飛び下り、金目の垣まで走ったが、ガリガリと地面を引っ掻いた。と、またも飛び返り、袖をくわえて引っ張った。
「あっ、そうかい！」と、イスラエルのお町、にわかに手をうち飛びあがったのは、一つの考えが浮かんだからである。

追手

慣らされ切っているスペイン猫、血のにおいだけはかぎ分ける。地にしたたっている広太郎の血潮、ははあこいつをたよりにして、袴広太郎様のおり場所へ、案内しようとしているのだな！　――こう考えた時お町の心、明るくなったのは当然といえよう。
「ネロや、ネロや、有難うよ！」まずもって礼をいったものである。「案内しておくれ、さあすぐに！　行くとも行くとも連れて行っておくれ！　どこにいるのさ、袴様！　さあさあ行こうさあさあ行こう！　ああ、でも、もしや行き着いた所に、あの方の死骸でもあろうものなら、それこそ、本当に、どうしよう！　……でも行こうねえ、さあ行こう！　ネロや、ネロや、連れて行っておくれ！」
ヒラリと縁から飛び下りた。
「お待ち！」
とにわかに立ち止まった。
「忠さんへ知らせよう、忠さんへ！」
ふたたび座敷へ駈け上がった。ベッタリ坐ると硯（すずり）を引き寄せ、筆を執るのももどかしく、何か懐紙へサラサラと書いた。
立ち上がると鳥籠へ行った。戸を開けるとうれしそうに、舞い出してきた白鸚鵡、差し出したお町の手へ止まった。だき抱えたイスラエルのお町、手早く紙片を巻きつけた。
つとお町縁へ出た。

「花ちゃん」と鸚鵡へ話しかけた。
「行っておくれよ、南蛮屋へね。忠さんへ手紙を渡しておくれ！　急いでね、大急ぎ！」
　やわらかくだきしめ頬ずりをし、それからサッと切って放した。夜の鳥、眼は見えまい。しかし慣らされた文使い、感覚だけで飛ぶことが出来る。プーッと飛び立つと空を斜め、浅草の方角へかけったが、見る見る姿が見えなくなった。
「用心までに！」と、イスラエルのお町、手文庫をあけると懐刀を出した。葵散らしの懐刀である。帯へはさむとキリキリキリ、衣裳の裾を取り上げた。
「さあネロや、連れて行っておくれ！」
　地上へ飛び下りたものである。
　フーッとうなるとスペイン猫、ポンと金目垣をおどり越えた。
「お待ちよ、お待ちよ！」とイスラエルのお町、小門から外へ駈け出した。
　ネロはズンズン走って行く。後からお町が走って行く。今夜も明月、あたり明るく、紗を張ったようにあおざめている。
　一匹のけものと一人の女、走る走る東北へ！　三囲から牛御前、長命寺から須崎たんぼ！　一面の野面、諸所に林、人家乏しく、耕地も乏しい。左に見えるは隅田堤、背を高め、背を低め、土を引っ掻き、土をかぎ、突然高くはねるかと思うと、悲しそうに鳴いてはい廻ったり、ネロは夢中で案内する。その後をつけるイスラエルのお町、恋と不安とで狂人である。
「ネロやネロや、早くお行き！　何をしているのさ。早くお行き！」夢中になって追い立てる。
　一匹のけものと一人の女、こうしてだんだん進んでゆく。
　ところでこの頃島原城之介、どこを走っていたかというに、蓮華寺の背後藪地の前を、例の蛾のように白々と、月光を浴びて走っていた。と、スタスタとうしろから、追いせまって来る足音がした。ギョッとして振り返ったそのとたん。
「島原！」と斬り込んで来たものがある。

罵る島原

「島原！」と叫んで斬り込んで来た人影、月光に見れば額に傷、すなわち天草時行の片腕、九州浪人長崎左源太。
　アッという間に島原城之介、二間あまりうしろへ飛んだ。左手に抱えたは気絶の広太郎、右手に高く振りかぶったは、例の得物鉄杖である。
「ふふん」とばかり鼻を鳴らした。「おお長崎か、左源太か。いつの間に後をつけて来た！　ご苦労千万、毎々ながら！　が駄目だ、帰れ帰れ！　知られてたまるか、おれの住居！　これ！」というと一本歯、高足駄でグイと進んだが、「どだい考えが間違っていらあ、よく天草へいってくれ、空巣狙いはやめろってな！　住居を突き止めてどうする気だ？　うん、おおかたこうだろう。取り貯めてあるお賽銭、ふんだくろうとするのだろう？　いけねえいけねえ、そいつはいけねえ。というのはそんなものはないからさ。ああないよ、お賽銭なんか！　第一……」というとまた進んだ。「そいつは天草だって知っている筈だ。一緒に原の城にいたんだからなあ。もっ

とも目的は別々だった、天草の目的は金儲け、おれの目的は吉利支丹修法、そうしておれはともかくも、イスラエル教をたてたってものさ。でおれには物欲はない！　人助け、人助け、人助け！　な、これだけだ、あるものといえば！　すなわち神聖なる救世主さ！　馬鹿にしちゃアいけねえ、大行者様だア！　……ところで、イスラエル教は密法だ！　容易に道場を見せることは出来ねえ！　見られるとこっちも都合が悪いが、見た方でも後悔しよう！　そうさ、あんまりあらたかでな！　第一裸体の生娘が、うんにゃ、そんなものは一人もいねえ？　もっとも壁には性の絵が、うんにゃうんにゃ、そんな物もねえ！　愛欲をそそる御神水、オッとそんなものはなかったっけ！　ただむやみと崇高なるものが、あっちこっちにあるばかりだ！　うかうかそんなものを見ようものなら、真っ先に心臓が破裂する。心が恍惚とするってことよ！

と、このくらいで負けてくれ！　というとひどくいい所で、一層見たくなるだろうな？　そりゃアとてもいい所さ！　一旦そこへはいろうものなら、出るのが厭になるらしい。どんな無理でも諾こうという、そんな気持ちになるらしい。そこを狙って献金を！　ドッコイ、俺には物欲はねえ。で、決して献金はさせねえ！　だからいつも貧乏だよ！　貧乏ぐらしが見たかったら、これからチョクチョク遊びに来い！　といいたいんだがいわないね。ボロい儲けというものは、すべからく一人占めにすべきだからなあ。と、こういうとこのおれが、ボロく儲けているようだが、今もいったよ、貧乏だア！

だからさ、だからさ、後なんかつけるな！」ここで島原城之介、振りかぶった鉄杖カラカラと鳴らし、傍若無人に進み出た。「オイ！」と残忍な含み声。「それともあくまでつける気か？　つけるならつけろ、つけてみろ！　うまくつけたら褒美をやる。そうさ、鉄杖の一撃をな！　そのザマはなんだ、すきだらけではないか！　そんなうでまえでかかる気か？　大胆だなあ。感心感心！　度胸だけは認めてやる。で度胸でやって来い！　その代わりみっしりおとすぞよ。うん、そうさ、鉄杖を！　脳天がよければ脳天へおとす。肩がよければ肩へおとす。それともビッコになりたいなら、遠慮はいらない飛び込んで来い。あっさりさらってオッペショッてやる！

ゆくぞ！」

と正面からせり詰めた。

逃げた左源太

逼り詰められた長崎左源太、さっきから身動きさえ出来ないのであった。

「強い強いと聞いてはいたが、こうまで強いとは知らなかった。これはまるで逃げることさえ出来ない。のっかかって来る。おっかぶさって来る。なんてマアせいが高いんだ。……なんてマア得物が長いんだ。廻り込もうとさえしおらない。真っ正面からせまってくる。しかも片手だ、片手打ちだ！　随分重い鉄杖だろうに！　なんだ、あいつは、光っているのは？　環だな、環だな、月に光っている！　……カラカラカラ、カラカラカラ、環が鳴るのだ、ぶつかり合って！　動かしているのだな、いつかないように！　……左手に死骸を抱えている。殺されたんだろう、可哀そうに！　……人間では

ないものの怪だ！　死骸を抱えて、突っ立って、のべつにしゃべっておちつき払って、白衣を纏って、白髪だ！　……うしろは藪地、真っ暗だ！　……引っ返せばよかった、かからなければよかった。毛頭ないよ、おれに勝ち目は！　……おっ、どこかで鳥が鳴いている！　夜烏だな、寝ぼけたとみえる。……あがるあがる鉄杖があがる！　なぐられる、なぐられる、なぐられる！」

後じさることも出来なかった。横へそれることも出来なかった。魅入られたように凝然と、立ちすくんでいるばかりであった。

と振りかぶった城之介の鉄杖、ピリピリピリピリとふるえ出した。力が籠った証拠である。月光斜めに照らしている。半面明るく半面暗く、城之介の畸形なことは！　上唇がまくれあがった。笑ったのである。こんな場合に！　勃然とわき起こった憤り！　それが意外にも左源太を助けた。

「うぬ！」と叫ぶと飛び込んだ。

「おっ！」とわめいた城之介、飛び込まれようとは思わなかったらしい。少しあわてて振り降ろした。ジャラ――ンと鉄杖の響いたのは、不覚にも大地を打ったからであろう。当然のことにはしびれが来た。ガラリと鉄杖を落としてしまった。

「しめた！」と叫んだ長崎左源太、斬り込みはしない、太刀を引き、パッと横っ飛びに逃げ出した。

走る走る、見えなくなった。その素早さ、猟犬である。

後を見送った島原城之介、しばらくはぼんやり立っていた。ひどく感心したらしい。ややあって大変機嫌のよい、愉快そうな笑い声を響かせた。

「ワッハッハッハッハッ、逃げっぷりがいい。きゃつたしかに出世するなあ。というのは機を見るに敏だからよ。たいがいのヤクザはあんな場合にはきまって斬り込んでくるものだ。勝てるというような錯覚でな。が、飛び込んで来たが最後、血ヘドを吐いてくたばらなけりゃアならねえ。城之介様の高足駄、一本歯の利器と来た日には、掻い撫での斧より役立つんだからなあ。胸を蹴ってやるばかりさ。だがそれにしてもおれの得物を、たたき落とした人間といえば、あいつ以外にはないのだからなあ。……いや待ってくれ」と考えた。「たしかもう一人あった筈だ。隅田堤で逢った奴！　なんだなんだ、ここにいらあ」ひっ抱えていた広太郎へ、この時はじめて眼をやった。と、どうしたのか城之介、「や、しまった。これはいけない！」

叫ぶと一緒に広太郎を、ドンと地上へ置いたものである。手を伸ばすと広太郎の片袖、グイとばかりに引きちぎった。

ネロ行き詰まる

なぜ広太郎の片袖を島原城之介は引きちぎったのか！　広太郎の肩の傷口から、血がしたたっていたからである。

「こうむやみと出血しては、可哀そうに死んでしまう。死んでしまっては玉なしだ。せっかくのモクロミが駄目になる。何を置いても一介抱、どれ」というと腰をかがめ、ちぎった片袖をさらに裂き、クルクルと傷口を引き結んだ。

「よろしい」というと引っ抱えた。落ちていた鉄杖を拾いあげ、それからあたりを見廻したのは、つけてくる奴があるか

ないか、そいつを見きわめるためであろう。「大丈夫、どれ参ろう」
やぶの裾を歩き出した。と不意に城之介の姿、どこへ行ったものか見えなくなった。だが誰か人あって、しさいに耳を傾けたなら、周囲十町は充分にある。大藪地帯(だいジャングル)を押し分けて、奥へ奥へと歩いて行く、きぬずれの音を聞くことが出来、やがて遙かの藪地(ジャングル)の底から、重い扉でも開くような鈍い物ういう音がして、つづいて多勢の若い女の、泣いたり笑ったりわめいたりする。奇怪な合唱の声が聞こえ、ふたたび鈍い音がした時、はじめて夜の静寂が、立ち帰ってきたことを知ることが出来よう。
で、今は静かなのである。
と、月光をぬいながら、こっちへ走って来る人影があった。女である。お町である。
「ネロや、ネロや、案内しておくれ！　お急ぎお急ぎ、急いでお駈け！」
甲走(かんばし)った声がすぐ響いた。
背を持ちあげ、背をひくめ、高く月に飛び、低く地にはい、お町の前方を走っているのは、スペイン猫のネロであった。
やがて藪地(ジャングル)の裾まで来た。と、にわかにスペイン猫、ひと所をグルグル廻り出した。
「ネロや、ネロやどうしたのさ？　早くお行きよ。さあさあ早く！」
うしろに立ったイスラエルのお町、追っ立てるように声をかけたが、ネロは一足も進もうとはしない。グルグルグルグルと同じところを、こまのようにめぐってばかりいるのであった。だがまだそれはよい方で、ネロはにわかに動かなくなった。空へ鼻づらを振り上げて、ニーンと悲しそうに鳴いたかと思うと、行儀よく前足を前へそろえ、その上へあごをピッタリとつけ、絶望したようにうずくまってしまった。
「ネロや！」お町は驚いてしまった。「どうしたんだよ、どうしたんだよ！　なぜ行かないのさ、疲れたのかえ？　もう一息だよ。走っておくれ！　どこにいるのさ、袴様は？　……おかしいねえ。なぜ動かないんだろう？　道でも間違ったんじゃアないかしら？　……いったいここはどこなんだろう？
ああ蓮華寺(れんげじ)の裏手だよ、名高い渋沢の藪地(やぶち)前！　えらい所へ来てしまった。袴様！　袴様！　袴様！」
もしやと思って呼んでみたが、もちろん返事は来なかった。ただ袴様、袴様と、その甲高い声ばかりが藪へつきあたったばかりである。風が渡るかその藪の木々、ザワザワとそよいで音を立て、その外側をなま白く、輪郭づけていた月光を、チラチラとはね返すばかりであった。依然としてネロは動かない。地面のひと所を見詰めている。気がついたお町、地面を見た。まさしく血だまり、そこにあった。
「おおそれでは袴様は、ともかくここまでは来たものとみえる。そうしてここから？　そうしてここから？」どこへ行ったものか。ネロが案内しない限りは、お町には知ることは出来なかった。そうしてネロには案内出来ない。ここを最後に血のしずくが、地面にしたたっていないからである。絶望してペタペタと坐ったが、一方この頃長崎左源太、耕地を町の方へ走っていた。

巻軸の片割れ

長崎左源太走って行く。

「危難はのがれたというものさ。今夜の一埒、天草殿へ、至急お知らせしなければならない。死骸かそれとも負傷したのか、とまれ犠牲者に相違あるまい。そいつを抱えてウロウロと、あんなところを歩いていた。渋沢の藪地！　渋沢の藪地！　あの辺に住居があるのかもしれない！　……や、なんだ!?」と空を仰いだ。

月光をしのいで一羽の巨鳥、まりのようにハズンで翔けてきた。と、そいつに引かれるように、一個の人影足を空に、耕地をこっちへ走って来る。

二人、あやうくぶつかろうとした。

「おッ、貴様早引か！」

「やッ、手めえは左源太か！」

同時に刀へ手をかけたが、二人とも抜こうとはしなかった。さっと飛びさがったものである。

「今夜はせわしい。オイ早引、また逢おうぜ。一昨日逢おう」

「今夜はせわしい。オイ左源太、また逢おうぜ。一昨日逢おう」

サーッとそのまま馳せちがった。

忠三は鸚鵡を追っかける。

「花公花公、早い早い、ゆっくり翔けな。たのむたのむ！　そりゃアそうとえらいことになった！　袴様が紛失したんだとよ。城之介のしわざだ。わかっている。それというのも駄弁のたたりだ。おれのよ、おれのよ、おれの駄弁のよ！　さぞあねごおこっているだろうなあ。ヤイ忠々、うしゃアがったな！　それこそポカリとやられるかもしれねえ」

飛鳥の後を追っかける。

長崎左源太も走って行く。するとまたもや行く手から、二、三十人の人影が走ってきた。手に手に得物を持っている。忠三のあとを追っかけて行く。

「ははあ南蛮屋の一味だな？　だがいったいどこへ行くんだろう？」

グルリ迂廻してやり過ごした。眼についたは百姓屋、馬小屋に馬がつないである。

「無断借用、かまうものか」

飛び込むとマセ棒を引っ放し、ド――、ド――、ド――と引き出そうとした。後じさりをしていななこうとする。チョッ、チョッ、チョッ、と口を鳴らし、驚かさないように引き出したのは、さすがにさむらい、慣れたものである。スラリと乗ると裸馬、鞍もなければあぶみもない。しかしちっとも困らない。手綱の代わりにたてがみをつかみ、腰を浮かせると前のめり、キュッと両足で胴をしめた。駄馬ではあったが乗り手がたっしゃ、パッ、パッ、パッと走りだした。隅田へ出て一直線、堤上をのっ立てのっ立てる！

ところでこの頃巴御殿では、天草時行同志をはべらせ、一本の巻軸を前に拡げ、陰湿たる奥の小座敷で、ヒソヒソ謀議にふけっていた。

巻軸のおもてに描かれているのは、宏大な城郭の縄張り図

面、ただし半分しか描いてない。
「これはな」と天草さえない調子で、ポツリポツリと話し出した。「ある大城の絵図面さ、ご覧のとおり半分しかない。それ大手前の半分だ。肝腎の要害は描いてない。もっとも三の丸は描いてある。ところで。……」というと天草時行、例の窪んだ小粒の眼へ、例のあたかも硫黄のような、蒼光る焔をたき出したが、さらに一段声を落とすと、膝まで進めていい出した。「ここをご覧、この一点を！　三の丸と二の丸の境い目を！　井桁があろう？　半分の井桁が！　こいつが大変なしるしなのだ」

家康のお墨付き

「こいつが大変な符号なのだ」こういってグッと睨むようにしたが、ヒョイと話を横へそらせた。「いや、その前に聞きたいことがある。この素晴しい大城だが、どこの城だか見当がつくかな？」ジロリと見廻したものである。
「さあ？」といったように十数人の武士ども、互いに顔を見合わせたが、どうやら見当がつかないらしい。誰一人口をきこうとしない。
「わからないかな？　そうだろうて」時行むしろ満足そうに、「わからない方が当然だ。わからないものならきもを冷やすだろう。ところがおれにはわかっている。いやいや、それとても見当だけさ。たしかなところはわかっていない、それでもう一本の巻軸を是非手に入れたいと思っているのさ。二つを合わせると完全に、どこの城だかわかるんだからなあ。が、ともかくも見当だけは、おれについているのだよ。ところでもしもおれの見当が、見当外れにならなかったら、日本の歴史はひっくり返ってしまう。そうさ少なくも徳川幕府が、キリシタン宗徒を迫害した、あの恐ろしい歴史だけはな」
　ここでニヤニヤ笑い出したが、例のみつ口がほころびたため、かえって物すごく怒ったように見えた。
「というのはほかでもない」さえない調子で話し出した。「家康以来代々の将軍、すなわち秀忠も家光も、いずれも熱心なキリシタン信者！　ということになるんだからなあ。こいつは実に考えただけでも、きものつぶれる話ではないか。実際代々の徳川幕府が、信者に加えた圧迫ときたら、その残忍と酷薄さにおいて、世界に名高い宗教戦のうちでも、特筆大書していいほどの、すばらしく大げさなもんだからなあ。しかるに親玉の将軍家が、その宗教の信者だとあっては、全くもってどういっていいやら、挨拶にさえ困るじゃアないか。ところがおれの考えによれば、事実代々の徳川将軍は、たしかにキリシタンの信者らしいのさ。いやいやこれはおればかりではない。原の城にこもった一揆の中の、幹部と称される連中は、ことごとくそんなように思っていたらしい。そうしてそう思っていたればこそ、あんな騒動も起こしたってものさ。幕府攻囲軍の大将として、松平信綱をよこしたのは、決して将軍家の本意ではない。あれは二義的の策略なのさ。神主や坊主がキリシタンのために、ドシドシ縄張りを犯される、そこで大いに閉口して、幕府に向かって上訴した。キリシタンをやッつけてくださいとな！　坊主や神主の勢力は、日本としてはおろそかには出来ない。もしこいつらを怒らせると、

反噬される恐れがある。反噬されると世が乱れる。政治の執り方が悪いといわれる。天朝に対しても申し訳ない。それより何より浮世には、豊臣恩顧の大名や、関ヶ原以来の浪人者や、取りつぶされた大名の家来や、そういう者がウジャウジャいる。そいつらが坊主や神主と結ぶと、ちょっと事が面倒になる。で坊主や神主の、機嫌を取らなければならないだろう。キリシタン宗徒は今のところ、坊主や神主の信者より数においてずっと少ない、そこで気の毒だが小の虫を殺し、いや殺すのではない一時おさえ、大の虫のあばれるのを防ぐことにしよう。こういうところから信綱をよこし、原の城を攻めてはいるのだが、そのうち引きあげるに相違ない。そうして事をうやむやに葬り、キリシタン宗徒を放任し、教義布衍を許すだろう。その証拠には家康公から、たいへんなお墨付きがきているじゃアないか！　二本の巻軸！　二本の巻軸――というのが原の城に籠っていた、信徒一味の考えだったのさ。実際……」というと天草時行、改めてひろげられた巻軸へ、例の気味の悪い小粒の眼を、焼きつけるように注いだが、「二本の巻軸は徳川家康からキリシタン教徒に手渡した、ある意味におけるお墨付きなのだよ。ひとつこれについて話してやろう」

ザビエルの財産

キリシタン宗徒の連中へ、徳川家康がお墨付きを渡した！

これはまことに意外なことで、充分驚いてもよさそうである。その秘密を知っていて、天草時行が話そうという。興味を起こさざるを得ないではないか。座にい並んだ十数人の武士ども、そこでちょっとばかり居住まいを直し、固唾を呑むような格好をした。

と、天草こんなことをいった。

「これこれ神浦、聞きたいことがある。日本へキリシタンが渡ったのは、いったいいつ頃と思うかな？」

「は」というと三十格好、ほおひげの濃いさむらいが、「天文十八年かと存じます」

「まず及第、その辺であろう。……これこれ隅庄、お前へ聞こう。名ある日本の武将の中で、どんな連中がキリシタン宗に、一番早く帰依したかな」

「は」というと三十二、三、薄あばたのあるさむらいが、「大友義鎮、大村忠純、有馬晴信というような西国方の大名が、帰依したように存じますが」

「まず及第、その辺であろう。……平戸平戸お前へ聞こう。もっと有名な中央の武将が、キリシタン宗へ帰依したが、その武将の名を知っているかな？」

「は」というと四十年輩、片耳欠けたさむらいが、「織田信長かと存じます」

「まず及第、その辺であろう。……唐津唐津お前へ聞こう。どうして日本の武将連が、キリシタン宗へ帰依したかな？」

「は」というと四十二、三、胸毛の多いさむらいが、「天帝如来を信仰し、現世においては安心を得、死して天国へうまれよう……」

「ははあ、それで帰依したというのか？」

「私、さように存じますが」

「零点だ、落第だよ」天草苦笑したものである。「なんの戦国の戦争請け負い人が、そんな悠長な考えで、異国の神なんか拝むものか。きゃつら金儲けをしたかったからさ。そうだよ神様をダシに使ってな。というのは天帝如来、そいつを拝むようなまねをして、毛唐の連中のご機嫌をとり、うまく通商貿易をし、ボロい儲けをしようとしたのさ。実際きゃつらは悧口だったよ。神様をさえ食ったんだからなあ。たしかにウントコサもうけた筈だ。それをなんぞや、いい年をして、安心を得るの天へうまれるのと、今頃つまらないことをいう。ヤクザだなあ、え、唐津。とてもそれじゃア出世はしない。考え方が間違っている。以後注意、よろしいかな。歴史であれ宗教であれ、万事万端浮世のことは、一度経済の眼を通して、研究しなければ間違いが起こる。儲かるか損するかが標準さ。儲からないもの、みんな悪い！　戦国時代の請け負い人どもが、儲からないことをするものか。さてところで信長だが、こいつはとても感心な奴で、悪党振りが大きかった。そこで考えたというものさ。きゃつらの財産をふんだくってやれとな。……伊万里伊万里、お前へ聞こう。最初に日本へ来たキリシタンの司僧、なんという名か知っているかな？」

「は」というと二十八、九、眼に星のあるさむらいが、「スペイン人ザビエルで」

「かれの持って来た財産のたかは？」

「は」といったがわからなかった。

「わからないかな、そうかもしれない。絶対秘密になっているんだからなあ。が、伝説による時は、ザビエルの持って来たその財産、日本の国なら二つも買える！　そんなにも莫大なものだったそうだ。そいつへ眼をつけたというのさ。感心な悪党の信長がな。……多比良多比良！」と声をかけた。

千代田城図面

多比良と呼ばれた五十歳ぐらいの武士、

「は！」といったものの尻込みをした。答えそこなって、以後注意、落第だよ。出世しまい！　などといわれるのがこわかったからだ。

天草時行一向平気、そんな様子には気がつかないらしい。

「大ばくち打ちの信長が、南蛮寺を建てたのはいつだったかな？」

「さようで」といったが知らなかった。「失念致しましてございます」

「よろしい、満点、その方がいい。無駄な年号なんか覚えているより、そろばんはじきを習う方がいい。満点ついでにもう一つ聞こう。なぜ南蛮寺を建立したかな？」

「は、やっぱり紅毛人の、ご機嫌を取るためでございましょう」

「百二十点！　感心感心。お前むやみといい点を取るなあ。ではもう一つ質問しよう。機嫌を取ってさてそれから？」

「は」といったがまたわからなかった。そこでもう一度ほめられようと、「失念致しましてございます」

「今度はいけない、零点だよ。失念ということがあるものか。お前ははなから知らなかったのだろう。そうそういつも柳の下に鰌というものはいるものではない。メッキははげる。

以後注意！　よろしいそれでは教えてやろう。南蛮寺を建てた原因はな、例の途方もない財産を、一所に集めるためだったのさ。集まったところでふんだくってやれ、つまりこういう腹だったのさ。ところがザビエルもただ者ではない。天父(てんぷ)よ！　などと変なことをいって、平気で南蛮寺を建てさせたが、お宝の方は出し惜しみをして、献上しなかったというものさ。そこで怒ったのが信長だ、おれが建てたんだからおれがこわす、ひどく合理的に考えて、南蛮寺を破毀(はき)し信徒をいじめ、日本における第一期の、宗教迫害をオッぱじめたのさ。つづいて出たのが秀吉さ。この男は一種の気違いでね、いってみれば誇大妄想狂だ。その秀吉が最初のうちは、やはり信長のまねをして、キリシタン宗徒を大事にしたが、これまた金がほしかったからさ。ところがどうしても献金をしない。そこで怒って第二期の迫害！　つづいて出たのが家康だ。この家康だけは真人間だったが、少し粘液質の鈍感者で、はなやかな事は出来なかったらしい。ところが奇妙にも宗教心があって、天海(てんかい)だの崇伝(すうでん)だのというような、坊さんをそばへ集めたものだ。そうして真実キリシタンをも、信仰したということだ。そこへ眼をつけたのがキリシタン宗徒で、はじめて例の大財産を、引き渡してやったということだが、しかし献金したのではなく、保管を託したんだということだ。もっとも金なんかあずかるとおおかた流用するもので、その途方もない財産も、半分くらいは使われたかもしれない。それはとにかくその時にだな、キリシタン宗徒と家康とが、一つの約束をしたそうだ。徳川幕府の続くかぎり、将軍家はキリシタンの信者となろう。その証拠として徳川家にとり、何より大切の千代田城の縄張り、そいつを宗徒へ渡して置こう。……さて」というと天草時行、ここで微妙な微笑をしたが、「もう大概わかったろう。すなわち二本の巻軸が、千代田城の縄張り図面なのさ。ただし」というと苦笑した。「今の話は伝説だよ。真偽は保証の限りではない。いや」というとどうしたものか、天草にわかに真面目になった。

わかった！　住居！

真面目になった天草時行、急に暗示的にこんなことをいった。

「もう一本の巻軸を、この巻軸へつなぎ合わせ、それが事実千代田城の、縄張り図面となったなら、伝説が伝説でなくなるのさ。そうだよ、伝説が事実になるのさ。すなわち素晴らしい財産が、千代田城中の一ヵ所に――ここだよここだよ、井桁(いげた)の地点だ！　ここに隠されてあろうってものさ。理由は……」といったが口をつぐんでしまった。

カッ、カッ、カッと馬のひづめが、門のあたりで聞こえたからである。

「おかしいなあ」と天草時行、「こんな時分に馬に乗って、誰が訪ねて来たのだろう？」

くぐり戸の開く音がした。つづいて玄関をあがる音、間のふすまがやがて開き、現われたのは長崎左源太、すわるといきをはずませた。

「なんだ、お前か、変哲もない。あわただしいなあ、どうしたんだ」

「天草殿、大きな獲物」左源大のっけからいい出した。「島原城之介のおり場所を、だいたい突きとめてございます」
「ああそうだろう、だいたいだろう」時行期待もしないらしい。「そのだいたいが、あぶないものさ『この天が下、人あるところ、みなそれがしの住居でござる』などと途方もなく大たばをきめこむ、あの島原城之介の住居だ。なかなか目つかるものではないよ」
「いえ」と左源太膝をすすめた。「今回にかぎって、おおかたたしか……」
「そうだろうて、おおかただろう。が、ともかくもいってごらん」
「は、今日私こと、所用ありまして小梅の方へ……」
「まあさ」と天草とめてしまった。「おやめよおやめよ、道行はな！　一句でよろしい、どの辺だな？　感覚でわかる。俺の胸に、ピーンと響くか響かぬか、それが標準。いってごらん」
　そこで左源太いったものである。
「南葛飾、寺島村、蓮華寺のうしろ、渋沢の藪地！」
「待て！」とにわかに天草時行、鬼気のある声音で一喝した。
「ううむ、そうか。渋沢の藪地か！　ははあなるほど、渋沢だな？」突然マリのように飛びあがった。「これ、馬は幾頭ある？」
「十五頭！」といったのは隅庄という武士。
「至急繰り出せる人かずは？」
「は、大略、三十人！」こういったのは平戸という武士。
「よし、繰り出せ、三十人！　そのうち十五人は騎馬で行け！　このおれも行く、真っ先に！　……地雷弾を持て！　火縄を長く！　……左源太、功名をしたなア！　間違いはない。そこが住居だ！　渋沢の藪地のまん中に、一座そびえている傾城塚！　時々女の泣き声が、聞こえて来るという世間の噂！　な、わかったか。城之介めが、良家の娘をたぶらかし、こめて置くのだ、その塚へ！　傾城塚こそきゃつの住居！　それ繰り出せ！　勝ったぞ勝負！」
　パッと玄関へ走り出した。
　と間もなく巴御殿の、大門の戸がいっぱいに開き、サーッと駈け出した馬上の武士、すなわち天草時行で、つづいて一騎、長崎左源太！　さらに一騎、さらに一騎、さらに一騎！
　間隔を置いて十五人、月明りの町を走らせた。
　しかるにこの時、巴御殿の塀に、ピッタリ身体をくッつけてじっと様子をうかがっていた、一個の覆面の武士があったが、ツト離れるとどことも知れず、立ち去ったのは何者であろう？
　それはとにかく、この頃のこと、渋沢の藪地を前にして、向かい合っている男女があった。
「あねご、おわびだ。おれが悪い！」

忠三の推理

　渋沢藪地を背景にして、地面へべったり膝を揃えあやまっているのは早引の忠三。その前にこれもベッタリとすわり、怒っているのはイスラエルのお町、自然としゃべるのは忠三だけで、お町はムッツリとだまっている。

「血がね、なるほど、なくなりましたかね。で、なんですかい、ネロちゃんが、居縮(いすく)んでしまったとおっしゃるので。ネロもよくねえ、たのみ甲斐(がい)がないや。ヤイ、ネロめエーッ」と毒づいた。

南洋鸚鵡の花ちゃんと、藪地の裾で狂っていたネロ。ネロめエーッとしかられたので振り返ったが、お町ではなくて忠三だと見ると、ミーンとも鳴かず背も低めず、また花ちゃんと狂い出した。つまり完全に無視したのである。

と純白のつばさをひろげ、ピョンと花ちゃんが飛びあがった。とネロちゃんも負けてはいない。背筋をうねらせるとポンと飛ぶ。とまた花ちゃんがピョンと飛ぶ。するとまたネロちゃんがポンと飛ぶ。そのつど月光がはね返り、水銀のようにチラチラする。

「だがね、あねご」と手を揉みながら、「寮からここまでは長道中、そうフンダンに血が流れては十石あろうと足りませんや。いずれポッツリポッツリと小出しに出たんじゃアありましょうが、それにしてもだ、もうこの辺で、ポッツリポッツリもやんだ方がいい。でなかったら命が持ちませんや。そうはいってもごもっとも。血のしたたりがなくなって、案内役が休んだでは、追っかけてゆくことが出来ませんからねえ。そこでおこって地べたへすわり、何をいっても返辞さえしない。でこうなっちゃア仕方がねえ、わっちが懸命に探しやしょう。けだものが骨を折ったんだ。そこで人間が働くってものだ。なんのちっとも不思議なものか」訳のわからないことをいい出した。「ヤイ、でくの棒、手めえ達も悪い」突然うしろを振り返った。

後を慕って追って来た、忠三一味のこぶん達が、数間のうしろにたむろしている。お町の機嫌が面白くなく、忠三がお辞儀ばかりしているので、近寄りかねているのである。

「な、いいか、こんな場合にはな、一緒になってあやまるか、一緒になって探すものだ。それを一番楽な方をとって、棒杭(ぼうくい)のように突ッ立っていやがる！　『おれは三番目の人間だよ』などというような面(つら)をして、そばに立って見ているのは、間違いはないが卑怯(ひきょう)だぜ！　勇気があったら渦中(かちゅう)へ投じろ！　が待ってくれ、そうはいっても、むやみと雑兵(ぞうひょう)に荒らされても、探索の手口が狂ってしまう。……ええと、ここは渋沢の墓地、うしろは蓮華寺、あれた墓地！　墓地へ隠れはしないかな？　左は沼地、右は田畝(たんぼ)、そっちへトッ走りはしないかな？　おれの身体が三つあるなら、三方へ走ってゆくのだが、お生憎様、一つしかねえ。でくの棒達を走らせたところで、役に立たねえのは受け合いだ。いかな城之介が行者でも、まさか天へはのぼって行けめえ。それにさ、どんなに高く踏んでも、天国へ行けるような玉ではない。では地獄へはということになるが、むぐらでないんだから土はほれめえ。そこでいきおい正面の、藪地なるものが問題になるが、渋沢の藪地と来た日には、あの八幡(やはた)の藪知らずより、もっとこみ入った藪地なんだからなあ。手がかりもないのにうかうかと、飛び込んでゆくのは考えものだ。……と、こんなことをいっているうちに、時がドンドン経ってしまう。あの早足の城之介め、サッサと遠くへ行ってしまうだろう。だんだん間がはなれてしまう」忠三不意に飛びあがった。「あねご、しめた。土が軟かい！」それがどうしたっていうのだろう？

藪地の小路

「あねご、しめた。土がやわらかい！」叫んで飛びあがった早引の忠三、今度はにわかに前のめりに地面へ腹ばったものである。

月光をなま白く肩から浴び、坐り込んでいるイスラエルのお町、こう忠三に叫ばれても、身動き一つしなかった。

しかしその次の瞬間に、こう忠三にわめかれた時、はじめてお町立ちあがった。

「ね、あねご、そうじゃねえですか。右に鉄杖、左に袴様、おそらく島原城之介、引っかかえていたに相違ねえ。その上きゃつは大男、重い身体を持っていまさあ。はいている下駄は一本歯！」

「ああなるほど、下駄の歯跡が！」

「やわらかい土にさ、ついている筈だ！」

「感づいたねえ、いいところへ！　探しておくれよ。妾(わたし)も探す」

お町、同じく腹ばった。

「探しますとも、罪のつぐないだ！　そうだ、あっしの駄弁のね！」忠三、地面を廻りだした。

「おッあった！　いやちがう！　わだちの跡だ、荷車の！」

「そうだよ、そうだよ、お前のセイだよ！　小梅のほとり、寮住居、萩の柴折戸、金目垣、などと、お前さえしゃべらなかったら、いくらあいつが魔法使いでも、探し出すことは出来なかったんだからね。ああ、妾たちの住居をね。……おッ、歯跡！　あったあった！　おや、ちがう。石の取れた跡だ！」先へ先へと這ってゆく。手で地面を探るのだろう、ガザガザ枯れ葉の音がする。

「もう一度あやまる。駄弁はいけねえ。慎みますとも、今度はね。……こいつはどうだ？　またちがった！」

二匹のけものが這うように、先へ先へと這ってゆく、大藪地(ジャングル)の裾まできた時である。

「今度こそ本物！　歯跡があったア！」早引忠三喜声をあげた。

「どれ！」というとイスラエルのお町、はねるように傍(そば)へ飛んで行ったが、「間違いはないよ、一本歯の歯跡！　鋤(すき)だ鋤だ、鋤を打ち込んだようだ！」

クッキリとついていたものである。

「それじゃこいつを！」

「たどって行きやしょう！　……ここにもある！　それここにも！」

「もう大丈夫！　ここにもあるよ！」

大またに歩いた証拠である。一間ぐらいの間隔を置き、藪地の裾に沿いながら、一本歯の歯跡がついている。

すっかり勇気づいたお町と忠三、歯跡歯跡と追っかける。と突然消えてしまった。

「おい忠さん、歯跡が消えた！」

「待ったり」というと早引の忠三、最後の歯跡へ眼をつけたが、「あねご、見なせえ、位置が違う」

「位置？」とお町にはわからないらしい。

「そうじゃアありませんか、ねえ、あねご。これまで歯跡は

藪地に沿い、一の字を引いておりましたよ。ええそうでさあ、先へ先へと。ところがこいつは藪地へ向かって一の字を引いておりまさあ」
「わかった。それじゃア、城之介め、ここから藪地へはいったんだね」
「へい、さようで、疑いなく」
「では妾たちもはいって行こう」
「オーイ！」と忠三、こぶんを呼んだ。「手めえ達も来い。ついて来い！　先へ行くなよ。後からだ！」
藪地へはいったお町と忠三、「こいつア不思議だ！」と声をあげた。
もちろんハッキリとではなかったが、そうしてひどく狭くもあったが、路らしいものがウネウネと一筋ついていたからである。

塚の前後

周囲十町はたっぷりとあり、喬木灌木生い繁り、加うるに蔓草が縦横にはびこり、一旦うかうかはいろうものなら、容易なことでは出られない。ちょっと形容が大げさだが、いわば人跡未踏ともいうべき、この渋沢の大藪地に、路がついているということは、相当驚いてもよさそうであった。いやそれどころかその路の上に、一本歯の歯跡がついていた。
「あねご！」と忠三はずみ声をした。「わっちア今までうっかりしていたが、女の泣き声が聞こえるというので、世間でやかましい傾城塚、ありゃア確か渋沢の、この藪地の中にある筈ですぜ」
「そうそう」とお町すぐ応じた。
「そうするとお前この路は、その古塚に通じているかもしれない」
「そこへ持って来て一本歯の跡だ。あねご、知れましたね、きゃつの住居！」
「女の泣き声という奴も、塚があいつの住居ときまれば、どうやら胸に落ちようじゃアないか」
「大オチ大オチ！」と手をうった。
『イスラエルの神へにえささげようぞ』この手でゴロゴロころがして来た、大江戸のいいところの別嬪さんたちを、野郎、そこへ蓄えているのだ。その上取りためたお賽銭！」
「お賽銭？」と興味もなさそうに、「そんなものより妾にゃア、袴様の方が大切だよ！　さあ急ごう、オイ忠公！」
「合点！」とばかり走り出した。
走りにくい走りにくい。路とはいっても名ばかりである。野茨が左右から手を出している。袖や裾を引っ張ろうとする。たけにもあまる雑草が、路の上を蔽うている。腐った落ち葉、足がすべる。ジクジクした沼、落ち込みそうだ！　大岩大木がたおれている。月光はささない。だから暗い。ところどころに葉もれの月！　枝葉がゆれて、光を乱し、チラチラ動くので幽霊だ！
忠三が先頭、お町が続き、その後からこぶんども！　縦隊をつくって突きすすむ。
と、にわかに早引の忠三、ピタリと足をとめたものである。
「あねご、聞きなせえ。ひづめの音！」

なるほど、遙かの行く手にあたって、十数頭の馬のひづめ、カッ、カッ、カッと聞こえて来た。藪地の中を、算を乱さず、こっちへ近寄って来るらしい。
「おかしいねえ。何者だろう？」
「おかしいなあ。解せねえや」
「なんでもいいや。急ごうよ」
こっちが進むに従って、ひづめの音も近寄って来る。しかし距離は遠いらしい。かすかにかすかに聞こえるのである。
と、一ところ藪地が跡切れ、まるまるともりあがっている塚があった。
「あねご、こいつだ。傾城塚！」
「調べてごらんよ、足跡を！」
「どれ！」と忠三腹ばった。ここらあたりは木立がない。月光隈なく落ちている。それに照らされて一本歯のあと、巨然とそびえた塚の裾に、点々とクッキリついている。
「あねご、あった！　こっちのものだ！」
「入り口をお探し。塚の入り口！」
「ヤイ野郎ども、さあ手をかせ！」
岩石と土壌と雑草とで、堅くよろわれている傾城塚、入り口はどこにあるのだろう？　ただ寂然と立っている。
と、その塚の反対側にあたり、今まで聞こえていたひづめの音、急にとまって静かになった。
天草時行の一隊が、塚の向こう側へ着いたらしい。

窟の中

傾城塚の内部である。
……
正気づいた袴広太郎が、塚の中で経験した出来事は、全く意外なものであった。
最初に知覚へのぼったのは、幾人かの女が集まって、合唱しているような声であった。どこから聞こえるともわからない。遠いところから来るのだろう。
「ここはいったいどこなんだろう？」
重い眼をあけて見廻して見た。なんにも見えない、真っ暗である。身体がだるく力がない。そうして全身がズキズキ痛む。手であたりを探ってみた。堅いつめたいデコボコしたものが、身体の下にころがっている。
「ああこれは岩らしい。おれは岩の上にねているらしい」そろそろと両手を伸ばしてみた。何物も指先にさわらない。広い空間が延びているらしい。いよいよ広太郎にはわからなくなった。
「いつこんなところへ来たのだろう？　どうもハッキリわからない」完全に記憶がよみがえらないらしい。「起きられるかな？　起きてみよう」まずゴロリと横になった。それから手をついて起きあがろうとした。が、そいつは失敗であった。手がほとんどということをきかない。突いたとたんにさすような痛みが、肩の辺からわき起こった。で、ドタリとたおれながら、指先を肩へあててみた。肩が布で巻かれている。それ

を通してベットリと、つめたい物が指に触れた。「はてな」といいと嗅いでみた。間違いはない、血糊(ちのり)である。「肩に傷を受けたらしい」こう思った拍子に広太郎の心へ、突然記憶がよみがえって来た。「小梅の寮……島原城之介……そいつの鉄杖でドッシリと……そうだ。おれはたたかれた筈だ。……それから？　それから？　どうしたかな？」それからのことはわからなかった。「気絶をしたんじゃアあるまいかな？」ふとここへ気がついた。

「うん、どうやら気絶したらしい。そうしているうちにこんなところへいつか運ばれて来たらしい。……とするとここはどこなんだろう？　そしていったい何者が、おれをこんなとこへ運んだのだろう？」これはすぐにも考えることが出来た。

「城之介めだ！　きゃつに相違ない！」思わず声に出していったものである。すると全く意外にもすぐ手近から返辞が来た。

「袴氏、目ざめられたかな」聞き覚えのある、しわがれた島原城之介の声である。

驚いた広太郎痛みも忘れ、ムックリとばかり起きあがった。とまた城之介の声がした。

「お騒ぎなさるな、危害は加えぬ。珍客でござるもの、なんの危害を。……」つづいて笑い声が聞こえて来た。「アッハッハッハッ珍客珍客。しかし人質といってもよろしい」

声のする方へ眼をやった。やみの暗さを一層黒め、一個の人影がうずくまっていた。島原城之介に相違あるまい。何かいおうと思ったが、物をいうさえ大儀であった。で広太郎はだまっていた。とまた城之介の声がした。

「ここはな」となんとなく、嘲笑的に、「貴殿、当分のお住居でござる。で、一応部屋の様子を、お目にかけて置く必要がござる。まず正面をお見詰めなされ」

立ちあがるらしいけはいがした。と、とびらでも開けるような、ギイ――ッという音が聞こえて来た。とたんに一つの光景が、広太郎の眼前に展開された。形にして穹窿型(きゅうりゅうがた)、光にして琥珀色(こはくいろ)、それが朦朧(もうろう)と現われたのである。すなわち広太郎の正面へ、別の部屋が姿を現わしたのである。

だがなんとその部屋の怪奇なことは！

広太郎にとってはこの部屋の様(さま)は、一生忘れることが出来なかった。とはいえ、それとて一口にいえば、城之介の奉ずるイスラエル教の、単なる道場に過ぎなかったのではあるが。

奇怪な柱

広太郎の眼前に展開されている部屋は、広さおおよそ二十畳敷きぐらい、自然と出来た岩窟(がんくつ)で、その正面の奥深いところに、人工を加えた祭壇があり、その上に巨像が立っていた。

その巨像が異様なのである。

けもの神のような裸体の男、女怪(じょかい)のような裸体の女、まさしく二体ではあったけれど、一体のようにくっついている。木で造った像である。それは繁殖の神である。

その巨像の右と左に、青銅らしい香爐があり、紫陽花色(あじさいいろ)をした太い煙りが、うねりながらもうもうと立ちのぼっていたが、開けられた戸口からこっちの部屋へ、太いたばのように流れ込んで来た。そいつを鼻にした広太郎が、思わずハッハ

ッと喘いだのは、煙りに含まれている刺戟性のにおいが、一時に広太郎の愛欲を、クラクラとかき立てたからである。
天井から龕灯がさがっていた。瑤珞を持った南蛮製の、ギヤマン細工の巨大な龕灯で、そこからさしている琥珀色の光が部屋全体を輝かせている。神像のうしろには錦襴の幕が、だらりとひだをなしてかかっていたが、龕灯の光に照らされて、その刺繍が浮き出していた。逞しい両性の肉体が、からみ合っている刺繍である。
四方の岩壁には無数の絵画が、黄金色の額縁にはめられて、壁画のように懸けられていたが、龕灯の光に照らされて、絵面が朦朧と浮かび出ていた。両性秘戯の画面であった。
しかしこれらの光景は、さして驚くにもあたらなかった。
驚くべきは柱であった。
部屋の四隅に立っていた。
それは形容を絶したところの、醜い形を持っていて、再視することさえ出来なかった。男性に則った柱なのである。
ところで柱を囲繞して、うごめいているのはなんだろう？
柱を一本の箸とすれば、真ん中どころから下へかけ、無数の蛆がウネウネと、うごめき廻っているのである。そのため柱その物が、ウネウネと動くように見えるのである。
なかば裸体の女達が、幾十人となく柱を取り巻き、呻き声をあげているのであった。
その呻き声が一緒になって、一種の合唱をなしている。だが、女達は苦しみながら、そういう振る舞いをしているのではなかった。それは女たちの表情でわかる。
柱にすがっている一人の女の、両方の肩は力瘤のため、肉腫のようにふくれあがっている。柱に巻きついている一人の女の、弓形をなしたふくら脛は、ところどころから血を流している。柱に押しつけている一人の女の、両の乳房は左右へはみ出し、つぶれて膿でも出しそうに見えた。そうも熱心に縋っているのであった。
女達は汗にぬれていた。時々すべってたおれることがあった。とすぐに飛びあがり、またも柱へすがるのであった。席のない女は他の女を突きのけ、そのすき間からすがろうとした。と突きのけられたその女は、突きのけた女をさらに突きのけ、急いで柱へ取りすがった。誰も彼もみんな恍惚としている。
四本の柱で行なわれている運動！　さすがの袴広太郎も、放心せざるを得なかった。
「ああこいつはまぼろしだ！」
「いや！」と城之介の声がした。「現実でござるよ、袴氏！」

裸体円陣

「現実でござるよ、袴氏」こういった城之介の声のうちには、真面目の響きがこもっていた。
「なんと見られるな、あの柱を？」
「けがらわしいものだ！　冒涜だ！」
「いや、宗教の根本でござる」島原城之介いいつづけた。「ギリシヤ人種における親愛の神、アリアン人種におけるファリスの神、エジプト人種におけるオシリスの神、チベット人種における天地仏、あれをもって神体と致しております」

「日本にはない！　この日本には！」袴広太郎はわめくようにいった。
「北多摩郡の多穀神社、笠島の道祖神、屋張の国の田県神社、印旛郡の熊野神社、奥州塩屋の金精神、信濃の△△、日向の△△、四国の五剣山、美濃の山神、いくらもあります！　いくらもあります！」
「が、何者だ！　あの女達は！」
「良家の処女さ！」と城之介の声、ここでにわかに嘲笑的になった。「よくよくご覧、袴氏。みんなあの通り喜んでおります」
「呪縛されているのだ、貴様のために！」
「さよう」といよいよ嘲笑的に、「あらゆる女は呪縛されたがっている」
「だまれ！」と叫ぶと広太郎、勇を振るって立ちあがろうとした。肩が痛い、立ちあがれない。で、ムズとあぐらをかいた。
「袴氏」と城之介、隣室から来る琥珀色の光に、ぼんやり半身をひからせながら、広太郎を上から見下ろしたが、「一切万事浮世のこと、愛欲の目もりをはずしては、物の値打ちをはかることは出来ぬ。が、貴殿はまだお若い。そういうことはわかりますまいな。さようさ人間四十歳にならぬと、その辺の消息ハッキリしません。若輩と老成の相違点、愛欲をぼかして眺めるか、愛欲を正しく眺めるか、係って一点にあろうというものさ。ところで」というと城之介、今度はヘラヘラ笑い出した。「拙者になると少し上手だ。愛欲を利用して金儲けをします。だが」というと城之介、相談でもするような調子になった。「いかがでござろう、袴氏。ここにある女もここにある宝も、みんな貴殿に進呈いたす。その代わり例のイスラエルのお町、拙者にお譲りくだされぬかな？」
　ヌッとのぞき込んだものである。
　が、広太郎返辞をしない。全身をワナワナふるわせながら、隣りの部屋をながめている。見まい見まいとするのである。と一層眼に焼きつく。全身の汗、胸の動悸、クラクラクラクラと眼が廻る。
「ふふん」と城之介鼻を鳴らした。「お厭かな、返辞がない。厭ならよろしい。無理にはたのまぬ。その代わり、いつまでもとめて置く、愛欲地獄を味わわせてやる。毎日毎夜拝ませてやる。精根おのずからつかれ果て、自滅するまで拝ませてやる。まず手はじめ、今夜からだア……」
　ジャラーンと鉄杖の音がした。同時に袴広太郎の身体、ドンと隣室へころげ込んだ。島原城之介鉄杖で、広太郎の腰を払ったのである。
　ギ――とへだての戸が閉じた。とたんに一斉に女達、広太郎の方へ顔を向けた。
　と、そとから城之介の声！　「さあ袴氏、窒息なされ！」
　忽ち数十人の裸体の女、柱から離れて円陣をつくり、グルグルと広太郎を取りかこんだ。
　渦まいているのは香爐の煙り！　次第に円陣がちぢまって来た。
　しかしその時轟然と、傾城塚のそとにあたり、爆発の音が響き渡った。

藪の中で

「日本紀元二千三百二年、傾城塚爆発発掘、教主身をもってわずかに逃がれ、犠牲の処女大半焼死、イスラエル教覆滅し、珍器財宝没収されおわんぬ」

西教要覧の記事である。日本紀元二千三百二年といえば、慶安三年のことであって、「爆発発掘」と記されてあるが、これは一人でやったのではなく、爆発したのは天草一味であり、発掘したのは水戸光圀と、朱舜水との一行なのであった。つまり時行を大将として押し寄せて来た天草一味が、傾城塚へ地雷弾をしかけ、裏口を破壊したのである。その火が内部へ燃え移り、閉じこめられていた女達が、大半焼死したのである。ところで城之介はどうしたかというに、すなわち身をもって逃がれたのであるが、その間にちょっといきさつがあった。というのは藪の中で天草一味にグルグルと取り巻かれてしまったので、本来なれば殺されるところを、時行と次のようなかけ合いをして、ともかくも命だけは助かったのである。

「オイ城之介、もう駄目だ」

「それじゃアおれを殺すつもりか」

「杉窪の里の裏道で、築土を殺したのはお前だろう？」

「時のはずみでなぐり殺したよ」

「その時巻軸を奪い取ったろう？」

「いやおれは取りはしない」

「あの時築土が持っていたのだ、一本の方の巻軸をな。一本の方はおれが持っていたが」

「いやおれは知らないよ」

「あとから死骸を探しにやった。築土の死骸は谷底にあった。だが巻軸は持っていなかった。お前が取ったに相違ない」

「いやおれは取りはしない」

「ではお前はどこまでも、巻軸のありかを知らないというのか？」

「いや巻軸は持っている。だが築土から取ったのではない。袴広太郎というさむらいから、全く偶然手に入れたのだ」

「そうか、そんなことはどうでもいい。とにかくそいつをこっちへ渡せ。そうしたら命だけは助けてやろう」

そこで城之介は懐中から、例の巻軸を取り出すと、天草時行へ渡し、のがれて行方をくらましたのである。

ところでこの夜袴広太郎は、城之介のために誘拐され、傾城塚の中にいた筈だが、その運命はどうなったかというに、女達と一緒に火焔をくぐり、塚から外へ逃げ出したのであった。負傷している上に神気つかれ、ほとんど人心地もなかったので、それこそあてなしにヨロヨロと藪の中を逃げ廻っていたが、おのずと裏口の方へ行ったものとみえる。「袴様！」と呼ぶ声がした。ヒョイと見るとイスラエルのお町が、忠三と一緒に走って来る。

「おっ、お町殿！」といいながら、そっちへ向かって走り出した時、塚から逃げ出した大勢の女が、二人の間をかけ隔ててしまった。そしてまたもや広太郎、夢中で藪の中を逃げ廻っていると、松明の火が近寄って来た。とまたそこから女の声で「袴様！」と呼ぶ声がした。ヒョイと見ると意外も意外、道服をまとった老人や、葵ご紋の少年武士や、大勢の武士に

守られて、杉窪銅兵衛の娘の君尾が、こっちへ走って来るではないか。そこで「君尾殿！」と叫びながら、そっちへ走って行こうとすると、巴御殿へ引きあげる、天草一味の騎馬隊のために、またも間を隔てられてしまった。で、夢中で走っているうちに、うまい具合に藪から出たが、同時に昏倒してしまったのであった。

と、そこへ来かかったのが、異風をした百人の行列で、偶然この手に救われることになった。

木地師

昏倒した袴広太郎の前へ、通りかかった異風行列、しかし異風といったところで、物好きにやっている異風ではなくて、縞の筒袖に革の帯、山袴をはき小刀をたばさみ、厳重を極めた旅よそおい、すなわち脚絆をはき甲掛をつけ、火事場頭巾に似たような、あごまで隠れる頭巾をかぶり、揃って小鎌をひっさげている、都会人らしくない人間なのであった。しかし隊伍は二列縦隊で、おのずから規律がととのっていて、犯しがたく思われた。先頭に立ったは六十年輩、夜のことで顔はわからないが、たけ高く腰据わり、ガッシリとした肉づきなど、威風の備わった老人で、これが一隊の頭らしかった。その後から駕籠が来たが、こればかりはみやびていて、貴族の用いそうな駕籠であった。しかしどうやら空駕籠と見え、さも軽そうにかついでいた。

「や、ここに怪我人がいる」「しかも立派なおさむらいさんだ」

「ひどく藪の中が騒がしい」「火の手が見える。火事かもしれない」などと口々に囁き合った。すると例の老人だが、初めは笑止らしくいったものである。

「大事の前のこれは小事だ。お気の毒だがこのおさむらいさん、介抱してやるひまがない。さあ野郎ども、急いでゆけ」

――で一隊動きだしたが、突然その時広太郎が、

「杉窪の里、銅兵衛殿、必ず君尾殿をお助け致す！」

君尾の姿を見たことによって、責任感を呼び起こしたのであろう。譫言ながらに叫んだものである。そうしてこれが広太郎の運命を、俄然一変させたのである。というのは例の老人だが、

「とまれ！」といって号令をかけると、スタスタと後へ引っ返して来た。

「おかしいなあ。このおさむらいさん、銅兵衛殿を知っているらしい。これは捨ててはおかれない。これ野郎ども介抱せい！　……あのお方以外には乗せられない駕籠だが、場合が場合仕方がない。このおさむらいさんをお乗せ申せ」

で、広太郎は助けられたのである。

小鎌を月光に輝かせ、しだいしだいに足並みを早め、やがて藪地の裾をめぐり、その一隊が立ち去った時、藪の奥から女の声がした。

「袴様！」と血をはくような声だ。

藪をおしわける音がして、現われたのはイスラエルのお町で、もう一度呼んだが答えがなかった。でベタベタと地面へ坐ると、茫然として考え込んでしまった。地上に無数の足跡がある。それへお町は目をつけたが、

「みんなつま先で歩いているよ、多勢の木地師が通ったと見

える」
　さてその木地師の一隊だが、しのびやかに江戸へはいったのは、それから程経た後のことであった。
　やがて来かかったのは紀州家のやかたで、例の老人が裏門をたたいた。「誰じゃ！」と門内から声がした。「富士見の将右衛門！」と老人が答えた。
　と、ギーと門があき、スルスルとはいって行ったその老人、しばらくの後出て来たところを見ると一挺の女駕籠を先立てていた。
　それを守って今度こそ、どことも知れず立ち去ってしまった。
　だが事件はこれだけでは済まず、同じその夜巴御殿では、風変わりの事件が起こっていた。
　というのはほかでもない。城之介から巻軸を奪い、小踊りをした天草一味が、巴御殿へ駈け込んだ時、百人あまりの覆面の武士が、巴御殿を占領していて、帰って来た天草一味の者を、一網打尽にしたのである。

二組の旅人

　天草時行の一味の者を、一網打尽にした覆面の武士は、由井正雪の一党であった。これより以前、天草一味が、傾城塚を攻めようとして、騎馬で乗り出したそのおりから、塀にピッタリへばりつき、様子を窺っていた武士があったが、これこそ正雪一党の中でも、忍びの名人として知られていた、秦式部という人物で、すぐに榎町へ取って返すと、腕利きばかりをすぐり出し、巴御殿へ潜入し、留守番の者をしばりあげ、天草一味を待ち設けていたので、苦もなく計画がとげられたのである。その目的とするところは、例の巻軸を奪うことで、天草一味とらえられたからは、もちろん二本の巻軸は、正雪の手へはいったことであろう。
　さてそれはそれとして、その夜から幾日か経過した。ある気持ちのよい朝まだき、根岸、朱舜水の屋敷から、一群の旅人が発足した。朱舜水、光圀、それから君尾、この三人を主人公とし、他に十人の武士をまじえた、すなわち十三人の団体で、いずれも目立たない旅よそおい、編笠を深くかぶっている。
「征東大将軍宗良親王、信濃におわしたので信濃宮、そのお方のご遺跡をはじめとし、南朝方の諸将の遺跡が、随分信濃にはあるようでござる。是非ともこれは調べなければならない。楽しみでござるよ。今度の旅行は」こう言ったのは朱舜水。
「傾城塚には驚きました。まさか邪教の淫祠とは、夢にも想像しませんでしたので、どうぞして今度の旅行には、ああいうものにぶつからないように」こういったのは水戸光圀。
「信濃の秋が見られます。美しいことでございましょう。それこそ妾は山の鳥のように、思うさま歌うつもりでございます」これは君尾の言葉である。
　信濃の史実を集めようと、発掘旅行に行くのらしい。
　ところでこれと同じ日に、例の浅草の南蛮屋からも、二人の旅人が発足した。虚無僧姿のイスラエルのお町と、道中師風の早引忠三で、こんな話を取りかわしている。

「で、テッキリ信州路へ、入り込んだということになるんでさあ」例の調子で早引の忠三。
「もしもそっちにいなかろうものなら、お前そのままでは置かないよ」例の調子で、イスラエルのお町。
「ワーッ、いけねえ、もうコレだ。何かというとおどすんですね」
「それがさ、妾におどされるのが、お前にはひどくうれしそうじゃアないか」
「またあねごときた日には、あっしをおどかすのがうれしそうですねえ」
「おどかされっぷりがいいからさ」
「ところであねごはおどしっぷりがいいや。どっちみちあねごと二人っきりだ。今度の旅行は楽しみさ。口説くかな、その辺で」
「口説かれたいね、袴様に」
「あッ、なるほど、そうでしたねえ。袴様を探しに行くんでしたねえ、木地師のあとを追っかけてさ。にわかに楽しくなくなっちゃった」
袴広太郎を探すべく、木地師のあとを追っかけて、二人は信濃へ行くのらしいが、はたして木地師の一隊は、信濃方面へ入り込んだかしら？
さようこの頃、木地師の一隊、笹子峠の辺を歩いていた。

木地師の道中

海抜一千一百尺、ここは笹子の山道である。一隊の人数が歩いている。火事場頭巾のような風変りの頭巾、縞の筒袖山袴、手に小鎌を持っている。すなわち木地師の一隊である。先頭に立ったは将右衛門、つづいて二挺の駕籠が行く。その駕籠の戸が開いている。一つの駕籠にはお京様、もう一つの駕籠には袴広太郎、のどかな顔をして乗っている。その後から一百人、みんな愉快そうに話している。大変行動が自由である。秋は半ばに近づいていた。木々が黄葉を呈している。そこへ昼の陽があたっている。白々と見えるは白樺の幹だ。林では兎がはねている。こずえでは橿鳥が呼んでいる。空気には立派なにおいがある。風のかげんで川の音が聞こえる。
そこをタッタッと走って行く。時々野馬が顔を出す。ヒョッコリ熊が現われる。獣の方でも驚かない。木地師の方でも驚かない。両者はまったく親類だからである。
この光景は本当にいい！
とはいえ木地師達はなまけ者ではなかった。抜け目なくかれらは仕事をした。ヒョイと一人が列から離れ、林の中へ飛んでゆく。鎌を振るって木の幹を削る。と飛び返って列へはいる。とまた一人が列から飛び出し、林の中へ走って行く。鎌を振るって木の幹を削る。と飛び返って列へはいる。とまた一人が同じことをやる。とまた一人が同じことをやる。一百人の同勢が、かわるがわるやるのである。
そのつどかれらは話し合う。
「あいつの木目は波だろう」「あいつの木目は玉に相違ない」
「おれの目つけたのは雲に相違ない」
「いい栃だった。素敵な盆が出来る」「素晴らしい欅だった。いい火鉢が出来る」

皮を透して外側から、内の木目をあてることぐらいは、かれらとしてはなんでもなかった。というのはかれらは木地師だからである。ひとニラミで年輪の数をあて、ひとニラミで枯死する年さえあてた。

タッタッと一隊は進んでゆく。江戸から笹子まで幾十里。その間かれらは到る所で、気に入った木を目つけては、鎌でしるしをつけたものである。そうしてこれからも行く先々で、おんなじことをやるだろう。

非常に早い足並みである。しかも同じ速力である。少しもムラのない歩き方である。

と、一つのわかれ路まで来た。二十人あまりの同勢が、一方の道から現われた。

「ヤー兄弟！」「ヨー兄弟！」双方声をかけ合った。同じ木地師の連中である。で二組が一緒になり、一百二十人の同勢となった。

タッタッタッタッと歩いて行く。

夜が来た。ねなければならない。テントが張られた。休むことになった。なんと綺麗な天体だ！　ほんとに天の河の音が聞こえる。

翌朝は霧の中を出立した。

タッタッタッタッと歩いて行く。鶴瀬村を過ぎれば菱山村、甲運村を過ぎれば甲府城下、韮崎過ぎれば穴山の宿、日野春を過ぎれば葛木の駅路、ここから信濃の国となる。

そっちへズンズンと歩いて行く。

どこまで行こうとするのだろう？

駕籠二挺、百二十人、揃う足並み、光る鎌！

どこまで行こうとするのだろう！　かれらは郷へ帰るのであった。

二千九百尺の八ヶ岳、その大傾斜地の富士見高原！　そこに郷があるのである。

木地師の郷

八ヶ岳の大傾斜、富士見高原の木地師の郷！　囲繞しているのは森林である。杉、檜というような喬木ばかりが聳えている。その真ん中に空地がある。そこに立っている数百戸の木小屋、木口は非常に立派ではあるが、その造作は粗末である。それが木地師達の住居である。ところがそれらの中央に、二棟の大きな建物があった。その一棟は屋敷づくりで、頭の将右衛門の住居であるが、もう一つの方は工場のような、だだっ広い長方形の建物である。なんだろういったいその建物は？　やっぱりそれは工場なのであった。誰かがその中をのぞいたなら、シュッシュッシュッと調べ革が廻り、グルグルグルとろくろが廻り、大きなのこぎりが自然に廻転し、てこが上下へあがりさがりし、そうしてそれらの機械の間を、多数の男女の木地師達が、真面目に愉快そうに熱心に、立ち働いているのを見ることが出来よう。そうして巨大な材木の皮が、ひとりでにグングンむかれたり、また幹がひとりでに輪切られたり、板のように扁平に削られたり、そうかと思うと粗造ではあるが、盆や椀や筒などの形が、つくり出されるのを見ることが出来よう。

その建物のまわりには、栃だの欅だの檜だの、羅漢柏だの

落葉松だの高野槇だのの、すぐれた木地が積み重ねられ、丘のような形をなしている。木地師達のくらしは規則正しく、そうしてきわめて清潔で、みだらなところなどは少しもない。

だがこれは不思議なことではないか！　元来木地師というものは、最も下等な漂泊民で、木地を目つけて山から山を、獣のように渡り歩き、採った木地類は漆器屋に売り、同族結婚、姦通、自堕落、無道徳というのが普通だのに！　もっともいい木目を目つけたり、またよい根瘤を目つけたりすると、手製の小刀やのみなどで、簡単な器類は作るけれど、機械を備えた工場などを、持つようなことは決してない。それにかれらの住居はといえば、せいぜいのところ犬小屋のような、掘立小屋というようなもので、木小屋などへは住むものではない。めったに一ところへはとどまらず、絶えず漂泊しているものである。ではこの郷の木地師なるものは、本当の木地師ではないのだろうか？　いや木の性質を見抜く点や、よい木地を採集する技倆からいえば、やはり木地師には相違ない。つまり充分に訓練された、特殊の木地師だということが出来る。ところでかれらはこの郷に、いつ頃から住んでいるのだろう？　付近の杣夫などの噂によれば、今からちょうど五年前、九州島原の原の城が、落城をした直後において、移住して来たということである。さらに杣夫達の噂によれば、その際一人の紅毛人を、守護して来たということである。その人は随分老年ではあったが、しかし立派な風采で、紅毛の神様ではあるまいか？　などという事を思わせるほど、威厳もあったということである。いずれ本名はあるのだろうが、木地師たちは決してその名をいわず、限りない尊敬と親しみをもって、山の小父さんと呼んでいるそうで、そうして工場を建てたのも、また機械を作ったのも、みんなその山の小父さんの差金であるということである。そうして目下はその人は、森林の奥の大斜面の、中腹あたりにかかっている、湛慶滝という大瀑布のほとりに、一人で住んでいるということである。ただしそういう人物だけに、これまでいろいろの神秘的の噂が、杣夫や麓の村人の間に、伝承されたものであって、その著しい例の一つは、何か非常に大切なものを、守護しているということであった。

お稚子様の噂

何か非常に大切なものを、その紅毛人が守護している！　山中の杣夫や村人の間に、こういう噂の立ったのは、決して勝手に立てたのではなく、木地師の連中その者達が、時々そういうことをいうからであった。「あの人こそそれをお持ちなのだ！　そうだよ、それをね。大切なそれをね！」

だがもちろんいうまでもなく、どういう性質の大切なものかは、杣夫や村人は知らなかった。そうしてそれが知られないために、いよいよそれが重大視された。

「尊い経文だということだよ」「莫大な宝だということだ」

「あらたかな神像だということだ」

またかれらは紅毛人について、いろいろ神秘的の取り沙汰をした。

「裸でおられるということだ」「血衣を纏っておられるそうだ」「そうして時々経を読むそうだ」「そうして時々号泣する

そうだ」「懺悔(ざんげ)しているということだ」「銀鈴を鳴らすということだ」「滝の中に住んでいるそうだ」「娘よ！　孫女(まごじょ)よ！　と呼ぶそうだ」――で自然、杣夫や村人は、湛慶滝へ近寄ることを、ひどく恐れ憚かるようになった。もっとも一方木地師の連中が、そういう杣夫や村人達が、滝の付近へ近寄ることを、なんとなく嫌って制するからでもあった。いやむしろそれはこういった方がいい。木地師の連中が言葉を設け、杣夫や村人を制肘(せいちゅう)し、湛慶滝の方へ近寄せまいとするので、それで一層杣夫や村人が、湛慶滝と紅毛人とを、恐ろしいものに値うちづけ、いろいろ取り沙汰をするのであると。

だが決して杣夫や村人達は、そのため木地師を嫌わないばかりか、かえって尊敬し親しくさえした。というのは木地師の生活方(くらしかた)が、杣夫や村人よりも万事万端、進んでもおれば立派だからでもあった。「木地師ではなくておさむらいさんのようだ」これがかれらの評語であった。

だがもう一つ紅毛人について、驚くべき一つの噂があった。一人で住んでいるのではなく、この世の人間とは想われないほどに、気高い美しいお稚子(ちご)さんと、一緒に住んでいるという噂なのであった。

「あれはね、満月の晩でしたよ。仕事の都合で遅くなり、気味が悪いとは思いましたが、湛慶滝のそばを通りますとね、滝の中からあのお方が、現われて来たではありませんか、ええそうです。紅毛人がね。全身ビッショリ水ぬれです。見るとだいているじゃアありませんか、綺麗なお稚子さんをね。それが非常に妙なんです。眠っているのか死んでいるのか、そのお稚子さんは動かないのです。眼口を閉じているのです。そうしてその顔を紅毛人が、じっと見おろしているのですね。もっともう一つその二人を、見おろしているものがありました。まんまるい空のお月様です。とどうでしょう、紅毛人は布を下げたような滝の中へ、またはいって行ったじゃアありませんか。ええそうです、お稚子さんを抱いてね」

杣夫の語った物語。

さてある日のことである。

その木地師の郷の中から、活気ある喜びの声がもれた。旅へ出ていた仲間の者が、頭(かしら)の将右衛門に率いられ、郷へ帰って来たからである。

その翌日のことである。秋の木洩(こも)れ陽(び)をいっぱいに浴び、黄ばんだ草を敷きながら、話し合っている男女があった。

沈黙の二人

秋の木洩れ陽をいっぱいに浴び、坐っているのはお京と広太郎、のどかに話をかわしている。

「よい秋日和(びより)でございます」こういったのはお京である。

「もうソロソロ八ヶ岳の峰へは、雪が来ることでございましょう」袴広太郎の挨拶である。

で二人は沈黙した。

閑寂でいい。平和でいい。情景にふさわしい沈黙である。

とまたお京が話しかけた。

「歌声が聞こえるではございませんか」

「さようでございますね、木地師の歌が」

眼界にバラバラと木小屋がある。そこから聞こえる歌声である。
「犬の吠え声が聞こえます」今度は袴広太郎。
「鶏の鳴き声も聞こえます」
で二人沈黙した。
閑寂でいい。平和でいい。情景にふさわしい沈黙である。
とまたお京が話しかけた。
「お聞きなさりませ袴様。赤ん坊の笑い声が聞こえます」
「ああそうしてあやしている声も……」
で二人沈黙した。
閑寂でいい。平和でいい。情景にふさわしい沈黙である。
「穏やかな土地でございますね」こういったのはお京である。
「はい、まるで別天地で」また沈黙が続こうとする。
「なんだか私はねむくなった」袴広太郎つぶやいた。
「動くのがいやになりました。いつまでもいつまでも、坐っておりとうございます」
五度沈黙をしたものである。
お京の顔には神性がある。昔ながらの神性が。お京の顔には処女性がある。昔ながらの処女性が。いやいや昔よりもより一層、神性も処女性も深まさっている。
広太郎の顔は蒼白(あおじろ)い、小梅の里にいた頃より。そうして身体も弱々しい、小梅の里にいた頃より。しかしなんと晴ればれと、その眼が澄み切っているのだろう。
と広太郎つぶやいた。
「ああ私は休息したい。何を置いても休みたい」
「妾(わたし)も同じでございます。休みたいのでございます」これがお京の言葉である。
「どうやらここでは休めそうだ」また広太郎つぶやいた。
「きっと休めるでございましょう。お互い休むことにいたしましょう」
それから永い沈黙が来た。
不意に広太郎横になった。肘(ひじ)を枕(まくら)に寝たのである。
とお京が声をかけた。「おつむりをおのせなさりませ。妾の膝へ、ご遠慮なく」
膝枕をした広太郎、眠ろうとするのか眼をとじた。膝枕をさせたお京様は、無表情に前方を眺めている。
ちっともいやらしい形ではない。むしろ美しい群像である。人に見られても恥ずかしくはあるまい。
「エ――、エ――、エ――」と声がする。木地師達がめいめいの小屋の中で、盆だの茶筒だの菓子鉢だのへ、磨きをかけながら歌っている。鄙(ひな)びた歌の掛け声である。永遠を思わせるような単調な節(ふし)、森の木立に反響し、「エ――、エ――、エ――」と返って来る。
広太郎は眠りはしなかった。じっと考えにふけっていた。
「さわってはいけない、過ぎ去ったことへ！」口の中でつぶやいた。

平和と処女性

「おれは何にも知りたくない。おれはなんにも聞きたくない。過去をほじくるということは、ろくな結果を持って来ない。現在だけで結構だ。ひとの過去も知りたくない。自分の過去

も知らせたくない。それでいいのだ」
　お京の膝を枕にし、袴広太郎は考えた。「ききたいことは沢山ある。あの夜小松原の屋敷から、どうして突然身をくらませ、今日までどこにいたのだろう？　そうしてどういう理由があって、こんな木地師の郷などへ、この娘は入り込んで来たのだろう？　これからこの娘はどうするつもりか？　……がそんなことはどうでもいい。おれにとっては初恋人、そのお京様と逢ったのだ。もうそれだけでいいではないか。なんにも苦情をいうところはない。君尾にしろお町にしろ、こうなっては影が薄い。なんといっても初恋人、このお京様のなつかしさは、おれには何物にも換えがたい」
　これが広太郎の心持ちであった。
　お京の心持ちはわからない。
　しかしやっぱり広太郎と同じに、いうまい聞くまいとしているらしい。現在に満足をしているらしい。もしもお京にその心があったら、これだけは聞かなければならない筈だ。
「どうして肩に負傷して、木地師の駕籠などに乗っていたか？
　また忠弥の注進によれば、杉窪の里の乱闘の際姉の君尾を取り返そうと、袴広太郎という一人の義士が、追っかけて行ったということだが、その時の袴広太郎と、この袴様とは同一人なのか？」
　が、お京は聞こうとはしない。
　それにしても全く不思議である。お京は紀州家の息女ではないか。それだのに木地師というような、いやしいいやしい漂泊民の郷へ、どうして単身入り込んだのだろう？　紀州頼宣（よりのぶ）にしてからが、どうして送ってよこしたのだろう？
　何もかもがわからない。わかっていることは一つだけだ。久しい間別れていた。二人の本当の恋人同士が、思いもよらない境遇のもとに、顔を合わせたということだけだ。
　二人はいつまでもだまっている。秋陽（あきび）が森の中へさし込んでいる。木立がテラテラと輝いていた。ふとい一本の栗の木がある。その幹に何かうごめいている。老衰をしたかぶと虫である。死に遅れたかぶと虫！　季節に置いて行かれたかぶと虫！　上へあがろうあがろうとしている。生命力がないのだろう、少しあがってはすべり落ちる。でもやっぱりあがろうとする。二足三足やっとあがった。とスルスルと下へおりた。またヨチヨチと上へあがった。急に草の上へころがり落ちた。針金のような足をちぢめ、そのままるくなって動かなくなった。触角がブルブルふるえている。それもとうとう動かなくなった。巨大ないかめしい鋼鉄のような角へ、一筋日の光がからまっている。
「おれには何だか予感がする。ここの平和は破られそうだ」
ふと広太郎つぶやいた。すぐ眼の上にお京の顔が、すぐにもこわれそうなもろさを持って、清浄に白々と浮いている。「平和は処女性とは同じようなものだ。きっと破られるという約束のもとに、しばらく生命を保っているものさ」
　口に出してはいわなかった。
　酸味を帯びた感情が、広太郎の心へ忍び込んで来た。もちろんそれはかれにとっては、苦しくもあればさびしくもあった。

流され姫

お京の膝を枕とし、なお広太郎は考えていた。

「ほんとになんとこの娘は、操々としているんだろう？　ほんとになんとこの娘は、神性神性としているんだろう？　そうしてなんとこの娘は、処女処女としているんだろう？　人間ばなれがしているではないか！　神様神様としているではないか！　だから」広太郎は憂鬱になって来た。「だから傷つけて見たくもなる」

次第に皮肉な考え方になる。

「全く神様というものは、さも崇高に立っている。だから」とまたも皮肉になった。「ちょっと穢して見たくもなる」

次第に残忍な考え方になる。

「誘惑の手を伸べたなら……神様神様としたこの娘、転がって来るのではあるまいか？」

「いけない、いけない」と払いのけた。「傾城塚での蠱惑が、亡霊のようにつきまとっている。しかし」とやっぱり考えられた。「傾城塚でのあの光景、女の真相ではあるまいかな」自然不作法にならざるを得ない、眼をズーッとあげていった。その視線のとまったところに、お京の胸がもりあがっていた。豊かな乳があるのだろう。広太郎は息苦しくなった。「この膝枕も無邪気からかしら？　それとも意味のある誘惑からかしら」

そのやわらかさ、その温かさ、その弾力、その脈搏！　広太郎の情熱をそそっている。

その時お京の声がした。

「お起きなさりませ、袴様」

起きあがると広太郎端坐した。

「何を考えておられました」とがめるような声ではない。憐れむような声でもない。悲しみに充ちた声である。

広太郎には返辞が出来なかった。しかし心では考えた。「俺の心を見抜いたらしい」

だがすぐ後で歌うように、次のようにお京がいった時、広太郎は案外な思いがした。

「妾は流されたのでございます。可哀そうな女でございます。父が妾をこんな山へ。……でも悪気からではございません。妾の身の上を案じたからで。……いまに恐ろしい騒動が、この国に起こるのでございます。あの、謀反なのでございます。そうして妾もその一味へ……それで妾はこの山から、一生出られないのでございます。……父はこのように申しました。『家の血統を絶やしたくない』と……袴様！」と呼びかけた。それからほがらかにいいついだ。「でもよいところでございますのね、この富士見の高原は。気高い景色。質朴な人達。そうしてみんな働いております。よこしまな心などを起こさず、きっと木地師達はこの妾を、鄭重にあつかうでございましょうよ。女王でございますもの、この郷のね」

陽が木小屋にあたっている。ひときわ大きいのは伐木場で、調べ革の音が聞こえて来る。きられる材木の音がする。窓々が明るく眼をあけている。そこから働いている人影が見える。共力と生産とがそこにある。もちろんそうして平和がある。

しかし、はたしてこの平和が、いつまでもつづくものだろ

うか？　いやいや平和はつづかなかった。それから二日経った早朝のこと、「カワトの連中が湛慶川の岸へ、天幕を張った」という知らせが来た。
　これが事件の発端であった。

工場の内

　カワトが天幕を張ったという、ちょうどその日のことである。袴広太郎は将右衛門と、頑丈な卓を中にはさみ、工場の中で話していた。
「カワトはいったい何者でござるな？」
　こう聞いたのは広太郎。
「ああカワトで、天幕組でござるよ」気もなくいったのは将右衛門。「川の岸ッぷちに天幕を張り、そこでくらしをするところから、世人称して川渉（かわわた）り、なまってカワトと申します」
「やっぱり木地師と同じようなもので？」
「漂泊民という点では、さよう、われわれに似ております。しかしかれらにはこれといって、きまった商売がありませんでな。もっともササラや風車（かざぐるま）や、タワシだの箕（みの）だのというようなものを、人里へ出て売りつけはしますが、それとて商売のためではなく、泥棒をするツテでございましてな」
「ははあ泥棒を致しますので？」
　ちょっと広太郎眼を見張った。
「なにさそれとてコソコソでな、たいした仕事はいたしません。せいぜい干し物をふんだくったり、家畜や野菜を荒らしたり、時には子供や娘などをさらうようなこともありますが、そんなことはメッタにありませんなあ」
「とまれ厄介な人間どもで」
「それもさ特別カワトに限って、厄介な人間でもございませんて。どの方面の人間だって、たいがい厄介でございますよ。いやかえってカワトのようなものこそ、厄介でない人間かも知れませんなあ。気の向いたところでくらしをする、厭（いや）になったら引きあげる。気の向いたところでまたくらす、厭になったら引きあげる。水草を追って行きますので。きたないみなり、粗末な食べ物。自分達同士で婚礼をする。他人を仲間へも入れなければ、他人の中へもはいって行かない。物欲が少なくて単純で、見得や外聞を気にかけず、義理もしなければ義理も受けない。物にこだわらずに身体が強い。大変結構じゃアございませんかな。でわしとしては大好きで、はいさようで、カワトがね。といって大事な女子供を、引っさらわれては困りますので、今も仲間に申して置きました。『野菜や家畜を荒らすようなら、構わないから荒らさせて置け。だが気をつけろよ、女子供に！　遠っぱしりをさせねえがよい』――子供や女は大事でごわす。一人でも減っては困ります。そうでなくてさえわれわれ木地師は、年々少なくなりますのでな。仲間の減るのはいやなものでごわす。第一」というと見廻した。
「これだけの工場をささえて行くには、少しの人数では出来ませんからなあ」
　工場は活動にはいっていた。太い柱の中央に、巨大な一個の丸鋸（まるのこぎり）が、シューッ、シューッと廻っている。数人の木地師がその前にいて、一本の材木をささえている。とその先が

丸鋸に触れた。すぐにザーッと音がして、見る見る材木が両断された。そのかたわらに台がある。一つの大振りの木の槌が、ゴットンゴットンと台の上へ、規則正しく落ちている。輪切りにされた扁平の木口が、その台の上に置いてある。槌がそいつをたたいている。だんだん木口はちぢまって行く。その横手に卓がある。ピカピカ光る鋼鉄の螺旋が、その上でグルグル渦巻いている。小さい木口が載せられた。ギリギリと音がした。見る見る木口がえぐられた。

と、将右衛門ヒョイと立ち、ブラブラ工場を歩きだした。

〜〜どしどし子供を産むがいい
　盆にお椀にお茶筒に
　ひどく機嫌がよいのである。

明るく働け

鼻唄をうたいながら将右衛門、工場の中を歩きだした。

工場の片隅に娘達が、行儀よく坐ってかたまって、出来あがった器を磨いている。

「ご精が出るの、娘さん達や」将右衛門立ちどまって話しかけた。

「何を磨いているな、お石坊？」

するとお石坊が返辞をした。「はいお頭さん、子持ちお椀を」

「ああなるほど、子持ちお椀か。ほんとにいいなあ、子持ちお椀は。中から中からと子供が出る。そうありたいよ万事万端。なるたけかずはふやさなければいけない。……お杉坊、お杉坊、何を磨いているな？」

お杉という娘が笑いながらいった。「磨いておるのではございません。そそくれを取っておりますので。あのまな板のそそくれを」

「おおおおそうか、それはいい。そそくれというものは邪魔っ気なものだ。邪魔っ気なものは取った方がいい。そうしてまな板というものは、大事な大事なお勝手道具さ。そういう物こそ作らなけりゃアいけねえ。すぐに役立つ物だからなあ。とくさをかけて艶ぶきんをかけて、根つけばかり作るのは、結構なことではないからなあ。……お松坊お松坊何を磨いているな？」

「はい、あの根つけを磨いています」

「えッ、根つけ？　ああそうか。ナーニ根つけだって結構さ」こうはいったが変な顔をした。

「だが、たんとは作らないがいい。たくさんの入り用はないものだからなあ。ものずきの人間しか喜ばないものだ。そうしてそういう人達はこんなことをいっているそうだよ。『小粒のところが大変いい』『ひねったところがおつでげす』『役立たないところに値打ちがある』……アッハハハおかしくなるなあ。……お竹坊何を磨いているな？」

お竹という娘が返辞をした。「はいお頭さん、栃の盆を」

「おっとおっとそう磨いてはいけない。そんなように磨くと艶が出ない。出ないどころか消えてしまう。すべて器というものは、性質を知ってから扱わなければならない。知らないで扱うと殺してしまう。殺すために磨くんじゃアあるまいな。そりゃアそうさ、いかすためさ。……だがこの工場は明るい

なあ」

四方の窓から朝の陽が、藁束のように投げ込まれている。

〽明るくなければいけません。

また将右衛門歌いだした。小さく結んだ髪、広い額、厚いほお、高い鼻、左の眉尻にほくろがあり、太い毛が一本生えている。外光のかげんで時々光り、針でも刺さっているようだ。

ブラブラ工場を歩き廻る。もちろん監督をしているのであろう。だが高い声一つしない。その必要もなさそうである。みんなクルクル働いている。木口を戸口から運んで来る者、そいつを中途で受けとる者、器をざるへ入れる者、それを戸口から持ち出す者、一方部屋の片隅では、火が爐の中で燃えている。爐の口へたき物をくべる者、爐の上は大釜がかかっている。湯気が青白く吹き出ている。その中の液を汲み出す者。……そうしてそれを見下ろしているのは、ガッシリ組まれた天井で、その天井のすぐ下を、走っているのは調べ革！

〽働くって本当にいいことだ。つくり出すって本当にいいことだ。

その間を悠々と歩きながら、鼻唄をうたう将右衛門！

グルリと工場を一巡すると、元の席へ帰って来た。

「広太郎どん」といいながら、例の頑丈な卓を隔て、粗末な腰掛けへ腰かけた。「杉窪の里の銅兵衛どん、あれはこのわしの義兄弟でごわした」

注進来

「銅兵衛どんとは義兄弟でごわした」頭の将右衛門話し出した。「全く立派な人物でな。いわば私の兄貴分で、そうして同じように里の頭で、そうして同じようにあるお方に、おつかえしたことがございましたよ。ええとそうしてそのお方の命で、ある同じ城へこもり、戦をしたこともございましたよ。だがとうとう銅兵衛どんも、非業の最期をとげられましたなあ。全くもって残念でごわす。だが、銅兵衛どんに味方をした、そのあなた様をこのわしが、お助けしたというものは、やっぱり何かの縁でごわしょう。よいことをしましたよお助けしてな」ここでちょっとばかり沈黙した。「ところで」とまたも話し出した。「打ち見たところあなた様は、たいへん立派なお方らしい。が率直に申し上げれば、何かに迷っておられるらしい。といってそれが何であるか、もちろんわしにはわかりませんがな。ええとそうして私としては、おたずねしたいとも思いません。だが、私は申し上げましょう。なんにも迷われる必要はない。ただ機嫌よくお働きなされ！　さようなんか使わずに、身体ばっかりでお働きなされ。それが最上のいきる道でな。……考えるということはよくごわせん。というのはキリがないからで。一つ考えるとまた一つ！　また一つ考えるとまた一つ！　また一つ考えるとまた一つ！　どんどん上って行きますなあ。へいさようで高いところへな。そうしてしまいには落っこちます。一旦落っこちたら起きあがれない。大変気の毒でございますよ。それよりはじめから

低いところにいて、高いところを望まないがよろしい。……それには」というとニコニコした。「いつまでもここにおいでなされ。さようわれわれのこの郷にな。ここほど低いところはない。なにさ位置ではございません。位置からいうと山の上で、随分高うございますがね。私のいうのは身分のことで、木地師と来た日にゃア最下等、これから下へは下りっこはない。だから安心でございますよ。ここでお働きなさいませ。もっとも……」というと胸をそらせた。「立身出世を望まれるなら、浮世へ出なければいけませんなあ」にわかにクックッと笑い出した。「いやその浮世で思い出した。浮世には親切な方々があって、私達を憐れんでくださいますよ。仲間っぱずれは気の毒だ。つきあってやろうぜ！　つき合ってやろうぜ！　というのでございますよ、上がっておいで上がっておいでと！　だが私はいい返しましたよ。皆さんこそこっちへいらっしゃいよ。高いところで一緒になる、こいつア無理でございますよ。低いところで一緒になる、この方が楽じゃアございませんかとね。ところが皆さん来ませんでした。そこで私達も行きませんでした。ナーニあなた行ったところで、本当につき合ってくれるものですか。半分しかつき合っちゃアくれませんよ。それもさ、ホンのお道楽でね」

またもクックッと笑ったが、ヒョイと立ち上がると歌い出した。

〽低いところがようござるウ――

また鼻唄、またブラブラ、将右衛門工場を歩き出した。

卓によったまま広太郎、黙然（もくねん）として考えていた。「杉窪の里の大乱闘、傾城塚の愛欲地獄、そうしてここの木地師たちのくらし！　おれも色々の経験をしたなあ。だがいったいどの経験が、本当の浮世のすがたなんだろう」

〽低いところがようござるウ――

将右衛門の鼻唄が聞こえてくる。

「なにそうばかりもいわれるものか。高いところにだっていいことはあるさ」

その時あわただしく一人の木地師が、戸口から工場へ飛び込んで来た。「お頭、変てこでございますよ！　なみのカワトじゃアありませんよ！」

「何？」と将右衛門突っ立ったが、これから大事件が起こったのである。

不思議なカワト

注進に来たのは佐太郎という木地師で、セカセカとして述べ立てた。

「天幕が変なんでございますよ」グッとつばを呑んだものである。「女子供へ気をつけろ！　お頭のいましめがありましたので、崖の上で見張っておりますとね、すぐ眼の下が湛慶川、その向こう岸にカワトの天幕、点々と張ってあることか、大陣幕が二流れ、取りまわしてあるじゃアございませんか。おかしいなアどうしたんだろう？　もしカワトなら家族別に、小さい天幕を三角形に、いくつか張らなければならない筈だ。で私はこっそりと、崖を下って行ったんで。崖の木蔭に身を隠し、様子をうかがったんでございますね。すると大勢の人間どもが、動き廻っておりますので。なるほどみなりはまさ

しくカワト、きたないぼろは着ていましたが、その動作がまるで違う。すばしっこいんでございますねえ。いよいよおかしいと見ていますと、どんどんどんどん藁づとから、武器を取り出すじゃアございませんか。槍や刀や弓鉄砲！　すっかり面食らってしまいましたよ。そこで気がついてよく見ると、女子供が一人もいない。みんな屈強な若者ばかりで、これなんかも変じゃアありませんか。だってカワトなら家族づれの筈で。女子供から年寄りまで、揃っていなけりゃアならない筈で。いよいよ変だなアと見ていますとね、武器の手入れをやり出したんで。そいつが実に手に入ったものだ。ズンズン弓弦を張って行く、サッサと鉄砲へ火薬をつめる。で、あっしは思ったんで。カワト姿に身をやつして、忍んで来た武士に相違ないとね。するとどうです案の定だ。菊水の定紋の打ってある、一つの陣幕からノッソリと、武士が現われたじゃアございませんか。間が遠いので人相などは、ハッキリ見ることは出来ませんでしたが、頭髪は間違いなく切り下げ髪で、手に鉄扇を持っていました。そうしてはいてるのは野袴で、大将ですね。その武士に、立ち働いていた連中ども、ペコペコお辞儀をするんですもの。と、どうでしょう、もう一つの天幕、そこから爺さんが出て来ました。それもやっぱり間遠なので、ハッキリ見ることは出来ませんでしたが、身長の小さい薄ぎたない、みすぼらしい様子ではありましたが、それでいて品もあれば威もあって、とても小気味が悪いんです。こいつもやっぱり大将とみえ、そこらに働いている連中が、ピョコピョコお辞儀をするんです。ところで二人の大将ですが、肩を並べて歩き廻り、何か熱心に話しあっているんで。そうして時々崖の方へ、指さしをするじゃアありませんか。そのうち川岸へやって来ました。じっと水勢を見ているんで。そうしてやっぱり話し合うんで。お頭！」というと木地師の佐太郎、さも不安そうにいいついだ。「用心しなけりゃアいけません！　どいつか攻めて来たようですよ」

　こいつを聞くと将右衛門、「ううむ」とうなったものである。ややしばらくは物をいわない。ただ眼の前を見詰めている。思案に余った様子である。

「そうか」とややあって声をもらした。「何者かおれには見当がつかないが、充分用意はしよう。オイ佐太郎」といかめしく、「もう一度様子を探って来てくれ。一人ではいけまい、二、三人で行け」

「へい、よろしゅうございます」

　駈け出そうとした時もう一人の木地師、またセカセカと飛び込んで来た。

「お頭、お頭、面会人で」

「誰だ？」と将右衛門神経質にきいた。

「カワトからの使者だということで」

数行の隠語

　カワトの使者となって来たのは、二人の立派な武士であった。母家の客間へ通ったところへ、頭の将右衛門が現われた。

「お尋ねにあずかりました木地師の頭、将右衛門めにございます」

　すると一人の武士がいった。「ええ拙者ことは長崎左源太、

貴殿ご存じの天草時行、その者の使者にございます」
つづいてもう一人の武士がいった。「拙者ことは柴田三郎兵衛、江戸の浪人にございます。なにとぞ自今お心やすく。名前ぐらいご存じかと存ずる、由井正雪と申す仁、その方の使者と致しましてな、まかり越しましてございますよ。閑静なお住居、よろしゅうござるな。全く山中はよいもので」
部屋の中を見廻したものである。
名乗りを聞くと将右衛門の眼、ピカリとばかり一閃したが、さあらぬ体で聞き返した。
「承ればお歴々、木地師風情の拙宅へ、何用あっておいでなされたかな」
「されば」といったのは長崎左源太、一膝ズルよう進み出たが、「万事掛け合いは率直がよろしい。で、率直に申し入れる。二棹の唐櫃頂戴に参った」威嚇するような調子である。「ええと貴殿におかれては島原の乱のそのみぎり、原の城にこもられたと申すこと。しかも落城の前にあたり、巨大な二棹の唐櫃を、こっそり持ち出されたと申すことで。いやいや拙者の意見ではござらぬ、貴殿と同じに原の城にこもった、天草殿の意見でござる。で本日その唐櫃、是非頂戴致したいとな。……ただし」というとまた威嚇的、「ご承知なくば是非に及ばず、剣戟をもってお相手致す。由井先生におかれても、天草殿におかれても、すでに十分の用意をもって、湛慶川の向こう岸まで、実は出張っておられるのでござる」「まあさまあさ長崎氏」こういってとめたのは三郎兵衛。「やぶから棒に性急に、そう高飛車に申すものではない。マアごらんなされ、将右衛門殿がびっくりしておいでなさるではないか。それにさ言葉もちとぞんざい。いけませんな、注意なさるがよろしい。さて……」というと三郎兵衛、その智的な冷静な眼を、真っ直ぐに将右衛門の顔へ注いだ。と、いったいどうしたんだ、にわかに機嫌よく笑ったものである。「アッハハハ将右衛門殿、さぞお驚きでございましょうな。いやこれは誰でも驚く。秘密に秘密にとはかったものが、それこそなんの前触れもなく、突然明るみへ出されたのだからな。拙者にしてからが胆をつぶしましょうよ」それからまたも部屋の中を、のどかな顔をして見廻した。
障子に秋陽がさしている。南向きの障子である。と、一点ポッツリと、黒い影があらわれた。うしろ羽根の長い小鳥である。そのうしろ羽根が動いている。チッ、チッ、チッとなき声がする。とまた一羽やって来たらしい。二羽の小鳥の影がうつった。ふッと二羽が一緒になった。くちばしとくちばしが合わさった。だがすぐパッと消えてしまった。どこかへ飛んで行ったのだろう。かすかにゆれている立ち木の枝、それが障子にうつっている。
「いや、だがしかし浮世には、突発的のものはございませんよ」不意に三郎兵衛がいいだした。
「で、われわれが参りましたのも、突発的ではございません。順々に順を追ったあげく、参るべくして参りましたので。そこでひとつゆっくりと、ご談合することに致しましょう。が、内容は非常に簡単、二本の巻軸！　ただこれだけで」
ジロリと将右衛門を見やったが、薄っ気味の悪い眼つきであった。「将右衛門殿、将右衛門殿。あの二本の巻軸へな、数行の隠語が現われましてござるよ」持っていた扇をサラサラ

とひらくと、パタパタと胸をあおぎ出した。あつくもないのにいや味な事をする。「お話し致そう、それまでの経路を」パチッと今度は扇をとじ、膝の上へ突っ立てた。それから話し出したものである。

空井戸の中？

皮肉をまじえた能弁をもって、柴田三郎兵衛話し出した。「二本の巻軸の何物であるかは、お話しするにも及びますまい。原の城にこもられた貴殿のこと、充分性質はご承知のことと存ずる。が一口に説明すれば、おとぎ話的伝説を持った、宝探しの材料で。……さてその巻軸でござるがな、原の城より江戸へ運ばれてござる。誰がどうして運んだか、まあまあそれもよろしゅうござろう。いずれ誰かが必要があって、持ち出したに相違ござらぬからな。ところで江戸へ運ばれて以来、欲気（よくけ）の多い連中が、遮二（しゃ）無二そいつを奪い合ったのでござる。いやこれとてももっとも。何せ二本を手に入れて、つなぎ合わせた暁には、途方途轍もない財宝のありかが、わかるとあっては奪い合いもしましょう。で、奪い合ったのでございます。そうして最初にウマウマと、手に入れたのが天草殿で、たいへん喜ばれたということでござる。ところが喜びも束の間で、その二本の巻軸もろとも、天草殿をとらまえたのが、由井先生一党で、実は拙者もその一人。さあ占（し）めたというところで、二本の巻軸をつなぎ合わせたところ、これが千代田の絵図面でな。まことに詳細を極めていました。そうして」というと柴田三郎兵衛、ここでまたもや扇をひらき、パタパタと胸をあおいだが、たたむとヒョイとほうり出してしまった。面白くないという態度である。だがまたすぐにいいつづけた。「そうして、さよう、宝のあり場所、見当がついたのでございますよ。というのは二の丸と三の丸、その境い目の濠（ほり）の一所に、変な印がありましたのでな。それは」と空へ手をあげた。

「こういう井げたの印でござる」指で井げたの図を書いた。「つまり空井戸と見なすべきで。あるべからざるそんなところに、空井戸があると仮定すると、宝のあり場所と睨んでも、見当違いとはいわれますまい。で、あり場所はわかったが、そいつをたしかめる手段がない。場所は千代田城、われらは浪人、忍び込むことは出来ませんからなあ。では困ったかと申しますに、それにはそれの手段があり、困らなかったのでございますよ。というのは紀州大納言様の、お手を拝借したのでござる。紀州大納言様すぐ承知！　なぜかというに由井殿とは、懇密の中で兵学の門下！　そこで早速ご登城なされ、濠のあたりを探られたところ、アッハハハ将右衛門殿、空井戸はなかったのでございますよ。自然宝のあり場所もなくなってしまったのでございますよ。すなわち巻軸にまつわっていた、おとぎ話的伝説は、文字通りおとぎ話的伝説となり、ここに一場の夢物語、サラリと幕を閉じにけり。……ということになってしまいましたので。いやもうこれが当然で、こういかなければおもしろくない。……そりゃアそうさ！」と急にゾンザイになった。「日本の国さえ買えようという、そんな素晴らしい財宝が、そんなチョロッカの方法で、ほんとに発見出来ようものなら、財宝の値打ちがさがりますからなあ。

でわれわれ一同の者、かえって気持ちがセイセイし、大きく笑ってあきらめかけた時、とんでもないことが出来してござる。というのはさっきも申しましたとおり、巻軸のおもてへ数行の隠語が、忽然として現われたのでございますよ。そこで再び煩悩が起こり、山川越えて大江戸から、富士見の高原までまかりこし、そうしてこうやってご貴殿と、話をするようになりましてござる」

ヒョイと顔を突き出したが、額ごしに柴田三郎兵衛、将右衛門をギロリと見たものである。

「お話し致そう、その隠語をな！」

「それには及ばぬ！」と富士見の将右衛門、はじめてこの時声を響かせた。「その隠語なら、拙者より申そう！」

明払暁まで

「その隠語なら、拙者より申そう！」こういった富士見の将右衛門の声、りんと響いたものである。

「これは素晴らしい！　申されるか！」こういったのは柴田三郎兵衛。

「これは潔い。さあさあいわれい！」つづいていったのは長崎左源太。

「拙者の書いた隠語でござる！　拙者が明かすに不思議はない！」

「案の定だ、貴殿書いたか！」ここで三郎兵衛ジリリと寄った。

「柴田氏」と冷やかに、将右衛門むしろ笑ったものである。

「が、その前に聞きたい一義、隠語どうして現われましたかな？」

「巻軸二本泉水に捨てた！」

「誰が？」とあごを突き出した。

「紀州大納言頼宣卿！」

「ほほう面白いお殿様で」

「と、巻軸水にぬれ、おのずと解けたそのおもてへ……」

「ワッハハハ白々と、明礬水で書かれた文句、隠語ともいえない平凡な奴が、あらわれましてございますかな」もう一度高く笑ったが、「――二個の唐櫃あずかりたる者、木地師の頭領富士見の将右衛門――さよう、こんなようにな」

「そいつを渡せ！」と今度は左源太。

「なぜな？」と将右衛門、差し出すあご。

そいつがにくいというように、「巨宝一人占め、まかりならぬよ！」これもやっぱり左源太であった。

「なに巨宝？　これはこれは、天眼通とみえまするな」揶揄するように将右衛門、「だがその眼力、狂っていやしょう」

「これさこれさ」と柴田三郎兵衛、あやなすようにいい出した。「角目立ってはよくござらぬ、まずまずお聞き、将右衛門殿。とまれ貴殿におかれては、原の城よりこっそりと、二個の唐櫃取り出したは事実！　そこでわれらの思うには、伝説的の例の巨宝、以前は千代田にあったのを、さあ何者か運び出し、原の城へ入れたを貴殿感づき……な、そこで、取り出したというもの……巨宝でなければなおさらのこと、見せてくだされてもよかりそうなものじゃ。みんなさらって行こうとはいわぬ。……いかがでござるな、折半というやつは？」

「されば さ」といったが将右衛門、首をかしげたものである。
「いやだといったらどうなさる？」
「知れたことよ」と出しゃばる左源太、「矢弾が飛びます！
矢弾が飛びます！」
「こわいの」と将右衛門、すくめた首で、「わしは嫌いだ。人殺しはな」
「わしも嫌いで」と柴田笑う。「手をうちましょうか、見せるという分で！」
「まず待った」と考え込んだ。
シーンと一座静かである。
と将右衛門、うかがうように、
「いかがでござろう、柴田氏。熟慮お許しくださるまいか」
「ならぬ」左源太のしかかるのを、眼で抑えた三郎兵衛、
「時期は？」といって冷静に見た。
「さようでござるな、明払暁……」
「ちと永すぎる」とまたまた左源太。
「いや、よろしい」と三郎兵衛、アッサリ引き受けたものである。
「朝日出ずるを合図としましょう」
「承引の場合は竹ぼらを、拙者吹くことに致しましょう」
「ふん、不承知の場合には？」また左源太め、ひじを張った。
「へいへいなんにも吹きましねえ」
立ち帰る二人を見送りもせず、夜まで考えていた将右衛門。
「いわなけりゃアならねえ、山の小父さんへ」湛慶滝の方へひた走った。

湛慶滝

仏師湛慶この滝に籠り、東寺南大門西方力士を、きざまんと欲して祈願をこむ。龍神感応音をとどむ。――巨大な滝でありながら、少しも水音のしないのは、これがためだといわれている。もちろんいいかげんの伝説ではあろうが、事実、全く不思議なことには、湛慶滝は水音がしない。で、今も滝は落ちているが、数十本の白布でもたぐるように、白々と見えるばかりである。おそい月はまだ出ない。星ばかりが今にもこぼれそうに、空いっぱいにもりあがっている。滝壺のまわりは岩組みである。そこにうごめいている一つの人影、ぼっとあかるい滝の光で、ぼんやり輪郭づけられている。たいへん年取った老人らしい。衣裳を着ているとは思われない。どうやら、すっかり裸体らしい。そうして非常に身長が高い。やせていると見えて木のようである。岩組みの上に腹ばいになり、滝壺の中をのぞいている。独り言をいっているらしい。ひどくなまりのある声である。日本人らしくない声である。訴えているようなところもある。誰か滝壺にでもおるのだろうか？
「あなたがお悪いのではございません。私が悪かったのでございます。いえいえそれよりあのお方がお悪かったのでございます。神の子よ！　神の子よ！　あなたがお悪い！　……ローマで虐殺が行なわれました！　スペインで虐殺が行なわれました！　ありとあらゆる国々において――沙漠においても、森においても、都会においても、田舎においても、限り

知れぬ海上においても、そうして雲迷う曠野においても。神の子よ、あなたの名において、幾十万の生霊が、血みどろになったか知れません！　……ああそうしてこの国のはて、美しい島の天草でも、幾万の人が殺されたでしょう！　女はおおかたはずかしめられました。赤児（あかご）はおおかた煮られました。……噴火口よ、幾千人を呑んだ！　十字の柱よ、幾千人を殺した！　猛火の舌よ、幾千人をなめた！　……それでもよいのでございましょうか？　そんな権利がありましょうか？　神の子よ、神の子よ、そんな権利が？　空の雲の中に現われようと、それがどうしたのでございます？　愛という無気力な名によって、なんとなまなましい憎しみを、この世へ植えつけたことでしょう！　神の子よ、神の子よ、あなたの手が！　……まさしく私は裏切りました。まさしく私はそむきました。しかし私は決して決して、イスカリオテのユダではございません！　それ以上の者でございます！　ユダはあなたを疑いました。私はあなたを無視しました。ユダはあなたを憎みました。私はあなたをセセラ笑いました。ユダは後悔して死にました。私は今も生きております。ユダはあなたの足もとへ、結局ひざまずいてしまいました。しかし私はあなたを踏んで、頭の上に立っています！　……だがそれがなんになる！」

最後の言葉の悲しそうなことは！

と、白い滝を背景に、ユラユラと立ちあがる姿が見えた。腹ばっていた老人である。と、左右に枝が張った。老人が両手をひろげたのである。さながら十字架の陰影（シルエット）！　しかしその次の瞬間には、宙に黒々とモンドリを打った。つづいて烈（はげ）しい水音がした。滝壺の中へ飛び込んだらしい。しばらくはなんの物音もしない。滝をだいている絶壁が、ブルブルブルふるえ出した。そこに群れ葉があるのだろう。そいつを風が渡るのだろう。と、忽然滝壺の中へ、群像が現われた。滝の白さを黒く染め、だんだん背高くぬきん出て来た。水にぬれた一人の少年を、さっきの老人が胸へかかえ、岩組みをよじのぼって来るのである。

ざんげ

水にぬれた少年をだきかかえ、滝壺から現われた裸形の老人、岩組みへのぼるとジッとなった。少年の顔をノシかかるように上から見おろしているのである。

「可哀そうな子供よ！　お気の毒なお方！」むせぶがような老人の声。「天童にまで祭りあげられ、殺人鬼にまでコキおろされたお方よ！　あなたに罪はございません。むしろ私にございます。ああ直接の罪といえば！　……なんと美しく、なんと清らかく、なんとおろかで、なんと無邪気で、あなたはあったことでしょう！　事なく成長なされたなら、善良な一人の人間として、世をすごされたでございましょう。……私がそれを誤りました。私があなたをまどわしました。私があなたに法外もない、天国の夢をお見せしました。そうして私はいいました。『天国を地上へお建てなさりませ。あああなたこそは選ばれたお方！　ああ、あなたこそは救世主！』と。そのためあなたは一朝にして、狂信者におなりなさいました。『天童！』とあなたはご自分で、自分のことをおっしゃいま

した。そう信じたからでございましょう。『建てる！』とあなたはおっしゃいました。『おれは建てる神の国を！』――建てられるものとあなた自身、お考えになったからでございましょう。だがいつもあなたのうしろには、私がいた筈でございます。人形使いのこの私が！　しかしそういう私のうしろにも、人形使いがおりました。神の子と称する人形使いが！……あなたを慕って幾万の人が、集まって来たことでございましょう！　その結果なにが起こったでしょう？　地上へ天国が建つかわりに、戦いが起こったのでございます！　……人殺しが行なわれたのでございます！　……あなたから私、私から神の子、連絡をなし、組織を立て、人を殺したのでございます！　……しかも私は神の子のために、肉親をさえ犠牲にしました！　私の娘よ！　イサベラよ！　にくんでおくれ、この私を！　お前を貴人のにえにしたのは、まぎれもないこの私だ！　そのためお前は悶死した！　孫娘よ、孫娘よ、どこにいる？　……ああ行方さえわからない」

ユラユラと群像が動き出した。少年をかかえた老人が、岩組みの上を歩き出したのである。滝の白さと、星のあおさ、それに朦朧と輪郭づけられ、夜のやみから抜けて見える。と群像がちぢまった。とまたすぐにノビノビとなった。老人一人が立っている。少年は岩によりかかっている。突然老人はころがった。岩組みに打ちつける肉体のおと！　つづいてうめく声がした。「死んだ沢山の人々のために！」

ゴロゴロと岩からころがり落ちた。「天童よ天童よあなた様のおために！」

ヌッと老人が立ちあがった。とクルクルと廻り出した。巨大な立ち木が立っている。烈しくぶつかる音がした。老人が身体をぶつけたのである。「にえになった娘、イサベラのために！」

立ち上がった老人の姿が見えた。

と、一つの星が流れた。その光が老人の姿を射た。胸の一所が一瞬間光った。何かヌラヌラ流れていた。血が流れているのだろう。

岩によりかかった少年の姿、端然として動かない。だが見詰めてはいるのだろう。うしろの岩に蔽われて、ほとんど輪郭がわからない。横半面と左の肩ばかりが、滝の微光に色づけられ、浮き出しているばかりである。

嗚咽する声が聞こえてきた。地上にうずくまった老人が、膝頭へ額をあてている。枯れ木がたばねて捨ててあるようだ。

その時走って来る足音がした。と、やみから声がかかった。

「将右衛門めにございます」

流浪の旅へ

「将右衛門めにございます」やみの中から声がした。富士見の将右衛門が来たのである。滝の微光に半身をぼかし、ひざまずいている人影がある。それが富士見の将右衛門であった。

うずくまっていた老人が、物憂そうに顔をあげた。

「ああ将右衛門か、何しに来たな？」

「いやなことが起こりましてございます」

「そうか」といったまま老人は、依然地上にうずくまっていた。「人の世のことはみんないやだ」

「あなた様にもご存じの、天草時行が参りました」
「ああ天草がな？　裏切り者がな。……わしとはちがった意味の裏切り者」
「江戸の浪人、由井の正雪、一味の者が参りました」
「ああそうか、なんのために？」
「唐櫃を渡せと申します」
「ああそうか、唐櫃をな？　なんの必要があるのだろう？」
「宝がほしいそうでございます」
「宝？　なるほど、宝をな。……そうだ宝には相違ない。……なぜあんな宝がほしいのだろう？」
「誤解しているようでございます」
「中身をなんだと思っているのだろう？」
「金銀珠玉、異国の珍器」
「唐櫃はどうも渡せないよ」
「はい、渡すことはできません」
「そういうがいい、渡せないとな」
「とても承知は致しますまい」
「無理に取ろうとしているのか？」
「兵をひきいて参りました」
「兵を？」とはじめて老人の声が、すさまじい感情を現わした。
「戦いか！　恐ろしい！　流血か！　おそろしい！　おれはいやだ！　おれはいやだ！」
「私もいやでございます」
「それはどうしてもやめなければならない！」
「いかがでございましょう。時行、正雪に、中身をあからさまに見せましたら？」
「ならぬ！」と威厳のある老人の声！　「わしはいいのだ、わしなどはな！　だがあの方を辱めてはならぬ」
　そこで将右衛門はだまってしまった。ひざまずいたままで動かない。うなだれて考えている。うずくまったままの老人の姿、やはりじっと動かない。
　と、将右衛門やがていった。「どうぞご用意あそばしませ」
「用意？」と老人は聞き返した。
「なんの用意だ、将右衛門？」
「流浪いたさねばなりますまい」
「引き払うのか、富士見の郷を？」
「ほかに手段はございません」将右衛門の声は沈痛であった。
「ああ流浪か、それもいいなあ。そうだ、戦をするよりもな。……人は誰もかも流浪しているよ。おちつけるような世界はない。……おいでおいで、どこでもおいで！」
「どうぞご用意あそばしませ」
「わしはいかないよ」と老人はいった。「ここにいるのだ、ああここにな！　あそこへ籠って、あそこへな。……」滝の方を指さした。「わしの命も永くはあるまい。……おこもりをして死ぬつもりだよ」岩組みの方へ歩いてゆく。と、将右衛門を振り返った。「お別れをお告げ！　このお方へ！」
「天童よ！」と将右衛門、かたく合掌をしたものである。
　しだいに暁に近づいてゆく。片われ月が空へかかった。ちょうどこの頃の事である。富士見高原のふもとにあたって、一点たいまつの火が見えた。のぼって来る二個の人影がある。
「もうすぐですぜ、ねえあねご」

「やっとそれでも行きついたかねえ」
木地師の郷の方角へ、話しながら歩いて行く。

恋人を追って

かなり燃え尽きた松明(たいまつ)をかかげ、歩いて行くのは早引(はやびき)の忠三、道中師風の姿である。それと並んで歩いて行くのは、虚無僧(こむそう)姿のイスラエルのお町、明けに近い富士見の高原に、二人の足音がシトシトと響く。
「狂わなかったというものさ、けっく妾(わたし)の眼力(がんりき)はね」こういったのはイスラエルのお町。
「なんでござんす、眼力とは?」聞き返したのは早引の忠三。
「木地師の連中袴様を、引っさらったという眼力さ」
「あッはん、なるほど、そのことで」
「だってお前さんじゃアないか、渋沢の藪地(やぶち)でバッタリと、袴様にあったと思ったら、あの騒動で見失ってしまい、仰天して後を追っかけると、藪を出たところに無数の足跡、爪先ばかりで歩いているので、木地師に相違ないと眼星をつけたのは。ならまんざら馬鹿じゃアないじゃアないか」
「ナーニそれとて原の城に、あっし達と一緒に木地師の大将、富士見の将右衛門がこもっていて、そいつの部下の木地師どもの、歩き方をあねごが知っていたからさ」
「だがそれだけじゃア袴様を、さらったという証拠にはならないよ」
「へい、マアそりゃアそうですねえ」
「最初に妾は思ったのさ。袴様は手傷を負っている。だから遠くへは逃げられまいとね」
「でもあの時あっしをかり立て、あたりを探させたじゃアありませんか」
「ところがどこにもおられなかった」
「無駄骨折ったというもので」
「そこで妾はきめちゃったのさ、木地師が袴様をさらったとね」
「恋の眼力というやつでね」
「ああさ恋の直感でね」
「それからのあっしと来た日には、ミジメ至極でございましたよ。……さあさあ忠三江戸中を、こまのようにブンブン廻っておいで! 探しておいでよ、木地師の行方を! ……仕方がないのでヘイコラサ、あてなしに飛び出して聞き廻ると、よくしたもので、知れましたねえ」
「一挺の駕籠を引っ包み、小梅を通って江戸へはいり、ところもあろうにお父様のやかたへ……」
「へい、紀州様のお屋敷へ、スーッとはいっていったそうで」
「そこで妾はその木地師を、富士見の将右衛門と睨んだのさ。だって将右衛門はお父様の家来、原の城へこもったのもそのためだからねえ」
「だが間もなく女駕籠が、一挺お館(やかた)から舁(かつ)ぎ出され、そいつを守って木地師の面々、甲州街道へ出たというのが、あっしの探索した結果ですが、この女駕籠気になりますねえ」
「ナーニ妾ア問題にしないよ。それよりもう一つの駕籠の方が、妾にとっちゃア問題さ」
「つまりそいつに袴様が、乗っていらっしゃるとこういうの

で」
「そうとしか取りようがないじゃアないか」
「でもどうして木地師の連中、袴様をさらって行ったんでしょうね？」こいつが忠三にはわからないらしい。
「妾にもそいつはわからないがね、よい意味にとればこうなるのさ。傷を負って袴様が倒れていたので、捨てても置かれず助けたんだとね」
「なるほど、ところで、悪い意味にとれば？」
「悪い意味になんかとらないよ」
「大変結構でございます。大変楽天家でございます」
二人はズンズンのぼって行く。
「だがねえ忠さん」とイスラエルのお町、にわかに感傷的に呼びかけた。

逢えぬ予感

感傷的に呼びかけたが、どうしたものかイスラエルのお町、そのままフッとだまってしまった。別に忠三も聞き返さない。二人ズンズン歩いて行く。松明（たいまつ）の光の届く中で、草の露がチラチラ反射する。
「だがねえ忠さん」イスラエルのお町、もう一度感傷的に呼びかけた。「ほんとうのところを白状すれば、妾アだんだん心配になってきたよ」
「へえさようで、変てこですな。……何がいったい心配なんで？」忠三今度は聞き返した。
「……逢おうとしても逢われない、……あの時聞いた南蛮屋での歌、あいつが本当になりそうな気がして。……」
「ははあなるほど、予感というやつだな。ナーニ大丈夫でございますよ。すべて目的の一歩手前、そこまでこぎつけると大概の者は、かえって否定的になりたがるもので。それもさ、目的が大きければ、大きいほどそんなように考えるもので」忠三ひとかど考え深そうに、「だがあの時っていつのことで？」
「君尾という娘のいどころを、お前さんにはじめて明かされた時さ」
「いったいどいつがうたったんで？」
「店の酔っ払いの客だろうさ」
「風流の歌をうたやアがった」
「何をいうんだい。縁起でもない歌さ」
「さようさ、あねごにとってはね。……だが、あっしの身にとっては……」
「ふん」とお町突っぱねた。「また出したねえ、粂仙（くめせん）を」
「執念深うございます」
「妾もそうさ、袴さんにはね」
「面白くないというところで、打ち切りやしょうや、この話はね、ほんとにあっしは袴様では痩せるほどあねごにコキ使われていまさあ」どうやら忠三不平らしい。
「妾にゃアそうとは見えないがねえ。お前なんだかうれしそうに、妾に使われているじゃアないか」
「なるほどそうとでも思わなければ、こうまでコキ使やアしますまい」
いよいよ忠三不平らしい。
二人ズンズン歩いて行く。松明の光のとどく中で、灌木の

葉が翻(ひるがえ)っている。夜が明けたと思ったのかも知れない。一つの灌木の根もとから、うずらが一羽飛び出して来た。とニョッキリ一本の、あらわな白骨が立っていた。たけの高い白樺である。
「だがね、あねご」と早引の忠三、意味ありそうな薄笑いをし、盗むようにイスラエルのお町を見た。
「予感があたったらどうなさいます？」
「さあ妾どうしよう」
「逢えなかったらどうなさいます？」
「ああ妾逢えなかったら」
「日本国中さがしますかね。このあっしを供に連れて？」
お町今度は返辞をしない。じっとうなだれて歩いて行く。
「そうなったら妾ヒョッとすると……」
「縄で……首を……おつりなさいますか」
「あきらめてしまうかも知れないよ」あざ笑うような声である。「どうしても縁がないものとね」
「えらい！」と忠三飛びあがった。
「あねご、それでこそ悪党だ！」
「そうかねえ。悪党かねえ」
「いよいよそうなるとこの忠三……」
「役付くとでも思うのかい？」
「え？」
「駄目だよ！」
「なぜ？」
「なぜでも！」
「だって理由は？　……」
「すかないからさ！」
「ひでえや、ひでえや。ハッキリし過ぎていらあ」げんなりとして笑ったが、ヒョイとお町の胸を見た。

母の形見

お町の胸を見た早引の忠三、ポイと話を横へそらせた。「江戸を出た時からあっしには、ひどく気にかかっていたんですがね。胸に垂らしているそのまるい物、いったい何でございますね？」
松明を差しつけたものである。
「これかえ？」というとイスラエルのお町、首へかけた銀鎖、その先に着いている黄金のメダルを、大事そうに掌(てのひら)で支えたが、「形見のメダルさ、お母様のね」そういった声にはなつかしさと、悲しさがいっぱいにこもっていた。「打ち出してあるのさ、お母様の像がね。……可哀そうな可哀そうなお母様！
お美しかったお母様！　……なくなられる前にお手ずから、妾の首へかけられたのよ」
「ナール」といったが早引の忠三、全くめずらしくしんみりとなった。「だがねえあねご、何と思って、そんな物をかけていらしったので？」
「なんでもないさ。お守りにだよ」
「ナール」ともう一度早引の忠三。「こいつはお守りになりましょうよ。雲の上からお母様、じっと見おろしておりましょうよ。殉教者ののぼる天国のね」
「いいえ妾の胸の上から」掌を捧げるとイスラエルのお町、

眼の前へメダルを持って来た。松明の光にぼんやりと、打ち出された肖像が浮き出して見える。まぎれもないスペイン型、臈たけた若い美人である。と、お町うつむいた。メダルへくちびるを触れたのである。いつか歩みもとまっている。「おいらメダルになりたいなア」忠三こんなことは思わなかった。むしろひとみをそれさせたのである。

「さあさあねご、参りやしょう」しめった心を引っ立てるように、ガサツな調子でしゃべり出した。「ね、あっしからいわせると、そういう光景は気に入らないんで。ちょっともあねごに似合いませんなあ。やっぱりなんだ。あねごとしては、オイ忠々、オイ忠的などとあっしに毒づきながら、外輪に元気よく歩いた方が、どんなに似合うか知れやしねえ。……いけませんね、お守りなんか。いけませんね、予感なんか！いっさい弱気の所業でさあ。ナーニ袴様に逢えなかったら、生涯二人で探しやしょう。いつもあっしは根つけ役だ！　かまいませんよ。我慢しまさあ。そういう役だって必要でさあ。そういう役にだって楽しみはある。シテばっかりを狙っていると、いつも浮世は息苦しい。ワキ役にだっていいところはある。安住の境地っていうやつがね。……それにさ、なんだ、ばかばかしいや。いわばあねごは燃え残りだからね。袴様に燃えた燃え残りだあね。いりませんねえ、燃え残りなんか！

もっともくださるとおっしゃるなら、そりゃアあっしだって二ツ返事で！　……うんにゃ、あっしはもらいませんね。いやなことだ、燃え残りなんか！　だが無理にもくださるというなら、フッフッフッフッ、もらいますねえ。燃え残りの炭ッていうやつは、案外ポカポカ暖かいもので。そうしてなんだ、あつかいようによっちゃア、もう一度真っ赤に燃えますからねえ。ホイ、ホイ、ホイ、何をいうんだ！　あねごがくれるともいわないのに！」

駄弁を弄しながら歩いて行く。と、三本のわかれ道へ来た。

「さてどっちへ行ったもんだろう？」

たたずんだおりから、うしろにあたり、かすかではあるが聞き覚えのある、鉄杖の音がジャラーンとした。

「あねご！」「忠さん！」「島原の野郎！」「つけて来たねえ！」

「幽霊のように！」

またもジャラーンと鉄杖の音！

変わった城之介

城之介の鳴らす鉄杖の音、次第次第に近寄ってくる。別れ道に立ったお町と忠三、顔を見合わざるを得なかった。

「あねご、どうしやしょう。逃げましょうか？」

「ナーニ」というとイスラエルのお町、一方の肩をそびやかした。「こわかアないよ。逢ってやろう。グッと妾が一睨みすると、手も足も出ないあいつじゃアないか」

「そりゃあマアそれに違いありませんがね。だが、うるさいじゃアありませんか。それに恐らく邪魔をしましょう、ソレ袴様と逢うやつをね」

「ああなるほど、そりゃアそうだ。困ったねえ、こいつだけは」

「ね、あねご、こうしましょう。とにかくわきに隠れていて、様子を見ようじゃアございませんか」

「ああそれがいい。それがいい」
「そこで邪魔なは松明だ。がまさか火を持って隠れも出来ない」
忠三ポンと松明を、道の一方へふり投げた。「あねごこっちへ。隠れ場所！」
丘ぐらいはある灌木の叢、その陰へ隠れたものである。またも鉄杖の音がして、ユラユラと現われた白い物、行衣姿の島原城之介、捨てられた松明のそばまで来ると、ジャラーンと鉄杖を地面へ突き例によってそれへよっかかったが、ああなんと城之介変ったんだろう！　まるで昔のおもかげはない。伸びていた腰が曲がっている。太っていた肉体が痩せこけている。顔には一段としわがふえ、そびえていた肩が落ちている。あの鋭かった眼光さえ、腐った水のようにドンヨリとしている。――一時に年が二十も増し、まるでヨボヨボ爺イさんではないか！　地上に捨てられた松明に照らされ、裾が明るく次第にぼけ、胸のあたりが朦朧と煙り、うつむいている顔ばかりが、病的にはなやかに輝いている。そうして頭上遙かの空から、ほのかにさして来る星の光、それが後脳を輪取っている。「すてられた松明！」とつぶやいた。「誰がいったい捨てたんだろう？　……誰か捨てたに相違ない。……淋しい火だなあ、陰気な火だ。……高原の中にポッツリと、ぬしもなくひとりで燃えている。……今に自然と消えてしまうであろう。……自滅！　自滅！　自滅！　自滅！　……」衰え果てた声である。むせんでいるような声である。「おれだってすぐにも自滅しよう。……もう一突き、もう一突き、誰かうしろから突いてくれたら！　……道場はこわされ、財宝は奪われ、おれは自信を失ってしまった。それに」とつぶやくと眼を据えた。「お町を手に入れる力さえない」くちびるがブルブルふるえ出した。手もふるえているのだろう、カラカラカラと音がする。鉄杖についている環である。「お町、お町、あのお町さえ、手に入れることが出来たなら、自信を取り返すことが出来るんだが。……そうだ必死に愛している、その一物さえ手に入れられたらなあ。……だがなんとおれはお町のために、後手ばかり食わされているのだろう。いつもいつも追っかけてばかりいる。……たしかこっちへ来た筈だが、どっちの方へ行ったかしら？　……うむそうだ、この松明、きゃつらが持っていたのだろう。……では松明の捨ててある方へ、歩いて行ったに相違ない。……逢いたいものだ、捉えたいものだ」
ユラユラと城之介歩き出した。草が分けられてサラサラと鳴る。間もなく姿が見えなくなった。だがその音さえ元気なく、ジャラーンと鉄杖の音がした。
イスラエルのお町と早引の忠三、灌木の陰から現われたが、顔を見合わせたものである。
「プッ」と噴き出したのは早引の忠三。

後を追う

「プッ」と吹き出した早引の忠三、城之介の行った方へ眼をやったが、「ありゃア城之介じゃアありませんね。城之介の魂のぬけがらで」例によって毒舌を振るい出した。「きゃつの魂ときた日には、人一倍太うございましたねえ。そいつが綺麗

にぬけたんで、あんなに痩せたんでございますよ。こうなると魂の太いのも、考えものでございますねえ。みっともないざまったらありゃアしない」
「ほんとにねえ」とイスラエルのお町、これはどうやら同情したらしい。「あんなにもやつれてしまっては、憎むにも嫌うにも不足だねえ。なんだかイッソ憐れっぽくなったよ」
「憎まれる方がまだいいや。ほれている女に憐れまれた日にゃ、野郎たるもの浮かばれませんねえ。それはそうとネエあねご、どっちの方角へ行きやしょう」
「そうさねえ」と考えたが、「なんだか前途を見届けたくなったよ」
「え、前途？　なんの前途で？」
「魂のぬけがらの前途だよ」
「ふふん、こいつアよっぽど変だ」ひどく忠三いやな顔をしたが、「憐れが凝って同情となり、同情があつまって恋となる。……というようなことだって、時タマ浮世にはあるものだ。……いけませんな、え、あねご。第一袴様にすみますめえ。忠三にだってすまねえや」
「何をいうんだい、ばか忠々」お町吹き出したものである。「魂があってさえいやだったのに、魂のなくなった爺(じじ)い玉なんかに、何がいったいどうしたってんだヨーッ」
「いいなあそいつだ。その『ヨーッ』だ！　そうならなけりゃア面白くない。感傷的だったり、予感的だったり、さっきのようじゃア困りますからねえ。旅が旅らしくなくなってしまう。が待ってくれ。その旅も、もうすぐおえるんでございますねえ。袴様とあねごとがヒョイと逢う。うれしいヨーというところで――もっともどうもこのヨーは、あっしにとっちゃア苦痛だが、とにかくヨーというところで、手を取り合った暁に邪魔になるのはこの忠的！　そこで邪慳(じゃけん)におっしゃいましょうねえ。失(う)しゃアがれ、消えてなくなれと！　そこであっしがショボショボと、山をくだるの一段となる。どう考えたって下(げ)の役だ！」ここで忠三手をうった。「あねご、行きやしょう。城之介を追って！」
「どうしたんだい、性急に？」
「フッ、フッ、フッ、まずこうだ。あの魂のぬけがらを、追っかけているその間は、袴様とは逢われねえ。と少なくともそのうちじゅうは、あねごと一緒にいられるってものだ。へいさようで、二人きりでね。いいなあいいなあ、行きやしょう」
「忠さん」とお町、気の毒そうに、「そんなに妾といたいのかい？」
「あねご！」とあぶなくシンミリとしたが、すぐにまぜっ返したものである。「なんのアタボウ、背負っちゃアいけません。恋の燃えがら、もえ残り。いらねえいらねえ、いりませんねえ。だが」というと横目で見た。「くださるものならもらいますぜ。もっともさっきも二、三度いった」
　忠三スタスタ歩き出した。それにつづいてお町が行く。あとに残ったは捨てられた松明、ボッと焔が立っている。暁近い高原の夜を、くさび形に割って燃えている。と一匹明かりを慕い、こおろぎがポンと飛んで来たが、すぐに羽根を焼かれ、まるくかたまって死んでしまった。
　ジャラーンとその時鉄杖の音、かすかに上の方から聞こえ

て来た。「ああ不吉な音色だわい」こうつぶやいた者がある。明の遺臣朱舜水、三筋に別れている峠道の、その一つをばたどっていた。

華やかな笑い声

富士見高原の峠道、喬木がすくすくと左右に生え、その葉が高く頭上を蔽い、穹窿型をなしている。トンネルが通っているようだ。木の葉にさえぎられて空が見えぬ。数本の松明に照らされて、その木の葉がチラチラする。左右に並んでいる喬木の幹、これも松明に輝いて、爬虫類のようにテラテラする。

先頭に一群の人数が行く。君尾を真ん中に引っ包んだ、数人の若い武士が、はしゃぎながら歩いて行くのである。君尾は若く美しい。その上陽気で大胆で、自由でおしゃべりで物にかかわらない。こういう娘の話し相手となって、夜道を行くということは、若い元気のいい武士にとっては、楽しいことに相違ない。あけっ放しの笑い声、高調子の話し声、それが絶えずそこから起こり、静寂な高原へひろがってゆく。その一群れと数間を隔てて、朱舜水の一行が歩いて行く。真ん中にいるのが朱舜水。その朱舜水と肩を並べ、左手にいるのが水戸光圀、右手にいるのが光圀の寵臣、朝日奈小弥太という若い武士。ほかに二人が前駆けの体で、松明を捧げて歩いて行く。

「鉄杖の音でございますな。何か不吉の前兆でも、先生にはお感じなさいましたので？」こうきいたのは光圀である。

「さよう」というと朱舜水、雪白のあごひげをしごいたが、「不快な音色でございましたよ。爪拗音というやつでな、不安と焦燥とがこもっております。鉄杖の持ち主何者か、すぐにも不幸の結果を見ましょう。……器は持つ人の精神によって、いろいろの音色を発しますもので。清浄の山伏が貝を吹けば、霧さえ左右へ開くほどで」

「これはごもっともに存じます」

一行悠々と歩いて行く。先を歩いている君尾の一群れ、そこから笑い声が聞こえてきた。君尾の笑い声が一番高い。そうして一番愉快そうである。ふと朱舜水は微笑した。

「君尾殿には元気のよいことで」

「七、八歳の娘のようで」光圀も微笑したものである。「朝日奈、朝日奈」と呼びかけた。

「は？」というと朝日奈小弥太、愛嬌のあるまる顔を、光圀の方へ振り向けた。

「そちが探った君尾殿の素姓、だいたい間違いはあるまいな？」

「はい、間違いはございません」

「銅兵衛という杉窪の長、それの養女だとかいうのだな」

「はい、さようにございます」

「そうして銅兵衛は紀州殿の、旧家臣だとこういうのだな」

「はい、さようにございます」

「で、君尾殿がかどわかされた晩――杉窪の里の亡びた晩、たしかに紀州の伯父上が、由井正雪一党を率い、異風天狗に身をやつし、杉窪へ行ったというのだな？」

「私、殿の内命を受け、杉窪の里へまかりこし、二代目の長

楠右衛門について、取り調べましたところでは、それに相違ございません」
「だがそれにしても紀州の伯父上、何ゆえ天狗などに身をやつされ、杉窪などへ行ったのであろう？　……そんな異風の天狗などに……」
「恐らくそれはこうでござろう」口を出したのは朱舜水、「天狗は我慢の象徴でござる。豪放濶達の紀州殿のこと。我慢の天狗に身をやつされ、幕府の権勢をセセラ笑い、天狗舞いをしたのでございましょうよ」
「しかし正雪一党などを」
「さよう。こいつは問題でござるな」ここで朱舜水思案した。
　またはなやかな笑い声が、君尾の群れからわき起こった。

君尾をカセに

　また聞こえてくる君尾の笑い声、はなやかで明るくてサッパリしている。そこで朱舜水いったものである。
「準頭声といいましたな。あの笑い声は非常によろしい。下賤廃残の人間には、まねをしようとて出来ません。高貴のうまれの証拠でござる。それに」というと光圀を見た。「そのおもざしがどことなく、光殿に似ているではござらぬかな。つまり従兄弟似というくらいに」
　すると光圀うなずいたが、「それに私にはあの娘が、紀州の伯父上のおもざしに、似ているように思われます」
「さようさようその通りで」そこで朱舜水暗示的にいった。「杉窪の銅兵衛は紀州殿の家臣、君尾殿は銅兵衛の養女。そうして君尾殿のおもざしが、紀州殿に似ておられる。その紀州殿が杉窪の里へ、助太刀をしにおいでなされた。ということであってみれば、紀州殿と銅兵衛殿と、その間に、連絡がなければなりませんなあ」
「私にもそんなように思われます。……ひょっとすると、伯父上の、落胤などではあるまいかと」
「もしそうなら好都合で」
「は、好都合とおっしゃいますと」
「これは以前にも申しましたが、どうやら紀州殿のやり口は、平地に波瀾を起こされるようで。どうでもとめなければなりません。光殿からご忠告なさるがよろしい。ところが以前にも仰せられたが、光殿にはずっとご若年で、そのためご忠告しにくかろう。そこで君尾殿をカセにして、ご忠告なされるがよろしゅうござる。もし真実君尾殿が、紀州殿のご落胤であられたら、それを助けられた光殿は、とりも直さず紀州殿には恩人、喜んで紀州殿におかれては、光殿のご忠告を聞かれましょうよ。……がしかしこれとても、機会を待たなければなりませんなあ。……それはそれとして湛慶滝へは、まだ道のりがありましょうかな？」
　すると案内の山賤が、つつましくうしろから声をかけた。
「いえもう間近でございます。この道を真っ直ぐに参りますと、湛慶川の川岸で。それを上流へさかのぼりますと、湛慶滝でございます」
　そこでズンズン進んで行く。
　ややあって光圀が笑いながらいった。「先生、はたして湛慶滝に、南朝の遺跡がございましょうか？」

「さあそいつはわかりませんなあ」一向こだわらずに朱舜水がいう。「とまれ村人やきこりたちや、そういう人達の噂によると、湛慶滝には色々の、伝説があるようでございますな。古いところでは仏師湛慶。新しいところでは紅毛人。そうして綺麗なおちごさんの噂。そこで私は思いましたので。すべてそういう伝説的の土地には、何かしら遺跡や旧跡が、必ず残っておりますとな。それが南朝の遺跡なら、この上もなく好都合であり、そうでなくとも結構でござる。とにかく一応伝説的の土地は、調べる必要がございますよ」

一行スタスタと歩いて行く。

この時君尾の一群れでは、面白い話がはじまっていた。

「妾(わたし)、見ましたのよ、美しい夢を。ええ昨夜ね。韮崎(にらざき)の宿で」

こういったのは君尾である。

「君尾様の美しい夢物語、これは聞きずてになりませんなあ。お聞かせくだされお聞かせくだされ」こういったのは新十郎といって、ずっと前から君尾の機嫌を、取り結んでいる若武士(わかざむらい)である。

「あるお方の夢なのでございますの。妾の大好きなあるお方のね」

「あッはん、さようで」といったものの、新十郎という武士興ざめたらしい。

「それはこうなのでございますの」

美しい夢

「それはこうなのでございますの」昨夜見たという夢物語、それを君尾話し出した。「妾の大好きなお方がね、行ってしまったのでございますの。高い高いお山へね。でもやっぱり下にいますのよ。ええ、にぎやかな町の中にね。お花畑が咲いていました。熊谷草(くまがやそう)、敦盛草(あつもりそう)、弁慶草(べんけいそう)や雪の下がねえ、虹のように咲いていましたの。鳥が飛んでいるじゃありませんか。小さい沢山の高原雀がね。そうして熊の児が遊んでいました。そうして雷鳥が遊んでいました。広い雪渓がありましたっけ。氷河の跡もありましたっけ。ふと見るとずっと下の方に、大鹿が長い列をつくり、トットと走っていましたっけ……。そこにおられるじゃアありませんか、その綺麗なお花畑の中に、妾の大好きなお方がね！　……でもどうでしょう、そのお花畑がやっぱり町なのでございますの。そうして咲いている綺麗な花が、みんな人間なのでございますの。……そこで妾はそのお方の、お名を呼んだのでございますの。そうしておそばへ行こうとしました。でも駄目だったのでございます。ちゃんと一人の娘さんが、そのお方のそばにいたんですもの。まあいったいどうしたんでしょう。それが妾じゃアありませんか！　でもつくづく眺めますとね、少し妾とちがっておりますの。でも本当にそっくりでした。『あれは妾の分身かもしれない！』こう思ったのでございます。で嫉妬(しっと)なんか起こりませんでした。かえって心持ちがサッパリして、いい気持ちになったのでございますの。で妾は遠くから、好きなお方へ呼びかけました。『ここはどこなのでございます？』ってね。するとそのお方がおっしゃいました。『人間から離れた高いところだ』ってね。そこでもう一度きいてみました。『町のように思われますが』って。するとそのお方がおっしゃいました。

『高いところに住めば住むほど、心は低くなるものです』って。するとその時娘さんが、妾へいったじゃアありませんか。『お姉様、ご機嫌よろしゅう』って、するとどうでしょう妾の口から、『妹よご機嫌よろしゅう』って、こんな言葉が出ましたのよ。『妾の坐り場所はないのだよ。でも、ちっとも悲しくはない。あのお方と妹とが幸福なら！』こんなような気が致しました。そこで妾はいいましたの。『妾は帰ります。さようなら！』って。するとお二人がおっしゃいました。『どうぞ、私達を忘れないように！　さようなら、さようなら、さようなら！』って。……帰りしなにうしろを振り返ってみて、妾びっくりしてしまいました。大勢の人達が走り廻って、何か大きな建物を建てているじゃアありませんか。つちの音や、かんなの音や、釘を打つ音や、木を削る音や、石をころばす音などが、聞こえてくるじゃアありませんか。……と、建物が立ちました。工場のような建物がね。調べ革の音が聞こえてきました。仲よく歌っている歌声もね。……これでおしまいよ、妾の夢は」

ホッ、ホッ、ホッと明るく笑った。邪心のない晴れやかな笑いである。

「風変わりの夢でございますな」こういったのは新十郎。「ええとそこで君尾様には、その大好きなお方のことを、フッツリ断念なさいましたので？」

「そうよ、夢が本当ならね。……あら！」というと足を止めた。「あんなところに篝火（かがりび）が！」

いかさま遙かの行く手にあたり、大篝火が燃えている。それに照らされて桃色の、二張（ふたはり）の陣幕が見えている。その方角から川音がする。そいつをぬってカチカチと、武器や物の具の音がする。それを越して絶壁がある。その絶壁につきあたり、はね返ってくる人声がする。

正雪と時行の陣営が、そこに張られてあったのである。

無礼講

ここは正雪の陣営である。

陣幕の中は陽気である。今にもいくさが始まるかもしれない……といったような気配さえない。いわゆる無礼講の酒もりが、さッきから始まっているのである。四隅で篝火が燃えている。火気に煽（あお）られて陣幕の裾が、ハタハタハタハタと鳴っている。染め出してある菊水の定紋、そのつどユラユラと波を立てる。立てかけてある槍や弓、火光にチラチラ光っている。時々火の先が千切れて飛ぶ。とそいつがヒラヒラと、空にむかって飛んで行く。空にはいっぱい星がある。星が酒もりの場を見おろしている。

「槍には三位の位（くらい）がある。いわば武器の王様だ。どいつだ、王様を馬鹿にするのは！」わめいているのは丸橋忠弥、朱塗りの杯（さかずき）が膝の前にある。かがり火に映じて杯のふちが、血でも垂れそうにぬれて見える。

「よろしいよろしい、槍は三位。ところで貴殿は槍の名人、そこで貴殿も三位の位。まあさ三位氏一人で飲まずに、杯をこっちへ廻したまえ」こういったのは柴田三郎兵衛、忠弥の前に坐っている。酒が発して顔が赤く、笑みを含んで穏やかである。しかし依然として皮肉である。

「杯を廻せ？　ばかをいえ！　拙者に備わった杯だ！　一人で飲む。やらぬやらぬ！　おっ、なんだ、柴田の兄貴か！　アッハハハ献じよう」忠弥の顔は蒼白い。内に籠る酒らしい。眼が据わってギラギラしている。「柴田の兄貴には一目置くわい。さあさあ誰かついでやってくれ」

少し離れた片隅で、四、五人の者が興じている。その一群の頭上をつらぬき、一本の棹が伸びている。その棹の先で何物か、グルグルグルグル廻っている。独楽か、否々、朱杯らしい。芍薬の花でも咲いているようだ。かがり火に照らされてカッと赤い。と、秋雨が降って来た。宙に渦巻いている杯から、酒が霧のように散るのである。誰が廻しているのだろう？　敏捷らしい小兵の武士が、笑いながら棹をあやつっている。秦式部が曲芸をしているのである。

「あざやか！」と一人の武士がいった。垂れ頬の佐原重兵衛である。愉快そうに見上げている。

「見事！」ともう一人の武士がいった。そうしてハタハタと拍手した。総髪の熊谷三郎兵衛である。

「武士をやめても食って行けます。式部氏芸人におなりなされ。いや全く立派なものだ」もう一人の武士がこういいながら、唇から前歯をのぞかせたが、ほかならぬ金井半兵衛である。

「拙者にしてからがそのつもりでござる」秦式部片手で棹をあやつり、両眼で杯を睨みながら、さも呑気らしくしゃべり出した。「尾羽うち枯らした浪人時代――いや、今とても浪人ではござるが、もっとミジメな浪人時代、食うに困って浅草へ出、習い覚えた皿廻し、大道芸を売りましてな、日々の生活を得てござるよ。呑気でござったよその頃はな。なんせ立ち合いの見物相手、思うままの悪口雑言。お政治向きを譏ったり、浮世の間違いをののしったり、善悪両道のトンチンカン、賢愚明暗の行き違い、そういうのをアテッコスッたり！　男女痴態の醜きを、やっつけたりしたのでござるからなあ。……ところがとうとう由井先生に、本心を見破られて説得されて今は武士！　が実のところ拙者には、武士というもの移りが悪く、最近いや気がさしてござる。……オットどっこいしゃべりすぎた！　あぶないあぶない杯が落ちる」

棹を手もとへ引いたものである。

ぐっと離れて篝火のそばに、ポツネンと一人すわったまま、碁を打っている武士がある。

一人碁

碁を打っているのは奥村八左衛門、由井正雪門下の中では、一番若い人物である。相手なしの一人碁だといって碁盤のある筈がない。白紙へ筋を引いたのが碁盤、碁石といっても同じく紙製、眼のないほどの囲碁好きで、どこへ何用で行こうとも、この二品だけは携えて行く。

「考えてみれば徳川の天下、ひっくり返すのもいいけれど、しかしおれには算砂以来の、名人の棋譜を一人残らず、頭へ入れた方がいいのだがなあ」こんなことを思っている。一人で石を置き出した。「黒六のハネ手はこれでよい。……白七の手で十三に入れば、黒十一でおさえてよろしい。……白十五に対する黒十六、白十七に対する黒十八、適切な手筋といっ

てよかろう。……」盤面から顔を上げて四辺を見た。不愉快そうに舌打ちをした。「騒々しいなあ、なんということだ。よっぽど趣味のない連中だよ。飲んで酔っぱらってしゃべりまくって、剣道自慢に力自慢、能といえばそれだけしかない。……人間そんなものでいいものかしらん？　……囲碁は本来戦術で、非常に科学的の遊びだが、心をおちつける助けにもなる。……忠弥めが少しは打つらしいが、あのガサツでは仕方がない。……そういう忠弥め酔っぱらって、真っ青な顔をして眼を据えている……あいつおれには虫が好かないよ」また盤面へ食い入った。「黒八、十とこれでよろしい。十四までの別れ申し分なしと。白を一隅へ屏息せしめ、外に向かって驥足を伸ばす。この作戦われながらよいて。……」また八左衛門顔を上げた。「どいつだ、いびきをかいているのは。ほうそうか、伝達坊主か」ニヤニヤ笑ったものである。

墨染めの法衣の胸をはだけ、ムシャムシャした胸毛を露出させ、肘枕をした大坊主が、陣幕の裾に眠っていた。早足と大力とで有名な、正雪のお気に入りの門下である。

「破戒無慚もあそこまで行くと、徹底していて面白いなあ」また八左衛門微笑したが、ふとその眼を換わせた時、忠弥の眼とぶつかってしまった。「あぶないあぶない、用心用心。どうやら喧嘩でも吹っかけられそうだ。この前きゃつと一局争い、たたきつけてやったのを根に持って、爾来俺を憎んでいるらしい。囲碁の勝負なら驚かないが、腕っ節の試合となった日には、俺に勝ち目はないからなあ。なるたけきゃつを見ないようにしよう」急いで眼を伏せると盤面を見た。

「白三と一間掛かりと来たら、どう応対していいだろうかな？　四とつけ十まで運ぶかな？　これが通例というものさ。……それはそうと忠弥の奴、まだ俺を見てはいないかな？」ヒョイと眼を上げると忠弥の方を見た。と、忠弥の眼とぶつかってしまった。「どうもいけない。またぶつかったよ」あわてて盤面へ眼をおとした時、

「奥村氏！」と呼ぶ声がした。ロレツの廻らない忠弥の声だ。

「しまった。忠弥め、やって来るぞ」

はたして忠弥ヒョロヒョロと立ち、八左衛門の方へやって来た。ムズと坐るといい出した。

「さて奥村、ひと勝負やろう。この前は負けたが今度は負けぬ。……白をよこせ、勝ってみせる？　なんだ貴公なま若いくせに、先輩の拙者に黒を渡すとは！　……今日は勝つぞよ、きっと勝つ！　復讐戦というやつさ！　……ところであらかじめいっておく。貴公拙者を負かしたが最後槍がとぶぞよ、三位の槍が！　槍がこわかったら拙者に勝たせろ！　なんでもいいから拙者に勝たせろ！」

フラつく手先で白を握り、「それ」というと一つ置いたが、碁盤外れへ打ったものである。

忠弥狼藉

丸橋忠弥酔っ払っている。一向平気で肩肱を張り、「さあさあ奥村、お前の番だ！」

胆を潰したのは奥村八左衛門、「こんなべら棒ってあるもんか。白をもちながら先手を打ちおる」こうは思ったが相手が悪い。仕方なく苦笑いを浮かべながら、手を伸ばすとハの十

六、そこへピタリと石を置いた。
「ふふん、何だ、平凡な奴だ。つまらない所へ据えやアがった。よしよしそれならこうやってやれ」忠弥それでも感心に、今度は盤の上へ石を置いたが、ヌの十という真ん中である。
「さあやれやれお前の番だ。考えてはいかん、遅い遅い。……よいかな、兵は神速をとうとぶ。ばかの考え休むに如かず。で貴公がばかものなら、よろしい、よろしい、ウンと考えろ！
が、もし利口でいたかったら、休まずズンズン打つがいい。……ええとそれからさっきもいった、勝ってはいけない、勝ってはいけない。勝つのはおれだ、心得ていてくれ。……さあさあさあ貴公負けるように打て」また肩肱をウンと張り、プーッと酒臭い息を吐き、グッと盤面をにらみつけた。
むかい合っている奥村八左衛門、本来下戸で一滴も飲まない。酒の匂いさえ嫌いである。忠弥の息が顔へかかる。胸が悪くてムカムカする。で、むずかしく渋面をつくり、時々顔を横へそむける。
「なんてだらしがないんだろう。宝蔵院の槍を取ったら、日本一の手利きか知らないが、酔っぱらうと日本一のばかになる。よしよし思うさま負かしてやれ。それ！　……」というとハの四の位置、そこへピタリと石を置いた。
「驚かねえよ」と丸橋忠弥、少し真面目に置いた石は、タの十五という位置である。
「少し正気になったらしい」こう思った八左衛門、タの十七へ石を置いた。
「よし、来やがれ」と丸橋忠弥、レの十七へ石を置いた。
「真剣になってきたらしい」こう考えた八左衛門、レの十八へ石を置いた。
ズンズン手合わせが進んでゆく。最初の二つがわざわいし、忠弥だんだん追い詰められる。で、じっと考え込んでしまった。嬉しがったは八左衛門、ひざ頭を片手でたたきながら、愉快そうに冷語を飛び出させた。
「さあさあ丸橋、やったりやったり！　沈思黙考かな。気の毒千万。それ兵は神速をとうとぶもの。ばかの考え休むに如かず。貴公ばかなら考えるがよろしい。利口でいたかったらズンズンお打ち。拙者は負けない、貴公を負かす！　返り討ちというやつさ」とても面白くてたまらないらしい。
突然忠弥いい出した。「おい奥村、一目待て！」
「ナニ一目？　待てませんねえ」
「是非待ってくれ。おれがたのむ」
「いけませんね。待てませんよ」
「たのんでいるのだ。待ってくれ！」
「おあいにくさま」と八左衛門、あごを前方へ突き出したが、
「似合わないなあ、え丸橋。お前は随分強気の筈だ。それをなんぞや待てなぞと！　打ったり打ったり、さあさあ打て！
それともお前戦いの場で、組み伏せられた敵に対して、首を掻くのは待ってくれ、こんなことをいってたのむかな？　たのむというなら卑怯未練！」
「だまれ！」と突然丸橋忠弥、ほえるように声を響かせたが、
「卑怯とはなんだ！　無礼の一言！」
続いてアッという声がした。声の主は八左衛門、忠弥に投げられた大杯で、額の真ん中をわられたらしい、タラタラと血潮がしたたった。「これは狼藉」と一同の者、総立ちになろ

うとした時である。
「騒々しいの、静まらっしゃい！」りんとした声が響き渡った。

正雪と時行

声を掛けたは由井正雪、陣幕に染め出した菊水の紋、それをうしろに篝火（かがりび）を左右、ずっと離れた上座の位置に、円座を敷いてすわっていたが、顔は桃色、微醺（びくん）を帯びている。「丸橋氏、不謹慎でござる！　……奥村氏、気にされぬよう。……ああ柴田氏柴田氏、丸橋奥村のご両所を連れて天草殿の陣へでも参り、よろしく和解おさせください」
いわゆる鶴の一声である。柴田、丸橋、奥村ほか、五、六人がゾロゾロと、陣幕の外へ出て行ったが、あとはヒッソリと白け渡った。
正雪の前に老人がいる。ほかならぬ天草時行で、自分の陣屋からコッソリぬけ出し、遊びに来たという格好である。
「お若い方は勇敢で」こんなことをいい出した。「が、ちと面白くござらぬな」
「さよう」と正雪眼をひそめたが、「丸橋氏の軽率と短気、困ったものでございます」あたりをはばかった小声である。
「それと同時に奥村氏の、囲碁好きも困ったもので」これもあたりをはばかった声。
「ほほう」と正雪驚いたように、「囲碁という遊戯、いけませんかな？」
「いや大変結構でござる。囲碁、将棋、生花、茶の湯、ことごとく結構な遊戯でござる。こいつにふけっておりますと、心が静まり物欲がなくなり、美的情操さえ養われます。ええとそれだから奥村氏には、ちと不向きでございますなあ」
「ははあさようでございますかな」――だが正雪にはわからないらしい
「いやむしろこれはこういった方がよろしい。われわれ義党の面々にとっては、この種の遊戯は総体に、面白くない、とこのようにな」
「ははあさようでございますかな」やはり正雪にはわからないらしい。
「徳川の天下をひっくり返す、というのがわれわれの目的の筈で。……これは素晴らしい大欲望でござる」
「さようさよう大欲望でござる」
「で、悠長（ゆうちょう）な遊戯などにふけり、美的情操を養ったり、心を静めたりすることは、逆行的態度でございますよ。……去勢されてはいけませんなあ。うんと物欲をたくましゅうし、俗中の俗になるのが本当で」
「なるほど」といったが由井正雪、かすかにうなずいたものである。
篝（かがり）がドカドカと燃えている。それに照らされた正雪と時行、かなりおかしげな対照である。ぶっ裂き羽織に裾縁野袴。そのよそおいは同じであるが、正雪は白面端麗な容貌、総髪を肩に波立たせ、そり身に威儀をつくろっている。時行となると髪は茶筅（ちゃせん）、しかも半分白髪である。握りこぶしほどの小さな顔、みつ口で無数にしわがある。態度はといえばせむしのように、背をこごめてのぞき込んでいる。

公平に照らしている篝の火が、かえって不公平に思われるほど、二人の姿は似ていない。
「それはそれとして正雪殿」天草時行ささやき出した。「敵を前にしての無礼講、拙者これには感心しております」
「これには訳のあることでな。あえて敵勢をあなどるのでもなく、また、大胆をてらうのでもござらぬ」
「それは承知で」と天草時行、貧弱にへこんでいる胸を打った。「人物試験をなされている筈で」
「見抜かれましたな。その通りでござる」
正雪くちびるをほころばせたがにわかにグーッと首をさげた。「巻軸二本を泉水へ投げた、紀州大納言家のお振る舞い、天草殿にはなんと思われるな？」そういった声の不安そうなことは！

紀州家の心

正雪にきかれて天草時行、音の響きに応ずるように、即座に答えたものである。
「変心でござるよ。一目瞭然！」
「ううむ」とうめいたが由井正雪、いよいよ不安に堪えられないらしい。「そうとられるかな、貴殿においても」
「とりようがござらぬ。これ以外にはな」
「が、ただご短気と解しては？」
「甘い！」とばかりセセラ笑った。
「よりけりでござるよ、ご短気にもな！」
「とはいえ従来大納言家が、われらへ寄せられたご好意から推せば、そうひたむきに変心などと……」なお、正雪うべなわない。
「ということであってみれば、下世話の言葉にもなかなか身にしむ、金言というものがございますなあ」妙なことをいい出した。
「なんでござるな。下世話の金言？」正雪眉の間へしわをたたんだ。
「あばたがえくぼに見えるというやつ。アッハハハいかがでござる」笑いはしたが四辺を憚かり、時行の声は低かった。
「ほれ込んでいるといわれるのか？」正雪いやアーな顔をした。
「さようでござる頼宣どんにな！　かれ老英雄、腹の知れぬご仁。貴殿トロトロとたらされております」
だがなお正雪眉をひらかぬ。凝然と時行を見詰めている。
「釈迦に説法とは思うものの、その釈迦さえも提婆には、いたしめられたためしがござる。そこで拙者が説明しましょう」時行いい出したものである。「二本の巻軸、何物かというに、千代田大城の縄張り図面、精細を極めた恐ろしいやつ、あれさえあれば千代田城の奥へ、まず、やすやすと忍び込めます。徳川を計るわれわれには、何より有難い宝物。それをわれらの盟主とたのむ、紀州大納言とあるべきお方が、『巨宝のあり場所記してない以上、役に立たぬ』と一喝し、泉水へ投げ込み失われようとしたは取りも直さずあの巻軸を、われわれの手より奪い取り、徳川幕府の安泰のため、消滅させようと計らわれたもので、こういう意味からいく時は、味方どころか大納言家には、敵でござるよ敵でござるよ！」憎さげにいっ

たものである。
　だがやっぱり由井正雪、眉もひらかず物もいわない。心で悩んでいるらしい。と、にわかに豁然(かっぜん)といった。
「その問題はそれとして、貴殿天草時行殿を、われらが党中へ加えた一事は、われら本望と致しております」
「いや、こいつこそ偶然で」時行突然ひょうきんになった。「そうはいっても、この拙者、何か仕事がなかった日には、退屈で退屈でたまらぬという、困った性質の持ち主でな。謀反商売などまことに結構、そこで喜んで党中へ、加入いたしたというものでござるよ」
「拙者自身を高祖に引くは、あたらぬもまた甚だしいもの。しかし貴殿だけは張子房(ちょうしぼう)でござる」
「薄ッきたない張子房で」
「武田家における山本勘介(やまもとかんすけ)」
「跛者(びっこ)でなくてみつ口でござんす」
「アッハハハ」
「アッハハハ」
「どっちにいたしても帷幕(いばく)の謀将」正雪いよいよ持ち上げる。
「さあてね」と天草時行、皮肉に顔をゆがめたが、「お高く買ってくださるはよい。だがそれにしては扱いが悪い」小言をいおうとするらしい。

梟雄と山師

　扱いが悪いと時行にいわれ、正雪いくらか興ざめたらしい。
「ははあ何かご不満かな？」首をかしげたものである。
「いいえさ、今は満足でござる」今度は時行キサクに笑った。
「思い出したからいうまでのこと。初めてお逢いしたあの際の扱い、あれはどうにも謀将を扱う、扱いぶりではござんせんでしたよ」
「あいつをいわれると拙者困る」鼻白んだというように、正雪苦味ある笑い方をした。
「いや驚いたのなんのって、あの時こそびっくり敗亡し、時行グーの音も出ませんでしたよ」かえっておかしそうに笑ったが、「二本の巻軸島原の手から、やっと取りあげて帰宅してみれば、百人余りのおさむらいさん、なんの苦もなく拙者を捕縛(ほばく)、たたっ込んだは地下の牢屋『どうだ天草、参ったか！』貴殿にガ――ンと食らわされた時には、文字通りガ――ンと参ってござるよ」
「しかし、あの際お目にかかり、一言二言お話しするうち、これは素晴らしい器量人、拙者なんどの及ぶところでない、こう存じて客間へ招じ、義党へお加わりくださるよう、懇願した筈ではござらぬか」
「そこで拙者は加わりました」
「で現在は謀将とはいえ、その実立派なお客人で」
「さようさ、拙者もそのつもりで」トホンと時行いい放った。
「全く貴殿は人物でござるよ。つきあえばつきあうに従って、いよいよえらさが加わります」正雪、持ちあげたものである。
「いい得(う)べくんば一代の梟雄(きょうゆう)」
「いや貴殿こそおえろうござる」今度は時行が持ちあげる。
「いい得べくんば一世(せ)の山師！　それにさ風采(ふうさい)がまことによろしい。だまって坐っておられると、十万石のお大名でござ

んす」
「いや貴殿におかれても」
「それは駄目駄目」と手を振った。「拙者などだまって坐っていると、米屋のご隠居に踏まれます。そこでむやみとしゃべりますて」
「どっちみち拙者より貴殿の方がおえらい」
「どういたしまして貴殿の方がおえらい」
「なかなかもって貴殿の方が！」
「いや貴殿こそ！」
「貴殿こそ！」
大変仲がよいのである。
顔見合わせて微妙に笑った。
「そこで一ぱい」と正雪がさした。
杯を受けて――グッと飲み、「返ぱい」といって時行がさした。
二人快く酔ったらしい。
「そこで話を元へ戻し」時行一層小声となった。「敵前においての無礼講、人物試験は気に入った催し。ところで結果はいかがかな？」
「さればさ」と正雪あたりを見た。「各自の個性見て取れました」
「で、ことごとくたのみある武士で？」
「まずその辺。……貴殿においては？」
「拙者の見どころ、いささか違う」
「お聞かせくだされ」と顔を沈めた。
「一徹短慮の丸橋氏と、女性的性質の奥村氏、二人を斬ってお捨てなされ」
「それは不仁、なりますまい」
「やむをえませぬ。下世話の金言、もう一つお聞かせいたしましょう。千丈の堤も蟻の一穴……」
その時であった。陣幕の外から、「松明が見える！　こっちへ来る！」呼び立てる二、三人の声がした。
「横へそれた。上流へ行く！　湛慶滝の方へ行くんだろう」
――朱舜水一行の松明らしい。次第に夜が明け始めた。

亡霊

往々例外はあるにしても、悪人の最期というようなものは、どうやら案外もろいものらしい。島原城之介の最期など、その一例といってよい。二つの亡霊を見たために――少なくもかれにはそう見えた。かれは自滅をしてしまった。かれが原の城へこもったのは、キリシタンの秘法を盗みたいがためで、そうしてそれを盗んだため、落城前に脱出してしまった。かれほどの悪人ではあったけれど、かれに秘法を伝えてくれた、島原一揆の総大将――もっとも黒幕ではあったけれど、イマニエル司僧が落城と共に、表に立った総大将の天草四郎時貞と共に、焔々たる火中に飛び込んで、殉難したと聞いた時には、さすがに懺悔心を起こしたものである。がそのうちメキメキと、悪業を積むに従って、せっかく起こした懺悔心を、消磨させたのはいうまでもない。しかし苦心して作りあげた、邪教の道場は破壊される、イスラエルのお町には翻弄される。すっかり自信を失うにつれて、また懺悔心というようなもの

が、心によみがえって来たものである。
そこへ付け込んだのが亡霊であった。

夜は明けたが日が出ない。朝の霧が立ちこめている。そよいでいるのはなんだろう？　崖を蔽うている群ら葉である。群ら葉に抱かれて懸かっている滝！　シーンと音なく落ちている。と、ジャラ――ンと鉄杖の音！　霧を分けてユラユラと、現われたのは城之介、滝壺を取り巻いた岩の上へ、ヒョロヒョロと上がると足をとめた。
「滝がかかっている。……音がしない。……行く手は絶壁、行きどまりだ。……お町め、お町め、どっちへ行ったかな」岩の上へ突いた鉄杖へ、痩せこけた身体をもたせかけ、空（うつろ）の眼で滝を眺めやった。
「島原！　島原！」とその時である、滝の中から声がした。
「おれを呼んでいる！　誰だろう？」
眼を見張った時、滝の背後から、崖へ現われた物影がある。人間だろうか？　人間らしい。だが正直に形容すれば、人骨といった方がよいようである。そんなにも痩せかれているのである。眉に赤毛が渦巻いている。腰に白布が翻っている。あとはむき出しの裸体である。胸から肋（あばら）から手足から、血がひものように流れている。山の小父さん！　紅毛人である。
滝を左に、崖を背に、朝風になぶられる霧の中に、のびのびとして立っている。
「島原！　島原！　どうして来たな！」体に似つかわしい、しわがれた声だ。
「ああ、あなたは、イマニエル司僧！」こう城之介の叫んだのは、しばらく経ってからの後であった。ジャラ――ンと鉄杖の音がした。うしろへよろめいた証拠である。
二人向き合って突っ立った。これは劇的の光景であった。しかし間もなく一層の、劇的光景が演ぜられた。すなわち次のような問答の後、島原城之介身をおどらせ、滝壺の中へ飛び込んで、再びこの世へ出なかったのである。
「イマニエル司僧よ。あなた様が、この世に生きておられようとは？　いや亡霊だ亡霊だ！」
「逃げて来たのだ。裏切ってな！」むしろ愉快そうな声である。
「私でございます、裏切ったのは！」
「だからお前は非常に賢い！」
「おれにはわかる。叱っているのだ！　イマニエル司僧の亡霊が！」そこで城之介いったものである。
「おお司僧様。あなたには、ご殉難なされた筈ではございませんか？」
「誰のためにだ？　聞かせてくれ！」アイロニカルの声である。
「はいあなた様の拝まれた、万能のお方のそのために！」
すると突然笑い声が、紅毛人の口から出た。それから次のような言葉が出た。

死蝋

「万能のお方か！　あああれはな、そういう美しい名のもとに、地に鮮血を敷くものだよ！」

「いいえそんなことはありません！」かえって島原城之介、はじき返すようにいったものである。
「ああそれでは悪魔と同じだ！」
「いいや」といよいよアイロニカルに、紅毛人はいいつづけた。「教えてあげよう。悪魔とはな、その気の毒な名のもとに、万能のお方を空高く、雲の上まで持ちあげているものだ！同情していい引っ立て役だ！」
「おれにはわかる。叱っているのだ！　イマニエル司僧の亡霊が！　……裏切り者のこのおれを！」
　そこで城之介悲しそうに、
「イマニエル司僧の亡霊よ。では人間はこの世では、何を拝んだらよいのでしょう」
「そいつはおれにもわからないよ。おれも探しているのだからな」
「お教えくださいまし！　お教えくださいまし！」
「おれをあんまりせめないでくれ」
「お教えくださいまし！　お教えくださいまし！」
「お前は悩んでいるようだな」
「悩んでいるのでございます！」
「その後平和ではなかったのかい」
「ひどい目にばかり合わされました」
「どっちを向いてもひどい目に合うよ」
「力をお授けくださいまし！」
「わしからお前へお願いしよう」
「イマニエル司僧の亡霊よ！　……」
「また拝む物をか？　教えてくれか！　教えてやろう！　第三の者だ！　神と悪魔を踏まえているものだ！」
「それは何物でございましょう？」
「人間だよ！　人間だよ！」またガラガラと笑い出した。「沢山いるなあ、人間は！　地球をうずめてウジャウジャいるよ。しかし人間は一人もいない！　……だが島原！」といかめしくいった。「滝壺をご覧！　一人いる！　この上もない馬鹿者が！　だから一番尊い人が！」
　滝壺をのぞいた城之介の口から、恐ろしい叫び声が飛び出した。そうして、その次の瞬間に、滝壺の中へ躍り込んだ。
「ここにも亡霊！　……天童よ！　……水の中から……生きながら……私を睨んでおいでなさる！　……裏切り者のこのおれを！」
　水音！　静寂！　それだけであった。
「お祖父様！」とその時女の声、霧の中から響き渡った。走り出たのはイスラエルのお町！
「イマニエル司僧！」男の声！　飛び出して来たのは早引の忠三！　「おおお町か！　私の孫！」紅毛人はよろめいた。「おいでおいで私の巣へ！　……だが逢えようとは思わなかった！」
「生きておられたのでございますか！」お町、岩の上へひざまずいた。
「亡霊ではない！　生きているわしだ！　おいでおいでわしの巣へ！」
　三人滝の裏へ隠れた時、またもや霧を割りながら一隊の人数が現われた。朱舜水と光圀の一行である。
「これは珍しい！　死蝋がある」こういったのは朱舜水、滝

壺をのぞいての言葉である。
「それにもう一つ修験者の死骸が」こういったのは水戸光圀。
「滝のうしろで人声がします。お爺さんの声と娘さんの声が」
こういったのは君尾である。
朝日が上った。鬨の声がした。正雪、時行の連合軍が、木地師の郷へ攻め込んだらしい。と、木地師の郷にあたり、すさまじい爆発の音がした。つづいて立ちのぼる黒煙り！　しかしこの頃木地師の一隊は千里のあなたを走っていた。

漂泊

富士見を離れる十里の地点、木地師の大軍が走ってゆく。先に立ったは将右衛門、左右に二挺の駕籠が行く。左の駕籠にはお京様、右の駕籠には広太郎、のどかな様子をして乗っている。その後から行くものは、男の木地師、女の木地師、老人、子供、それから家畜――馬や犬やにわとりや！　それから荷車、それから小荷駄、総勢すべて五百人、二列縦隊、トットと走る。みんな陽気で元気がよい。馬のいななき、犬の吠え声、鶏の羽ばたき、子供の叫び声、みんなみんな活気がある。女の笑い声、賑わしい。男のしゃべり声、勇ましい。裾野は広い、草は黄色い、あちこちに櫨もみじの叢がある。焔がかたまっているようだ。森！　狐が飛び出した。林！　兎が走り出た。沼では鴨が騒いでいる。菅の中からは葦切りの声！　と、鉄砲の音がした。猟師が朝駈けをしたのだろう。夏沢岳、天狗岳、中山、丸山、茶臼山、縞枯岳に横ヶ岳、東の空にそびえている。その上へ懸かった明けの空、空を横切る渡り鳥、朝日が出た！　霧が晴れた！　なんとキラキラ露の玉が、光りの歌をうたっているんだ。
トットと走る。木地師の大軍。さて行く先は？　北だ！　北だ！
「日が出た、日が出た」と将右衛門、さも愉快そうにしゃべりだした。「日の出を合図に約束の竹法螺、ポーともなんとも吹かなかったので、正雪時行の連合軍、せめているだろうよ、富士見の郷を！　と轟然たる爆発の音、時間をはかって伏せて置いた地雷、破裂したろうよ、今頃はな！　アッハハハ驚いたろうなあ。そうともそうとも驚かなければならない。人っ子一人いないんだからなあ。火焔黒煙のその中で、調べ革ばかりが廻っている。螺旋ばかりが廻っている。鉄槌ばかりが働いている。こいつア驚くのがあたりまえさ。ついているんだおいらにはな。山の小父さんという人がよ！　それから伝えられたスペイン火術、自然に破裂を致します。そうして肝心の木地師はといえば、家財を纏めてとうの昔、郷を見すててさすらいの旅さ！　アッハハハ、いい気味だなあ」
トットと先へ走って行く。あとから全軍が引きつづく。手鎌が光る、足並みが揃う。さすらいの民のさすらいだ。未練も悲しみもそこにはない。
「今日はお天気、明日もお天気。おれにはわかるよ、明後日もな、きっとお天気に相違ねえ」また将右衛門しゃべり出した。
「結構な旅行、どこへ行く？　どこかへ行くよ、心配はねえ。気に入ったところで住居する。そうしてやっぱり建てるのさ。山の小父さんから教えられた、水力じかけの工場をな！　…

…さあてところでお京様」
こういうと富士見の将右衛門、駕籠に乗っているお京の方へ、ヒョイと顔を振り向けた。
「あなたは紀伊様のお姫様、お妾腹とはいいながら、立派なご身分でございますよ。が、今では木地師の娘、で、だんだんと劫を経て、私たち仲間と同じように、お駕籠なんかに乗りっこなし。山であろうと野であろうと、トットとお歩きなさるよう、修業なさらなければなりませんなあ。さアてところで袴様」今度は富士見の将右衛門、ヒョイと広太郎の方へ顔を向けた。「いずれそのうちゆっくりと、あなたのご身分も承りましょう。が、どっちみちあなたには、大旗本の若殿様……だろうと私は思いますので。そういう品位でございますよ。が、やっぱりただ今では、私達木地師のお仲間で、そうしてどうぞ長く、長く、仲間であっていただきたいもので。そこで同じことを申します。今はご病後、仕方もござらぬ。しかしたっしゃになられたら、お駕籠なんかに乗りっこなく、トットと歩いていただきたいので。さアてところでお京様」
お京様の方へ振り返った。

姉妹の母？

将右衛門お京へ話しかけた。「不幸なお方でございますよ、へいさようで、あなた様はね。……が、あなたのお母様は、もっと不幸でございましたよ。お美しいお方でございました。お志乃の方と申しましてな。そこで紀州のお館様、ご寵愛なされたのでございますよ。そうしてお子様を儲けましたので。それも双児のお姫様をね。お京様と君尾様！　……ところがその時困ったことには、にわかにキリシタンのご詮議が、きびしくなったのでございますよ。しかるにお志乃様ときた日には、こりかたまりのキリシタンで、信仰を換えようとはなされない。それでお館には閉口され、不びんではあるがひまを出す。幕府への遠慮置くことはならぬ！　で、沢山お手あてをして、おひまを出されたのでございますねえ。……さアてその後お志乃様、どこでおなくなりなされたやら、消息さえも知れませんので、可哀そうッたらありませんや。が、それだけならまだ結構。ところがお館の申されるには、姫二人も手もとへは置けぬ。幕府への遠慮、親知らずでくれろ！　で、あなたも、君尾様も、人手に渡されたのでございますよ。それもこういう条件でね。あまりよいところへ縁づけぬよう！
……いやはや全く貴人というものは、勝手なものでございますなあ。……」ここで将右衛門だまりこくった。気まずいというような様子である。「ところで」と将右衛門話し出した。「最近のことでございますよ、私へ急飛脚が参りましたので。すぐ江戸表へ出るようにとな。お館様からの急飛脚で。そこで私は行きました。旧ご主君でございますからねえ。いや紀州のお館様ときたら、英雄に相違ございませんよ。私のような木地師から、香具師というような者へまで、お扶持を出してこっそりと、ご家来にしたのでございますからねえ。……お目にかかるとお館様、こうおっしゃるではございませんか、京姫をお前へ預けるによって、富士見の郷へ連れて行け！　永久人里へおろすでない！　そこでお連れしたという訳で。……いやはや貴人というものは、勝手なものでございますな

あ。それが英雄なら英雄ほど、いよいよもって勝手なようで。そのくせどうやら四方八方へ、遠慮をしなければならないようで。いわば勝手と窮屈とを、一緒くたにした変なものが、貴人でもあれば英雄でもある。……ということになりますなあ。貴人商売英雄商売、うれしいものじゃアございませんよ。さアてところで袴様」

こういうとまた将右衛門、広太郎の方へ振り返った。

「お見受けしたところあなたには、どうやら以前からお京様とは、ご懇意のご様子でございますが、大変結構でございますよ。そこで私は申しあげたいんで、ご夫婦におなりなさいましとね。そうして第二世木地師の頭、そいつにおなりなさいましとね。そうなったら私なんか、すぐにも隠居を致しますよ。……大小サラリとほうり出し、手鎌をお取りなさいまし。そうして沢山作るんで、椀や茶盆や茶筒をね。そうしてあなた方お二人も、お子様をおこしらえなさりませ！　木地師の頭三世をね！　生めよふやせよ、ホイ、ホイ、ホイ……」

機嫌よくしゃべって走って行く。

「それにしても君尾様をあずかった、銅兵衛どんの死んだのは、私にとっては悲しみで。いい兄貴でございましたよ。だがマアそれも仕方がない。人間一度は死ぬものだ。生きているうちにお働き！　ホイ、ホイ、ホイ、いいお天気！　明るいなあ、何もかも！」そこでうたい出したものである。「明るくなければいけません！」

「驚いたなあ」と広太郎、駕籠の中で胸へ腕を組んだ。

広太郎剣をすてる

駕籠の中で腕を組んだ広太郎、考え込まざるを得なかった。

「ほほうそれではお京様は、そんな身分であったのか。紀州大納言家妾腹の息女、なるほどなあ。それだからこそ、あんなにも品位が備わっているのだ。……だがそれにしても、小松原の家の娘になったのはなぜだろう？　いやいやこれとてもよくわかる。つまり紀州大納言家から、親知らずで戴いて来たのだろう。……それにしてもだ。杉窪の里の、銅兵衛殿の娘ごの、君尾様までが同じように、紀州家の息女であろうとは？　まるで俺には夢のようだよ。そうすると俺は双生の姉妹から、愛されたことになるのだなあ。そうしてこっちからも愛したってものさ。なんだかちょっと変な気がするなあ」こそばゆく笑ったものである。「さてところでこの俺だが、これからどうしたものだろう？」考え込まざるを得なかった。「江戸へ帰って武士になるか？　山に残って木地師になるか？……お京様は山からは出られない。永久山中にいなければならない、でもし俺が武士を選び、山を下って行くとすれば、お京様とは別れなければならない。これは俺には苦痛だよ」なお広太郎考えた。「恋人をつかむか武士をとるか？　二道煩悩というやつだなあ」かなり迷わざるを得なかった。「それはそうと君尾様だが、俺を思っているかしら？」君尾のことを考えた。「明るい性質のあの娘、おれを思っているにしても、やがては忘れてくれるだろう。そうだたいして悩みもせず。だからあの娘を見捨てても、それほど不徳にはならない

だろう。……さてところでお町だが……」お町のことを考えた。「あの娘の素姓こそ、俺には全然見当がつかない。……命の恩人というところで、たしかに俺もあの娘を、最後には真剣に愛したが、しかし元々二人の恋、変則なものと認めていい。だからあの娘を見捨てても、良心の苛責に悩むこともあるまい……。そこでやっぱりお京様だ」お京様の身の上へ返って来た。「これこそ本当の恋人だ。その本当の恋人が、すぐ手近にいるではないか。つかまないのはばかだなあ。しかし」とここで考えた。「完全につかませてくれるかしら？　心とそうして身体とを」なんとなく不安に思われた。「神聖神聖としたお嬢様、処女処女としたお嬢様、そこまで愛しているかしら？　それさえわかれば決心する！　なんと邪魔ッけな大小だ。駕籠に乗るにさえ厄介だ。うるさい威儀も体面も、この大小があればこそさ。なんの捨てるに惜しいものか」

ヒョイと駕籠から首を出した。眼の前にお京様の駕籠がある。そこからのぞいているお京様の顔！　二人の眼と眼がぶつかった。

「よし」と広太郎つぶやいた。

「これできまった。山にいよう」

だがいったいどうしたんだ？　何が決心をさせたんだろう？　なんでもなかった。お京様の眼に、涙が光っていたからである。

木地師の大軍走って行く。正午となった、昼飯だ！　それを済ますとまた旅行！　「ホイ、ホイ、ホイ、……ホイ、ホイ、ホイ」機嫌のよいのは将右衛門、真っ先に立って走って行く、掛け声にさえ活気がある。

今日のいわゆる日本アルプス、そっちへ走って行くのである。楽しい生活、彼らにあれよ！

さて倏忽と月日が経ち、冬が信濃へ訪れてきた。雪に蔽われた富士見高原、寒々として真っ白だ。そこへ現われた二つの人影、虚無僧姿のイスラエルのお町、道中師風の早引の忠三。

ふもとの方へ下って行く。

変わった二人

麓の方へ下って行く。サクサクサクと音がする。踏まれて雪がきしるのである。雪が反射する真昼である。窪地の蔭がむらさきに見える。地上二、三尺の空間には、虹がポーッと立っている。烏！　梢に止まっている。物思わしそうに鳴こうともしない。

「ねえ忠三様」とお町がいった。なんとやさしい穏やかな、そうしてつつましい声なんだろう。

「やっぱりお祖父様はご最後になって、神様を信じたのでございますわねえ」

「はいさようでございますとも。イマニエル司僧様はお逝くなりになる時、昔どおりの信者になられました」なんと忠三のそういった声も、つつましく真面目のことだろう。

「でもお祖父様はご自分のためには、しまいまでお祈りをしませんでした」

「お嬢様のおためには祈られました」

「神よ、私をおにくしみください。しかし憐れな孫娘ばかりは、どうぞお守りくださいまし！　こうお祖父様はいいましたのね」
「はいさようでございました。でも神様は司僧様の霊をも、天国へ導かれるでございましょう」
「でもお祖父様はいいましたわ、『ああ俺だけは地獄へ堕ちよう』と」
「だから天国へ参られます」
「どうぞ天国へ行かれますよう」
　雪を踏んで二人歩いて行く。二人の影法師が雪へうつる。見送っているのは山々である。さむざむと白無垢をまとっている。
「予感があたって袴様とは、お逢いすることができませんでした」お町の声はむせぶようである。
「一日違いでございましたな。残念なことをいたしました」
「木地師に連れられて袴様、どこへおいでになられたやら！
　……」やはりむせぶような声である。「でもよいことを致しました。この富士見へ来たばかりに、なくなられた筈のお祖父様と、お目にかかることが出来ましてね」
「そうしてお看護をなさいました」
「ああそうしてお葬式をね」
「滝壺の中で司僧様、天童様とご一緒に、眠られることでございましょう」
「お二人ながら唐櫃の中で」
「原の城から逃げられた時、身を隠されて来た唐櫃の中で」
「ああ何もかも元へ帰った」

　二人ふもとへ下って行く。裾の辺を風が吹く。茫々とした冬の風だ。
「それにしてもイマニエル司僧様は、立派な豪僧でございましたよ」忠三の声には感激がある。
「あの二本の巻軸の秘密も、どうやら解けたようでございますね」
「みんなお祖父様の細工でしたのね」
「それも悪気からではございませんでした。布教のおため！
　でございました」
「そうしてお祖父様はその『ため』に、心を食われてしまいました」
「ご熱心からでございます」
「そうして背信者になったのね」
「人間性があり過ぎましたからで」
「あのむごたらしい懺悔生活も。……」
「人間性があり過ぎましたからで」
　山々がだんだん高くなる。次第に二人は下って行く。
「お町様！」と不意に忠三がいった。「これからあなたはどうなされます」
「これをね」とお町は胸をさした。「埋ずめに行きますの、ご遺言通り！」
　メダルと並んで小さな箱が、お町の胸へかけられてある。

恋の墓

　メダルと並んで小さな箱が、お町の胸へかけられてある。

何がはいっているのだろう？
「ああお髪でございましたね」
こういったのは忠三である。
「お祖父様のね。……唯一の形見」お町の声は泣いているようだ。
「そうしてご遺言とおっしゃるのは？」
「『お前のお母様のメダルと一緒に、故国の土へうずめるように』これがご遺言でございました」
「故国？」と忠三は不思議そうにきいた。
「スペイン！」とお町がすぐ答えた。「お祖父様とそうしてお母様のお国！」
「海のあなただ！　遠い国だ！」
「妾そこへ参ります」
忠三はじっと考えた。「私もお供を致しましょう」
「どうぞね、お願い致します」
「参りますとも、僕となって」
「いいえ、仲のよいお友だちとして」
「そうしてスペインでくらしましょう」
「ええ、神様にお仕えして」
「まずとりあえず江戸へ帰り、旅の仕度をいたしましょう」
「花ちゃんとそうしてネロちゃんを連れてね」
「そうして南蛮屋を片付けて」
「東海道を下りましょう」
「まず長崎へ！　それから船で！」
「スペインへねえ！　スペインへねえ」突然お町は眼をおさえた。「空しいものを追っていました！　ああ妾は、空しいものを！」
「巻軸？」と忠三きき返した
「袴様！　袴様！　袴様！」
その声が高原をはって行く。木精が袴様！　と返って来た。
「おあきらめにならなければいけません」忠三の声は病んでいるようだ。「お嬢様ばかりではございません。誰もかもそうなのでございますよ。空しいものばかり追っております」
「袴様！」ともう一度呼んでみた。お町！　と呼び返す声はしない。袴様と返るばかりである。
二人トボトボと歩いて行く。サクサクサクサクと雪がきしる。雪を持った木々が二人を迎え、雪を持った木々が二人を送る。
と不意にお町がいった。「でも妾は慰められます。しぶきが舞い込み、しずくが落ちる、あの滝の裏の岩室の中で、五年もの間苦しまれた、お祖父様のことを思いますとねえ」
「そうしてそこで私達も、幾月かくらしたではございませんか」
「それが私達をかえてくれました。よい人間へ！　真面目な人間へ！」
「そうして私達に教えてくれました、懺悔生活というものを」
「懺悔しながら暮らしましょうねえ」
「そうして前途へ希望を持って」
「ええ」とお町はうなずいた。しかしまたもや眼をおさえた。
そうして声をしぼったものである。
「ああ袴様は！　……妾をすてて！」
忠三には何ともいえなかった。ただ同じように眼をおさえ

た。
と、お町振り返り、今来た方を眺めやった。
「日本を離れたら二度と再び、こんな所へは来られない。よく見ましょうよ、忠三様！」
眼界の限り真っ白である。起伏して山々がうねっている。巨大な大理石の墓のようである。
まさしくそれは墓場であった。イマニエル司僧と天童の！
そしてお町の悲しい恋の！
やがて二人はふもとへおり、甲州街道へ足を入れた。彼らは間もなく異国へ行こう。二度とこの国へは帰って来まい。神よ！　この世におわすなら、苦労しながらむくいられなかった、可哀そうなお町の前途にだけでも、その恩寵（おんちょう）ありますよう！

父子の対面

慶安四年四月二十日、晩春初夏の物憂い日、
「天草一揆！　吉利支丹（キリシタン）の奴ばら！　虐（さいな）みに来おる！　許してくれ！」
物狂わしく叫びながら、将軍家光薨去（こうきょ）した。年齢四十八歳である。
千代田の内外大騒動、大名旗本総登城、だが家綱（いえつな）職を継ぎ、功臣名将輔佐したため、シ――ンと天下治まった。しかしもちろんその底において、一味の不安脈々と、波打っていたのはいうまでもない。
同じ月のある日のこと、朱舜水屋敷から二挺の駕籠が供揃い質素にかつぎ出された。着（つ）けられた所は紀州屋敷、駕籠から出たのは光圀と君尾、スーッと奥へ通って行った。
紀州家の客間、主客二人。――
「光殿（みつどの）、厚くお礼をいう」こういったのは紀州頼宣（よりのぶ）、感慨深い表情である。
「偶然お助け致しましたまでで。しかし伯父上のご落胤とは、夢にも想像いたしませんでした」光圀微笑をしたものである。
「そうであろうな」と紀州頼宣、これも微笑を浮かべたが、グルリと君尾の方へ膝を向けた。
「済まなかったな、苦労をさせて」
「はい。……いいえ」と君尾はいった。つつましく両手は揃えたが、明るい心の彼女である。苦労した様子などは見えなかった。「いつも楽しゅうございました」――といった様子である。
「さて」と改めて光圀が、頼宣へ話をしかけた時には、すでに君尾は座にいなかった。侍女たちにかしずかれて別の部屋で、もてなしを受けていたのである。「少年の私、伯父上に対し、このようなことを申し上ぐるは、差し出がましゅうはございまするが、特にご免をこうむりまして……」
「ははあ」と頼宣トボケた顔で、「どんなことかな？　話すがいい。いやいや光殿は年こそ子供、が心は立派な大人。遠慮はいらない、お話しなされ」
「大猷院様（だいゆういんさま）にもご薨去（こうきょ）のみぎり、天下なんとなく騒がしく、人心恟々（きょうきょう）のおりからでござれば、なにとぞ伯父上におかれましても、由縁（ゆかり）の知れぬ浪人など」
「ああ正雪、丸橋の徒か」

「あまりお近づけ遊ばさぬよう」
「よろしい！」と潔く引き受けてしまった。「わしもな」とそれからいい出した。「従来は少しく思うところあって、正雪、丸橋、吉利支丹の徒、郷の長だの里の長だの、いろいろの者を手なずけはしたが、少し前から心が変り、今ではむしろ五柳先生の仲間、隠遁しようと致しておるよ」
「安心いたしましてございます」
「南海の龍、衰えたよ」
「いえいえ龍は沈潜してこそ、尊くもあれば人にも恐れられ」
「朱舜水先生のお仕込みだの」
「これは」といって笑ってしまった。
「アッハハハ」と磊落に、紀州頼宣も笑ったが、「そのくせわしは風雨を起こし、天上しようと心掛けたものさ」
「物騒千万に存じます」
「ナニ落っこちたから平和だよ」
「落っこちになりました原因は？」
「やくざな二本の巻軸のためさ」
「ははあ」といったが光圀には、なんの意味だかわからなかった。
「よろしい。ひとつ、話してやろう」頼宣そこで話し出した。

巻軸の真相

「因果は巡る小車の……といったような金言があるの。だが金言というやつは、それ自体では値打ちがなく、逆理において値打ちがあるらしい。運は寝て待てという金言があるが、なんのやっぱりいい運は、起きて働かなければやって来ないらしい。因果は巡る小車の！　だがこいつだけは本当だったよ。そいつにぶつかったというものさ」紀州頼宣こんな調子に、淡々として話し出した。「俺はな、最近まで野心家だった。目を付けたのがキリシタン宗徒さ。神のためならどんなことでもする！　その熱烈の信仰ぶり！　よしよしそいつを利用してやろう！　で、様子をうかがったものさ。一人の傑物が現われた、イマニエルというスペイン僧だ。そこで早速手なずけたものさ。そいつの娘を側室にし、その代わり千代田の絵図面を、そのイマニエルにくれてやった。きゃつそいつを望んだからな。その娘の名をイサベラといった。そりゃア実際美人だった。肌なんかたいしたものだったよ。そこでわしはメチャメチャに愛した。ところがここに困ったことは、そのイサベラめ神の僕でな、わしを改宗させようとしたものさ。わしは改宗しなかったよ。そんな必要がなかったからさ。わしに必要なのは宗教ではなくて、キリシタン宗徒の団結心だったからな。それでとうとうイサベラめは、ひどく煩悶をして暇を取って帰った。子供があったっけ、町姫というな。そいつも連れて行ってしまった。惜しかったがどうも仕方がなかった。その後イサベラめは原の城で、殉難したということだ。さてところで原の城だが、そこへ一揆があつまった頃から耳よりな噂が聞こえてきた。というのはほかでもない。莫大な財産のあり場所を、明細に記した巻軸を、持っているという噂なのだ。よしよしそいつを奪い取ってやろう！　そこでな、わしはこっそりと、二人の家来を入城させた。銅兵衛という杉窪の長と、将右衛門という木地師の頭だ。……その

うち原の城は落ちてしまった。二人の家来からはたよりがない。すると去年の秋だったが、由井正雪めがやって来て、その巻軸を見せてくれたよ。なんというこいつばかなことだ！　わしがイマニエルへくれてやった、千代田の城の絵図面じゃないか！　そこでわしは感づいたものだ。こやつイマニエルめ、細工をやったなと！　つまりイマニエルめ、そいつを種にそんなおとぎばなしをこしらえあげ、宗徒の結束をかたくしたものさ。……人間の仕事ってこんなものだ！　わしはつくづく思ったものさ。自分で穴を掘って自分で落ちる！　でにわかにいや気がさし、ポンと野心まで捨ててしまったのさ。アッハハハなんと光殿、そんなものではござらぬかな」

ここで頼宣薄ら笑いをしたが、「いやもうこんな過ぎ去ったことは長く話すにも及ぶまい。光殿、光殿」と呼びかけた。「発掘旅行へ行かれたそうだが、めぼしい獲物があったかな？」

「はい、死蝋を発見しました」

「ほほう、死蝋？　それは珍しい。話には聞いたが、見たことはない。もちろん持って帰られたろうな」

「いいえ」と光圀残念そうに、「相好あまり美しく、それに神々しゅうございましたので、朱舜水先生が仰せられました。手に取らぬがよい。そっとして置けと」

「全くそうだ」と紀州頼宣、何を思い出したか膝を打った。「美しいものへは手を出してはいけない。意外に手傷を負うものでな。君尾の母、志乃という女、美人だったので手を出したところ、たちまちひどい目に逢ってしまった。やっぱりキリシタン信者でな。暇を出さなければならなくなったのだよ。ところで」

と頼宣けげんそうにした。

君尾安全

怪訝そうにした紀州頼宣、こう光圀へきいたものである。

「光殿、光殿。それにしても、君尾がわしの落胤だと、どういう所から探り出されたかな？」

「はい」と光圀微笑したが、「杉窪の銅兵衛臨終の際、伯父上へこのように申されましたそうで、『殿、殿、姫君を奪われました』と」

「ああそうそう、そういったよ」

「里人がそれを聞いておりまして、最近に知らせてくれました」

「そうであったか。よくわかった」それから心でつぶやいた。「町姫や京姫はどうしているかな？」それからなおも考えた。「たった一度だ。鸚鵡を使い、変なたのみをして来たが、爾来町姫消息がない。江戸にいるかな？　あってみたいものだ。――そうだ、あの時のたのみだったが、わけのわからないものだよ。島原という老修験者、正雪屋敷にとらわれている。是非とも許してくれるように！　これ以外にはなんにもなかった。――おれをうらんでいるかもしれない。……ところで京姫だが、今から思うと、将右衛門に預ける必要はなかった。正雪一味と手を切ってみれば、謀反人にされる気づかいもなく、家の潰れる気づかいもない。血統の絶えるような心配もない。山などにやらずに手近の所で、こっそり養育すればよかった。……だがマアマアそれもよかろう。山で気楽に暮ら

されるならな」ヒョイと光圀へ話しかけた。「光殿、しかし困りましたよ。君尾の母はキリシタン信者。柳営への恐れどうしたものかな？」

すると光圀、老成的態度で、「水戸家でお預かりいたしましょう」

「が、それでは同じことだ」

「朱舜水先生のお手もとで」

「ああなるほど。それならよかろう」安心したような様子であった。

同じ年の七月となった。その時起こったのが慶安謀反！

そうしてこれは失敗した。頼宣卿が手を引いたのが、最大の原因ではあったけれど、直接の原因は忠弥の短慮と、奥村八左衛門の裏切りとにあった。天草時行の先見が、ピタリと当たったということになる。その時行だがどうしたろう？　処刑された人数の中にもいない。彼、老獪逃げてしまったらしい。しかしその後も彼に関しては、なんら評判が立っていない。歴史の前にも現われていない。しかしこれは当然である。由来歴史というものは、明るい往来の真ん中で、花やかに大きく成功したものか、花やかに大きく失敗したものかの、外的行動ばっかりを、書き記したものにすぎないからである。天草時行陰性の梟雄、いつも薄暗い露路に巣くい、金儲けばかり考えている玉だ。で、恐らくその後といえども、やはりどこかの露路に巣くい、「儲からんもの、万事悪い！」――などと例のみつ口で、ネチネチと部下にいい含めながら、金儲けをしたということは、保証をしてもよさそうである。

それはとにかく、慶安騒動で、江戸が動揺をしている最中、日本橋の真ん中で、夏の熱い日を浴びながら、こんなことを話している人物があった。

「お京様をご存知ではありますまいか？」

「存じませんでございます。……君尾様をご存知ではございますまいか？」

「存じませんでございます」

臼井金弥と文三である。またパッタリ逢ったらしい。今だに探しているらしい。よろしい。探せ三十年も！　だが絶対に目付かるまい。

愉快の書面

「お父上、書面が参りました」

こういったのは舞二郎。

「なに、書面、どこからだな？」

こうきいたのは平左衛門。

小松原家の裏座敷、庭に夏の陽があたっている。

「珍しい人からでございます。飛脚が持って参りました。袴広太郎殿とお京との連署で……」

「なるほど、珍しい。どれ拝見」

父子二人の眼の前へ、一通の書面がひらかれた。

「おなつかしいお父上様お兄上様」お京の書面にはこう書いてあった。「紀州大納言家の妾腹の姫、それが本当かも知れません。でも妾はどこまでも、小松原家の娘でございます。その方がうれしいのでございます。おなつかしいお父上様お

兄様！　でも妾はただ今では、木地師の娘でございます。そうしてそれが妾には、決して不幸ではございません。妾は大変かわりました。たっしゃになったのでございます。高い山の上に住んでおります。森でも林でも広野でも、どんな所へでも歩けます。いくらか肉付きがよくなりました。贅肉付いたのではございません。固肥したのでございます。炎天にさらされて飛び廻っております。でも、ちっとも陽に焼けません。でも血色はようございます。粗末な食べ物をいただいております。それがマアなんて美味いんでしょう。よい景色でございます。緑が谷を埋めております。十里二十里三十里、そんなにも森林がつづいております。いろいろの獣やいろいろの鳥が、そこに平和に住んでおります。谷川にはハヤがいます。ああそのハヤがピョンピョンと、水面へ飛んで陽に光る時、どんなにどんなに可愛いでしょう。手裏剣のようでございます。なんてここには花が多いんでしょう。野生の野花でございますが、造った花よりずっとずっと、綺麗で清らかでございます。朝な朝な妾は花の香で、むせかえるほどでございます。お月様が上ると三倍に見えます。空気のかげんでございましょう。雨後にあらわれる大きな虹は、山から山へ橋をかけます。それこそ本当に渡って行けそうなほど、はっきりした虹でございます。でも妾は決して決して、遊んでばかりはおりません。働いておるのでございます。朝起きるとすぐに仕事場へ行きます。いろいろの物をこしらえます。なんて立派な仕事でしょう。この頃つくったものでございます。大きな滝が落ちております。大きな車が廻っております。それがいろいろの細かい機械を、クルクルクルクル動かします。誰もかもみんないい人です。でも一つだけ困ることがあります。たれもかもがみんな妾を、あんまり尊敬しあんまり親切にし、女王様にすることでございます。断わっても承知してくれません。妾は女王でございます。ですから人より倍も二倍も、立ち働かなければなりません。働くってなんていいことでしょう。何もかも忘れてしまいます。つまらないいやな思い出など！　昨日峰の方へ上りました。お花畑の花盛り！　うっとりするようないい景色！　敦盛草を摘んで来ました。書面に封じてお目にかけます。お父上様お兄上様！　お目にかかりとう存じます。どうぞお出かけくださいまし。あのそれからもう一つ、嬉しい恥ずかしい出来事が、わたしの身の上に起こっております。でもそのことはわたしの良人から、申し上げることと存じます。これからもお消息を申し上げます。なつかしいお父上様お兄上様！」

「友よ！」と広太郎は書面の中で、親しく舞二郎を呼びかけていた。

剣侠剣を捨つ

「友よ僕の妻は受胎した」広太郎の書面はこう書いてあった。「僕達二人の結婚については、あるいは是非とも君達父子の、許しを得なければならなかったかもしれない。では許してくれたまえ！　その後の僕達の経歴については、とても書面では書きつくせない。まして心的変化などはね！　だから君達にお願いする。是非とも二人で打ち揃って、僕達の郷へいらっしゃいと！　で詳細の地図を添えた。僕は待っている。妻

も待っている。僕らの仲間はみんな待っている。でここでは簡単に書こう。僕はその後いろいろの場所で、実にさまざまの経験をした。そうして最後におちついたのさ！　木地師の大将という今の位置にね。もしこの僕が剣侠（けんきょう）なら――剣侠だったとは思わないがね、――剣侠未練なく剣を捨てたのさ。そうしてハンマアを取ったのさ。これが現在の生活だ。友よ実際剣というものは、いついかなる時代でも、捨てがたいもののように思われるねえ。つまり護身という意味において。だがはたしてそうだろうか？

護身護身といいながら、人ばかり斬るのはどうしたものだろう？

だがマアマア理屈はやめよう。とにかく剣というものは、ひどく捨てがたいものらしい。だから捨てなければならないものさ！　そこで僕は捨ててしまった。人間として飛躍したよ。だって友よ、そうではないか。ぶちこわす方から足を洗って、造り出す方へ向かったんだからね。僕は非常に楽天家になった。ふさぎの虫なんかけし飛ばしてしまった。それは環境がいいからだ。木地師というものの生活は、全く人を神経質から救う。君は学者だ。やって来たまえ！　木地師なるものを研究してみたまえ。きっと得るところがあるだろう。ところで君はきくかも知れない、何をいったい造り出すのかと。荒々しい自然生の樹をたおし、人間に端的に必要な、日用品を造り出すのだよ。これは実際いいことだよ。『芸の術』という名のもとに、つや布巾をかけ、とくさをかけ、小粒な、まるまっちい、ピカピカ光る――そうでなければいぶし銀的の、たいして要でもない小道具類をつくり、威張りっこをするのが流行している、きょうこの頃の浮世には、わけてもこれはいい事だよ！　だがマア皮肉はやめにしよう。妻はどうやらこの書面で、いかにも女性らしい美しい、自然描写をしたらしいが、そういうところもこの土地にはある。だが本当をいう時は、この土地の自然は雄渾（ゆうこん）で、男性的で荘重だよ。暴風の晩など想ってくれたまえ！　大森林がほえかかって来るよ！　大雪崩（おおなだれ）の真昼を想ってくれたまえ！　おおかみの群れが逃げ込んで来るよ！　そいつらと僕は戦うのだ！　そうしていつも僕らは勝つ！　くらしにくいという議論が起こって、くらしにくさがより一層、人間の身に感じるらしい。下界の生活がそいつだよ。ところでここには議論がない。だからくらしは大変楽だ。将右衛門という老人がいる。随分愉快な老人で、これまでの木地師の大将なのさ。ところが今では隠居して、その席を僕に譲ってくれた。隠居のくせによく働く。この老人には感化されたよ。この老人を見るだけでも、友よ、やって来る必要があるよ。では友よ――義兄（あに）だったね！

君の父上平左衛門殿へ――そうそう僕にもお義父（とう）さんだったね？　どうぞよろしくいってくれたまえ」広太郎の手紙はこれで終わった。

二人は顔を見合わせた。

「行こう舞二郎！」と平左衛門はいった。「わしは老年だが大丈夫だ。山駕籠へ乗ったら行けるだろう」

「行きましょう行きましょう！」と舞二郎がいった。「私も病身でございますが、山駕籠へ乗ったら行けますとも！」

天童とは？

数日経ったある日の早朝、小石川掃除町の小松原屋敷から、二人の武士が旅立った。ほかならぬ平左衛門と舞二郎、歩けるだけは歩いて行こう。山道へかかったら駕籠へ乗ろう。で、ひろって行くのである。娘と婿とに逢う旅だ。妹と義弟とに逢う旅だ。二人の顔には喜色があり、二人の歩みには活気がある。真夏の早天水蒸気を含み、胡粉をとかしたように生白い。しかしその奥には蒼々とした、明るい希望そのもののような、晴天が約束されてある。

「舞二郎や、地図を持っているだろうね」

「はいはい持っておりますとも。……敦盛草をお持ちですか」

「持っているとも持っているとも。娘から送ってくれた花だからな」

うれしそうに二人話して行く。旅人の姿がチラホラ見える。憂いを持っている旅人もあろう、悲しみを抱いている旅人もあろう。だが二人には誰もかもが、みんななつかしく思われるのであった。やがて二人は木曽街道へはいった。信濃と越後の国ざかい、乗鞍岳の大渓谷、そこに出来ている木地師の郷、そこを眼差して行くのである。袴広太郎とお京とが、そこに待っているのである。四人逢った時の光景は？　愛情深いものであろう。そうしてそういう光景は、かえって描写しない方が、情趣を深めるに相違ない。とまれ二人は歩いて行く。下板橋からわらびの方へ、浦和から大宮、上尾の方へ。道には野茨、香水のようなにおい！

さて二つ三つの蛇足を加え、この物語大団円としよう。二本の巻軸は紀州頼宣から、イマニエル司僧へくれたもので、巨宝存在の伽話をつくり、宗徒の結束をかためたのも、ほかならぬイマニエル司僧であった。しかし司僧はその後において、鮮血地にして余りに悲惨な、殉難宗徒のありさまを見、唯一なるものを疑うようになり、おりから負傷した天童もろとも、戦死といつわって唐櫃へ隠れ、原の城を脱出し、富士見高原へ行ってしまった。内情を知っていたのは将右衛門と銅兵衛。二人ながら頼宣の腹心であったが、入城以来心が変り、イマニエル司僧の信者となった。だがそれにしても木地師の将右衛門、なぜ二本の巻軸へ、隠語など認めたものだろう？　自殺者が自殺をする場合、何かこの世へ痕跡を残す！

それと全く同じ意味で、あれだけの隠語を書いたまでである。その後に原の城をぬけ出したのが、杉窪の長の銅兵衛で、かれはその時思ったものである。「隠語が浮世に現われたなら、また一騒動起こるだろう。イマニエル司僧様や天童様が、詮議されないものでもない」で盗み取って焼きすてようとしたが、生憎一本しか手に入らず、それを持って故郷へ帰ったが、その後も探していたのである。もう一本の巻軸を、手に入れたのが時行で、これは真実その巻軸に、巨宝のありかが書いてあるものと信じ、さらにもう一本の巻軸を、目つけ出そうとしたのである。いやいや時行ばかりでなく司僧と将右衛門、銅兵衛以外のものは、みんなそんなように信じていたのである。

ところで天童とは何者であろう？　天草一揆の表面の大将、

天草四郎時貞であると、解釈するのはどうだろう？　あまりに荒唐無稽（こうとうむけい）かしら？　とまれその後山崩れが起こり、湛慶滝も、富士見の高原から消えてしまった。残るは伝説ばかりである。正雪、時行の連合軍へ、イマニエル司僧や将右衛門が、唐櫃を見せるのを拒んだのは、死蝋となった天草時貞を、唐櫃の中へ封じ込め、滝壺の中へ隠してあったからで、聖なる犠牲者の墓をあばくことは、何者といえども欲しないのではないか。